
なつまほ

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なつまほ

【Nコード】

N5203Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

七年後の今日、ここに集まろう。小学校四年生だった笑歌たちは、そう約束していた。この場所に埋めたタイムカプセルを掘り起こすために。

高校二年生になった江窪笑歌^{えくぼえみか}は、親友の吹浦菫美子^{ふくらはぎみこ}とともに、今では廃校となってしまった母校の小学校へと向かった。時間前に着いてしまった彼女たちの前に、真っ先に現れたのは、小さくて幼い印象の、ロリちゃんこと夏陽蚕ちゃん^{なつひかいこ}だった。

その後、続々と友人たちが集まってくる。最後に現れたのは、笑歌

が想いを寄せていた海路潮騒うなしおさしだった。

メンバーが集まり、タイムカプセルを掘り返す彼女たちだったが、なぜか見つからない。そのうちに激しい夕立に襲われ、廃校の校舎内へと入る。

そこで海路は白状する。タイムカプセルを校舎内のある場所に隠したと。かくして、タイムカプセルを求めて宝探しゲームが開始されたのだった。

セミが鳴いている。

首筋を伝ってしたたるわたしの汗と、その声を共鳴させるかのよう。
うじ。

夏休みに入って一週間ほど経ったこの七月の終わりの昼下がりに。
じりじりと照りつける日差しを全身に浴びながら、わたしは親友の美子ちゃんみことふたり、並んでこの見慣れた商店街を歩いていた。

ど田舎というほどではないにしても、過疎著しい、わたしたちの住むこの町。

商店街とはいっても、寂れた雰囲気に含まれていて人通りもそれほど多くないのだけ。

長期の休みに浮かれているのか、はしゃぎ声を上げる小学生たちが、暑さにも負けず飛び跳ねながら、わたしたちの横を駆け抜けていった。

わたしと美子ちゃんは高校二年生。

誕生日はふたりともまだ過ぎてないから、十六歳ということになるけど、どちらにしても、もう夏に浮かれて元気に飛び跳ね回るような年齢じゃない。

というわけで、このうだるような暑さにはやきながらも、だらだらと商店街を闊歩していた。

「暑いな〜」

バシバシ。

美子ちゃんの声とともに、ちよっぴり軽い音が響いた。その音と

一緒に、少しだけ痛みも襲いかかってくる。

「痛いよ〜。はたかないで〜」

わたしは頭を両手で押さえて抗議の声を上げる。

バシバシとわたしの頭をはたいていたのだ、美子ちゃんは。

「だって、暑いし〜」

バシバシ。

「だからって、どうしてもはたくの〜？ 意味わかんない〜」

「それはあんたの頭が、と〜ってもはたきやすそうに、さらさらチユラルヘアーであたしを誘ってるからよ!」

バシバシ。

「あつあつ、誘ってなんかない〜」

バシバシ。

「あ〜つ〜い〜」

「言葉にすると余計に暑くなるよ〜?」

バシバシ。

「あつ〜」

「正論禁止!」

「不条理だよ〜」

バシバシ。

「だいたい、夏なんだから、暑いのは当たり前なんだよ。だから、暑いのも楽しまないよ。」

バシバシ。

「あたしはそんなの、楽しみたくないわ。暑苦しいし、汗でベタベタだし、汗臭くなるし！」

勢いよくわたしの頭をリズムカルにはたきながら、美子ちゃんの言葉の応酬は続く。

「え〜？ えみか、汗臭い〜？」

わたしは暑いのは結構平気なんだけど、汗のニオイとかはやっぱり気になるもので。

くんくんくん。わたしは右腕を挙げ、半袖の袖口に鼻をくっつけてニオイを嗅いでみた。

あっ、えみか、っていうのは、わたしの名前。わたしはお喋りするときには、自分のことを「えみか」と名前で言う。

目上の人と話すときにはちゃんと「わたし」と言うようにしているのだけど、友達同士するときにはついつい小さい頃からの癖が出てしまう。

美子ちゃんが、「可愛いし、そのままでもいいんじゃない？」とやってくれたので、今ではあまり気にせずに使っているのだ。

それはともかく、わたしがちょっと焦り気味でニオイを気にしているのがわかったからだろうか、美子ちゃんがフオローの言葉をかけ

てくれた。

「いや、べつにあんたは臭くなんてないけどさ」

「わっ、いいよかった」

美子ちゃんの言葉を受けて安堵したわたしは、思いっきり笑顔になつて彼女の腕にぎゅっと絡みつく。

「ぐあっつ!」

バシバシ。

あまりお上品ではない雄叫びを上げながら、美子ちゃんは容赦なく、わたしの頭を平手で打ちつける。

ショートカットというほどではないけど、短めでストレートのわたしの黒髪が、美子ちゃんにはたかれるたび、ふあさりふあさりと音を立てて揺れていた。

「あうっ、はたかないですよ」

バシバシ。

わたしの抗議になんて耳を貸すわけもなく、美子ちゃんの平手打ちは連続コンボ攻撃となっていた。

「臭くはなくても暑苦しいんだから、くっつくな! あたしには、そっちの趣味はないんだから!」

なにやら美子ちゃんが変なことを言う。

「えっ? なにそれ? そっちってどっち?」

「くっ、この天然娘が!」

バシバシ。

美子ちゃんは、やっぱり容赦ない。

「あうあう。はたかないでっば〜」

こうして夏の商店街には、わたしたちふたりの明るいはしゃぎ声と、美子ちゃんが頭をはたくバシバシ音が、止むことなくこだまし続けていた。

……夏に浮かれて元気に飛び跳ね回る年齢ではない、なんて言ったのは、すっぱりと撤回しておきます。

わたしは江窪^{えくぼ}笑歌^{えみか}。近所の高校に通う二年生だ。母校の小学校があるこの町を出ることなく、こつして高校生になった今も、この界隈を中心に生活している。

それは肩を並べて歩いている親友の吹浦^{ふくら}萩美子^{はぎみこ}ちゃんも同じだ。……実際は、背丈に差があるから、肩の高さは並んでいないのだけど。……ふん、どうせわたしはチビですよ。

一応ぎりぎり進学校と呼ばれるレベルの高校に、美子ちゃんともに通っているのだけど、わたしはどういうわけかバカにされることが多いです。

そりゃあ、成績は下から数えたほうが早いくらいではあるけど、落ちこぼれてほどもないのに……。

そういった勉強に関することってわけじゃなくて、なんていうかわたしはちよつと抜けているというか、ドジっ子な傾向にあるらしく、マヌケな失敗をやらかしてしまうことが多い。

……自分で言ってるて恥ずかしいけど……。
だけど、そんなふうにわたしがバカにされるときは決まってる、

「笑歌はバカなんじゃないわっ！ 天然なのよっ！」

と、美子ちゃんがフォローしてくれるのだ。

……これってフォローなのかな……？

美子ちゃんは、あたかもそれが日課であるかのように、わたしの頭をバシバシとはいたたりするし、本当に親友という認識でいいの

か怪しいと思わなくもないのだけど。

でも彼女と一緒に、毎日楽しく高校生活を満喫しているのは紛れもない事実。

だから、感謝感激雨あられ。わたしは思わず美子ちゃんを拝んでしまつくらい気持ち良かった。

「……………なにやってんのよ、笑歌。相変わらずおかしいわね、あんた」
フライドポテトを口にくわえながら、ぼそつとつぶやく美子ちゃん。

わたしは思わず、本当に彼女を拝んでしまっていたらしい。
それにしたつて、相変わらずおかしいなんて、それも真顔で言うてのけるなんて……………。

本当に親友なのか、疑問符がちらつくわ。

それはともかく、わたしたちは今、ファーストフード店に入ってアイスティーを飲みつつ、ハンバーガーとフライドポテトを食べていた。

飲み物は、わたしがミルクティーで、美子ちゃんがレモンティー。これがいつものパターンだった。

わたしはレモンティーも飲みたいから、美子ちゃんからちよつともらつのだ。

代わりに美子ちゃんにも、わたしのミルクティーをちよつとあげる。

こうしてお互いに二種類の味を楽しむのが常となっていた。

ハンバーガーのほうも同じように、美子ちゃんからひと口もらつたり、代わりにひと口あげたりして、二種類の味を楽しむ。

こんなふうになつたと美子ちゃんは、なんでも、とまでは言わな

いけど、いろいろなことを共有して一緒に感じながら生きてきた。だからやっぱり、親友なのだ、美子ちゃんは。

「はい、ひと口どうぞ」

「……あなたの食べかけは、相変わらずベチャベチャで汚ったないわね、ほんと」

ぱくつ。

なんだかひどい文句を言いながらも、美子ちゃんはわたしが差し出したテリヤキバーガーにかぶりつく。

わたしと違って、彼女の食べ方は確かに綺麗だった。

「む、美子ちゃん、汚いなんてひどいよ……むぐつ」

尖らせたわたしの口に、美子ちゃんが紙ナプキンを押し当てる。

「口の周りをケチャップだらけにしながら、なにを言うか。まったくも、あんたってほんと、しょうがないんだから」

ぐちぐちと文句を浴びせながらも、美子ちゃんは丁寧にわたしの口を拭いてくれる。

「む……。でも、ありがとう」

「はいはい」

彼女は、いつものことよ、とでも言わんばかりの仕草で紙ナプキンをたたんでトレイに置くと、再びポテトを一本つかんで口に運ぶ。わたしたちが今、こうやってファーストフードに舌鼓を打っているのは、まだ時間があるからだだった。

ふたりとも、夏休み中だというのに、高校の制服を身にまとして

いる。

それは、そういう約束だからだ。

「それにしても、なんかちょっと、ドキドキするよねっ!」

これから数時間後のことを考えて、思わず笑顔が溢れていたわたしに、

「うん、そうね」

美子ちゃんも素直にそう答えてくれた。

今からちょうど七年前。

小学校四年生だったわたしは、仲のよかった数人の友達と一緒に、夕陽によって赤く染められた小学校に集まっていた。

みんな、思い思いの宝物を手に持っている。

そしてそれらの宝物をブリキ缶に入れて、土の中に埋めた。

そう、タイムカプセル。

未来の自分たちへと贈る、時空を超えたプレゼントだ。

学校のとある場所に埋められたそのタイムカプセルを、今日、掘り返す約束になっていた。

わたしと美子ちゃんは今、そのために小学校へと向かっている途中なのだ。

ちょっと時間が早すぎたから、こうして涼みがてら、ファーストフード店でまったりしているってわけ。

一緒にタイムカプセルを埋めたときに誰がいたのか、といったことは、ぼーっとしたわたしでもさすがに覚えているのだけど。

自分がいつたいなにを埋めたのかについては、全然まったくこれっぽっちも覚えていなかった。

「あなたは忘れっぽいからね。でも、忘れてるほうが、このイベントをよりいっそう楽しめると思うわ。だからラッキーと思いなさいな」

美子ちゃんには、そう言われた。

小学校四年生の頃に仲のよかった友達、ということ、幼稚園から一緒だった美子ちゃんも、もちろんタイムカプセルを埋めたメンバーのひとりだった。

でも、それ以外の人たちとは、今は全然会っていない。

地元に残っている人もいるかもしれないけど、なかなか会う機会なんてないものだ。

だから、わくわくドキドキ、楽しみは募る。

「うふふふ」

思わず微笑みがこぼれ出してしまうわたしを、美子ちゃんはいつもながらの優しい瞳で見つめていた。

わたしたちの母校 東山小学校は、生徒数の減少という理由で、三年ほど前に廃校となってしまった。

山あいの村というわけではないものの、わたしたちの住むこの田舎町はとつてもものどかな雰囲気を漂わせている。

一応電車は通っているのだけど、朝夕の時間帯でも一時間に一、二本程度しかない。

そのため、高校生といえども通学するのはなかなか難しく、この町を出ていく人が多いのだ。

実際、同じ高校に進学した美子ちゃん以外、中学校時代の友達はみんな、それぞれ自分の学校の寮に入ったり、下宿したり、といった感じだった。

タイムカプセルを埋めたとき、ちょうど七年後の今日、夕方四時に集まろうと決めた。

高校生になっっているはずだから、みんなそれぞれの学校の制服で来よう、ということも約束した。

中学くらいまではたびたび会うこともあったけど、高校に入ってから全然会っていないメンバーばかり。

みんなが本当に今日のことを覚えているのか、ちょっと不安になっってしまう。

とはいえ、今日集まるということを、改めて連絡し直したりはしていない。

覚えている人だけ、集まればいいよ。そういう約束でもあったのだ。

でもわたしは信じている。きっとみんな、来てくれるってことを。

もちろん、地元に住んでいるわたしや美子ちゃんと比べたら、町を出た人たちはここまで来るのも大変だろう。

だけど、思い出は誰にだって大切なもの。

そのためなら、たとえどこにいたとしても、この町に戻ってきてくれるに違いない。

タイムカプセルを埋めたメンバーは、毎日のようにはしゃぎ回って一緒に遊んでいた友達だったのだから、なおさらだ。

わたしだけではなく、あるとき一緒にいた全員にとって、かけがえない思い出となっているはずなのだ。

ファーストフード店で少し休んできたとはいえ、日差しはまだ強い。

約束の四時まで、まだ一時間以上あった。

でも、はやる気持ちを抑えられなかったわたしたちは結局、早々にファーストフード店を出て、こうして時間前に目的地へと到達してしまっていた。

汗が首筋を伝って流れ落ちるのを感じながら、わたしは美子ちゃんとふたり、廃校となった東山小学校の前に立つ。

廃校となって三年。

人の気配はないものの、校舎や体育館など、すべてがそのままの姿でたたずんでいた。

廃校となった小学校とはいっても、校舎を解体したり敷地をなら

したりするのにもお金がかかる。

田舎町といった様相のこの町に、そんなお金を出せる余裕なんか無いということなのか、母校は通っていた当時と変わらない姿で、こうしてわたしたちを迎え入れてくれた。

それはまるで、今日わたしたちがここに来るのを待っていてくれたかのようにすら思えた。

もともと夏休みなのだから、仮に廃校となっていなかったとしても、人の気配がないのは変わりなかったのかもしれないけど。

「懐かしいね」

「うん、そうね」

感慨にふけていたわたしの声に、美子ちゃんも同意を示してくれた。

わたしは美子ちゃんとふたり、卒業してから入ることのなかった小学校の門の中へと、なんとなくドキドキしながら、一步、意を決して足を踏み出した。

「あつ、お久しぶりです」！

まだ早い時間だからということでお断りしていたわたしたち。

いきなりかけられたその声に、思わずびくつと身を震わせてしまった。

声のしたほうを振り返ると、そこには可愛い女の子がひとり、微かな笑顔をわたしたちに向けながら立っていた。

「あ~~~~~！ ……え〜つと……、ごめん、誰だっけ……？」

わたしは彼女が誰なのか、すぐには思い出せなかった。

あれ〜？ 変だな〜。一緒にタイムカプセルを埋めたメンバーだったら、ちゃんと覚えているはずなのに。

やっぱり、忘れてるだけ？ わたしって、ここまで大ボケだったのかな。

……美子ちゃんに尋ねたらきつと、あんたはどこまでも大ボケだわ、なんて答えが返ってきちゃうだろうけど。

と、その美子ちゃんのほうも、懸命に記憶をたぐっている、といった様子だった。

「はみゆ〜ん、覚えてないですか？ わらちは、なっひかいこ夏陽蚕ですよ〜」

その女の子は、ちょっと頬を膨らませながら、そう名乗った。

「あ……あ〜、そっかそっか、思い出したわ。蚕ちゃん……。って
いうか、ロリちゃんね〜！」

彼女の名前を聞いて、美子ちゃんかのどもとからようやく飛び出したというふうに、たぐり寄せた記憶を口に出して反芻していた。

「ロリちゃん……、ああ、そうね〜！ ロリちゃんだ！ わ〜、久しぶり〜！ 相変わらず、可愛いね〜！」

美子ちゃんという言葉を聞いて、わたしもやっと思い出してきた。

わたし自身も背が低いんだけど、さらに輪をかけて小さくて、とっても可愛らしい感じの蚕ちゃん。クラスみんなに、可愛がられていたんだっけ。

「はみゆ〜ん、すり込み、ちょっとドジっちゃったかもです〜……」

懐かしさにはしゃいだ声を上げるわたしと美子ちゃんの前で、
ちゃんはなにやらよくわからないことをつぶやきながら頭を抱えて
いた。

「あの〜……、さすがにロリちゃんってのは、嫌なんですけど〜…
…」

蚕ちゃんは口を尖らせて言葉を返してくる。

そんな彼女の様子は、そのあだ名がピッタリというほどの可愛ら
しさだったのだけど。

「え〜？ 当時は喜んでたじゃない」

「うん、可愛くていいと思うよ〜」

美子ちゃんの声に、わたしも同意の言葉を重ねる。

ふたりがかりの攻勢に、蚕ちゃんも納得してくれたのか、はたま
た諦めたのか、

「はみゅ〜ん……。わかったです、もうそれでいいです。わらちは、
ロリちゃんですー！」

はつきりとそう言い放った。

ただど、そんな声にもツッコミを入れるのが、美子ちゃんの特
性というもので。

「自分で『ちゃん』づけつてのも、なかなか図々しいわよね〜」

「はみゅ〜ん！ わらちは、どうすればいいんですか〜………」

涙目でいじける蚕ちゃんを、そのあと美子ちゃんはひたすらい
じりまくった。

うん、やっぱり楽しい。

蚕ちゃんはちょっとかわいそうかもしれないけど、それでもこんなやり取りだって、懐かしさを感じさせるイベントと言えるだろう。いじられて涙目になってる蚕ちゃんのほうにしたって、明るい笑顔を浮かべているのだから。

もう少しすれば、他の人たちも集まってくるはずだ。

それまで、こうして他愛ないお喋りに興じながら、待っていればいいんだわ。

わたしはそう考えて、蚕ちゃんへの攻撃に加担するのだった。

「それにしてもやっぱり、ロリちゃんは小学生並みの小ささだよねっ！」

「はみゅ〜ん！ 笑歌ちゃんまで一緒になって、ひどいです〜！」

蚕ちゃんの喜びの音が、まだ暑さの残る夏の空気に響き渡る。

「喜びの声じゃないです〜……」

などという彼女のつぶやきは、当然のごとく無視する方向で。

「笑歌ちゃんだって、わらちと大して変わらない背の低さですよに〜」

……

「ふっふっふ、ぱつと見、2センチくらい高いよっ！」

「あまり変わらないってば」

バシバシバシ。美子ちゃんがわたしの頭をはたく。

「はっあう〜、わたしの背が伸びないのは、絶対美子ちゃんのせいだよ〜！」

わたしたちのじゃれ合う明るい声は、懐かしくたたずむ校舎に反響しているのか、静かな廃校の敷地内にこだまし続けていた。

「それにしても、懐かしいわね。」

美子ちゃんが少し薄汚れた校舎を眺めながら、そつつぶやきを漏らす。

「うん……。当時のいろいろな思い出が、白波のように次から次へと繰り返し押し寄せてくるかのよう……」

わたしも昔を懐かしむ遠い目になって、小学校時代に思いを馳せていた。

とつても恥ずかしいセリフのような気もするけど、それでも美子ちゃんはいつもみたいにかかったりなんかせず、わたしと同じようにちよつと潤んだ瞳で校舎を眺め続けていた。

そんなわたしたちの様子を、ただ静かに見つめている、ロリちゃんこと、蚕ちゃん。

相変わらず可愛い彼女に、思わず顔も緩む。

「……あれ？」

小学校の当時、蚕ちゃんと遊んだ記憶を思い返そうと躍起になってみたものの、わたしはまったく思い出すことができない。

「……？」一緒に遊んだりしていた友達だっことはわかっているのに、どうして一緒に手を取り合っただけで遊んでいる場面を思い起こすことができないのだろうか？」

「……ねえ、美子ちゃん……」

つい不安になって、美子ちゃんの袖を引っ張る。わたしって、ここまで記憶力なかったんだっけ？

……もちろん声に出して彼女に尋ねてみれば、記憶力ゼロなのは昔からじゃない。あんた自覚なかったの？　なんて答えが返ってくるだろうけど。

でも、思った以上の不安さが表情からにじみ出ていたのだろうか、美子ちゃんはそっとわたしの肩を抱きしめてくれた。

言葉にしなくても、わたしの気持ちをわかってくれているのだ。

わたしは美子ちゃんを抱きしめ返しながら、胸をほわ〜んと温かくさせていた。

「大丈夫よ。廃校だからってべつに怖くないわ。お化けなんてないから、安心しなさいな」

………力いっぱい、勘違いされてました。

全然わかってきてないじゃん！

うう、感動した時間を返せ〜！

そりゃあ確かにわたしは、昔っから怖がりだけどさ……。

そっいえば、みんなしてわたしを怖がらせて面白がっていた、なんてこともあったっけ。

………やっぱりわたしは昔っから、いじられキャラだったようです。

廃校となったこの東山小学校の他に、わたしたちの住む町にはもうひとつの小学校、西山小学校がある。

今では、この付近に住む小学生も、そっちの小学校に通っているはずだ。

結構距離があるから、通学も大変だろうな、と思うのだけど。

わたしみたいにトロい子だと、一時間以上かかるんじゃないだろうか。

不便な時代になったもんだ。思わず年寄りじみた感想を持ってしまおう。

それはともかく、わたしたちが毎日通っていた頃、この東山小学校は一学年に一クラスしかなかった。

だから、同じ年の人はみんなクラスメイト、ということになる。

当時、この町にはふたつの小学校があったわけだけど、中学のほうは中山中学校ただひとつだけだった。

そのため、中学校に上がると一学年に二クラスできることとなり、そこでクラス分けというものを初めて体験した。

ちなみにわたしと美子ちゃんが今通っている東山高校は、こんな田舎町にありながらも一応は進学校ということになっているので、それなりに人は集まってくる。そのため、大きな寮まで完備していたりするのだ。

もちろん、近くに住んでいるわたしと美子ちゃんには、まったく必要ないのだけど。

高校の話は置いておくとして、小学校時代からの友達で、中学でも同じクラスになれたのは、美子ちゃんと、そしてもうひとりの男子だけだった。

小学校時代からの友達というと、今日集まる予定のメンバーだけでも八人くらいいたのだから、わたしも美子ちゃんも、微妙に運が

悪かったと言えるのかもしれない。

「そついえば笑歌、今日来るはずよね。……あんたの愛しのキミが」
ニヤニヤと笑みを浮かべてそんな言葉を向けてくる美子ちゃん。
愛しのキミ、というのがすなわち、中学でも一緒のクラスになれた男子、海路潮騒うなじしおささくんだった。

「ちょ……ちょっと、美子ちゃん、なに言ってるのよぉ〜！ べつに、そんなんじゃないってば〜！」

真っ赤になっっているのが自分でもよくわかったけど、そんなことに構ってはいられない。わたしは目いっぱいいの否定を返す。

だってほんとに、そんなんじゃないから。

そりゃあ、海路くんのは嫌いじゃなかったし、ちょっと気になる男子だったのは確かだけど。

だけど、当時のわたしはまだ、好きとか恋愛とか、そういうことを全然気にしてなんていなかった。美子ちゃんも含めてみんなと一緒に楽しく過ごせていれば、それで幸せだったのだ。

いやまあ、それは今でもあまり変わっていないのだけど。

男の子に対して、いいな〜って思ったりすることもあるにはあるのだけど、親友である美子ちゃんを好きって思う気持ちと、そんなに変わらないくらいにしか思えない。

美子ちゃんに言わせれば、お子ちゃま、ということになるんだろ
うな。

でも、べつにいいじゃん。わたしはわたしだもん。

それはともかく、その海路くんという男子は、中学に入って最初

の夏休み前くらいだったと思うけど、お父さんの転勤の都合で転校することになってしまった。

転校したあとは連絡を取ったりもできなかったから、もし今日来てくれるのなら、四年ぶりくらいの再会ということになる。

記憶の中の海路くんは中学一年生の姿で止まっているのだから、高校二年生になった彼がどんな感じになっているのか、それを考えただけでも楽しい気分になる。

も……もちろん海路くんだけじゃなくて、他の友達も同じくらい、どうなっているのか楽しみなんだけども！

「笑歌、あんたひとりで、なに真っ赤になって焦ってるの？ 相変わらずの妄想癡炸裂中ってわけ？」

美子ちゃんの容赦ないツッコミで、わたしはさらに顔を真っ赤に染める。

「あはっ、笑歌ちゃん、真っ赤っかです！ トマトみたいですよ！」

形勢逆転したのがそんなに嬉しいのか、蚕ちゃんまでわたしにからかいの言葉をぶつけ始めていた。

「むっ、ロリちゃんにからかわれるなんて、なんか納得いかないよ〜！」

思わず彼女に向けて不条理な反論を放ってしまうのも、当然の流れというものだよね、うん。

「はみゅ〜ん、それこそ、納得がいかない言われようですよ〜！」

文句を返してくる蚕ちゃん言葉を、わたしは当たり前のようにスルーするのだった。

「あつ、そうだ。今日集まる場所って、あそこじゃなかったっけ？」
ふと思い出した記憶。

「そういえば、そうだったわね」

美子ちゃんも思い出したみたいだ。

わたしが指差すその場所には、青々とした葉が生い茂る一本の大きな木が立っていた。

「みんなの木……。懐かしいっ！ あの頃と変わらないね」

「卒業してから五年も経ってないんだから、これくらいの大木ともなったら、そうそう変わるはずがないじゃない」

感慨にふけるわたしに、冷静なツツコミを入れる美子ちゃん。
バシバシ。

当然ながら彼女の手は、わたしの頭を容赦なくはたいているのだ
けど。

「あつあつ、美子ちゃん、痛いってば」

いつもどおりのわたしと美子ちゃんのふざけ合い。

その様子を、蚕ちゃんは微かな笑みをたたえながら、眺めていた。

「ふたりは本当に、仲がいいですね」

そう言ってくれる彼女に、美子ちゃんがすかさず答える。

「ま、笑歌はちょっと異常だけどね。あっちの趣味があるからさ、この子」

「あはっ、なるほど」

納得顔の蚕ちゃん。

「って、ちょっと、なに納得してるの？ だいたい、あっちの趣味ってなんなのよ？」

わたしの声に、ふたりとも答えを返してはくれず、ただただ面白そうに笑い続けていた。

ひとしきり笑われ続けたあと。

わたしたちは、話題に出したきり忘れ去られていた、かつて「みんなの木」と呼ばれていた大木の前まで移動してきた。

笑われていたわたしとしては、どうして笑われていたのかもよくわからないし、ちょっと納得がいかないとこもあつただけだ。

あまり細かいことは気にしない主義だから、ふたりを問い質したりなんて野暮なことはいないのだ。

みんなの木は、随分昔に卒業記念樹として植えられたクスノキだった。

ひとときわ高く育ったクスノキは、小学校の校庭の片隅で、とっても大きな存在感を漂わせていた。

ずっとこの小学校の生徒たちを見守ってくれていた大木が、今では生徒の声を聞くこともなく、乾いた風にさらされ続けているなんて。

なんだか、すごく悲しい気持ちになってしまう。

それは、美子ちゃんや蚕ちゃんも同じだったのだろう。みんなの木を見上げる彼女たちは、ひと言も口を開かなかった。

「あら？ 笑歌さんと美子さんではありませんか？」

おっとりとした声が響いたのは、わたしたちがそんな静かな雰囲気きんぎに包まれているときだった。

「あら、あなたは……頼ほほさんね」

「わゝ、頼ほほさん、久しぶり〜！」

美子ちゃんとわたしは声を重ねて、話しかけてきた彼女に歓迎の意いを向ける。

彼女は頼財ほほざい閥ぼつのご令嬢れいじやう、頼桃ほほももさん。そう、大金持ちのお嬢様ぢやうさまなのだ。

お金持ちの世界では下の名前にさんづけで呼ぶのが流儀らしく、彼女も他の人の名前を呼ぶときには、下の名前にさんづけするのが常とこだった。

頼さんがこんな田舎町に住んでいたのは、彼女のお母さんが自然に困こままれて暮くらしたいとわがまを言ったからだったらしい。

でもお父さんのほうは、ひとり娘の頼さんの教育をしっかりと考えていたようで、小学校卒業とともに私立のお嬢様中学校へと入学させることにした。

その中学校は全寮制だったため、彼女はこの町を出ていった。つまり頼さんとは、小学校卒業以来の再会ということになる。

娘さんだけをこの町から遠い都会に行かせるわけにはいかなかったのだろう、両親も学校の近くに家を建て、そちらに移り住むことになったのだとか。

「その制服、白鷺学園よね？ 今でもやっぱり、お嬢様学校路線まっしぐらなのね。さすがだわ」

美子ちゃんがうつとりとした視線を頼さんに向けている。

白鷺学園というのは、お金持ちばかりが集うお嬢様学校で、ひらのフリルがついた可愛い制服も有名な高校なのだ。

「ふふふ、でも学園には殿方はおりませんから、今日はちょっとドキドキしているんですよ」

頼さんが上品な仕草でおほほと笑う。

小学校以来だけど、懐かしくてとっても温かな気持ちになる。

やっぱり昔の友達と会えるのって、すごく嬉しいな。

と、そんなわたしに、美子ちゃんがそっと耳打ちしてきた。

「ライバル登場かしらね？」

彼女はそう言って、ニタニタと笑っている。

「もう、そんなんじゃないんだってば〜！」

「うふふ、おふたりは相変わらず仲がよろしいですね」

からかいの言葉を向けてくる美子ちゃんと、その言葉で真っ赤になっっているわたし。そんな様子を見て、頼さんはやっぱり、たおやかな笑顔をこぼしていた。

「ところで、そちらのかたは……」

頬さんはすつと視線を蚕ちゃんに向けると、記憶をたどりながら首をかしげていた。

わたしも美子ちゃんも思い出すのに時間がかかったし、蚕ちゃんつてちよつと影が薄かったのかもしれない。

「なに言ってるのよ。この幼い容姿を見れば、一目瞭然でしょ？」
「……あゝ！　ロリちゃんですわね！　やっと思い出しました！」

美子ちゃんに誘導されるかのように、どうにか蚕ちゃんのことを思い出す頬さん。

それにしても、やっぱり最初に思い出すのは、ロリちゃんっていうあだ名なのね。

そんなやり取りを眺めていた、当の蚕ちゃん本人は、

「うゝ、またしても、すり込みにドジっちゃったみたいですよ」

などと、またもやよくわからないつぶやきを漏らしているのだった。

「この木の下に、埋めてあったはずですよね」

頼さんがいとおしそくに「みんなの木」の幹をさすりながら、穏やかな声でそう言った。

「うん、そうだよ。でも、木のどっち側だったかとか、全然覚えてないな」

「あなたの記憶力は、もともとあてにならないけど。どっちにしても七年前のことだから、土は踏み固められちゃってるわね」

微妙に失礼な気がしなくもない言葉も交えつつ、美子ちゃんは冷静に分析する。

この木は、その名前が示すとおり、みんなに親しまれてきた木なのだ。

校庭の片隅　昇降口から校庭を直線で結んだ途中に立っている、みんなの木。

まともな道として整備されている部分ではないのだけど、近道になるからか、この木の横を通り抜けていく人はあとを絶たなかった。また、天気の良い土曜日には、この木の下でお弁当を広げて食べている、という光景もよく見られた。

もちろん、わたしや美子ちゃんもそうやって弁当を食べた経験がある。

東山小学校は、いくら田舎町の寂れた学校だったとはいえ、お昼は当然ながら給食になっていた。

だけど、運動会など特別な日には、給食が出ないこともあった。

そういつたときには、お弁当を持ってくるのが普通だった。

学校の敷地から出るのは禁止されていたけど、給食とは違って教室で食べることを強制されてはいなかったため、校庭や中庭なんかで食べる人も結構多かったのだ。

こうやっていろいろと思い出してみると、やっぱり懐かしさが溢れてくる。

「うっわ、相変わらずでつかいな、この木！」

「ほんと、あの頃のままだね。懐かし〜」

「……なんか、すっごく歳をくった人のセリフっぽいで、それ！」

「……もう、感慨にふける乙女の気持ちを曇らせるなんて、デリカシーのない人だね。まったく」

突然、そんな会話の音が響き渡る。

振り向くとそこには、ふたりの女の子が立っていた。

二之腕ふたのうでゆらりさんと、保黒夕菜ほくろゆいなさん、もちろん小学校の同級生だったメンバーだ。

「わ……わあ〜！ 二之腕さんに保黒さん！」

「おっす！ 久しぶりだな！」

まぶしいほどの笑顔を浮かべて、勢いよく大声を向けてくる二之腕さんと、

「暑さも少しは和らいできて、よかったね。ということでお久しぶり、江窪さん、吹浦萩さん」

対照的に落ち着いた物腰で会釈をする保黒さん。

二之腕さんはスポーツ万能で、確か中学ではソフトボール部に所属していたと思う。

男の子っぽい喋り方をしているけど、彼女はれっきとした女の子だ。

さばさばした印象で清々しいのはいいのだけど、ちょっと声が大きすぎるのが玉にきず、って感じかな。

もう一方の保黒さんは、メガネがよく似合う、見るからに優等生然とした雰囲気の子だ。

その容姿から当然のごとく浮かんでくる期待を裏切ることなく、真面目な彼女。小学校で同じクラスとなったときにはずっと学級委員を任されていた。

おそらく、違うクラスとなった中学校でも、学級委員をやっていたことだろう。

「へへ、ふたりは一緒の高校に行ったのね」

美子ちゃんが彼女たちをまじまじと見つめて、そう言った。

なるほど、二之腕さんと保黒さんのふたりは、確かに同じ制服を着ていた。

「そうだよ。ここからだと電車で一時間くらいかかったから、アパートを借りてるの」

「夕菜の親戚がアパートを経営しててさ、あたいまで部屋を用意してもらえたんだよ。それも学割価格で！」

保黒さんが控えめに説明する声に乗っ取るかのように、二之腕さんがはしゃいだ大声をつなげる。

そんな楽しそうな表情の彼女に、こんなことを言っただけは悪いと思っただけには出さなかったけど……。

二之腕さん、よく保黒さんと同じ高校に受かったなあ。

今彼女たちが着ているのは、県内でも有数の進学校である、桜ヶ丘学院の制服だった。

保黒さんは真面目で成績も優秀だったから、それも頷けるのだけ
ど。

二之腕さんのほうは、お世辞にも頭がいいとは言えないような成績だったはず……。

中学ではクラスも違ったわけだし、小学校時代とは変わっていったのかもしれないけど。

そんなふうには、わたしは頭の中だけで考えていたのだけど。

「その制服、桜ヶ丘よね？ あんたの頭でよく受かったわね〜」

容赦なくそう言い放ったのは、もちろん美子ちゃんだった。

そんな失礼な言葉を受けたにもかかわらず、二之腕さんはまったく気にしていない様子で、大口を開けて笑いながら答える。

「あはは！ 確かにあたいはバカだけどき。ま、やればできる子だったってことかな！」

「くすつ。ウチと一緒に高校に行くんだって、頑張ってたもんね。中三の三学期に入ってからだったけど」

すかさず保黒さんが言葉を添えて、フォローを入れていた。

このふたり、いいコンビだな。わたしは素直にそう思った。

「ところで、そっちは……」

ふと、視線を蚕ちゃんに向けながらつぶやく二之腕さん。

「え〜っと……」

学級委員だったはずの保黒さんまでもが、首をかしげている様子だった。

「はみゅ〜ん、忘れてしまったのですか？ 悲しいです〜」

蚕ちゃんは、すねた素振りでも口を尖らせる。

「……ほら、彼女をよく見てみなさいな」

『……あ！』

美子ちゃんが促すと、二之腕さんと保黒さんは同時に思い出したようだ。そして声を揃えてこう言った。

『ロリちゃんだ！』

「はみゅ〜ん、やっぱり、そうなってしまつのですね……」

ふたりの予想どおりの言葉に、蚕ちゃんはやっぱり、がっくりと肩を落しながら、なにやらぶつぶつとつぶやいていた。

それにしても、こうして昔の友達と集まるのって、やっぱり楽しいな。

わたしは自然と笑顔になっていた。

名字が示すとおりなのか、笑うとえくぼが出るわたしを、美子ちゃんも温かな笑顔をたたえながら見つめてくれている。きつと、美子ちゃんも同じように思っているのだ。美子ちゃんだけじゃない。頬さんも、二之腕さんも、保黒さんも、蚕ちゃんも、きつと同じ思いなのだろう。

和気あいあいとした空気が、わたしたちをタイムスリップさせて昔に戻してくれたかのように、優しく包み込んでいた。

人数も増えてきたから、それに比例して楽しさも増しているのは明らかだった。

約束の四時まで、あともう少し。

わたしたちは楽しいお喋りタイムに身を委ねながら、他のみんなの到着を、今か今かと待ちわびていた。

……………うん……………。

どうしたのでしょうか、妙に騒がしいですわ……………。

あら、まあ。

なにやら、面白そうな人たちが来ているみたいですよわね。

わたくしは、久しぶりに感じた楽しそうな思念に、目を覚ましてしまったようでした。

……………あら、この感覚は……………。

あの子とあの子……。

ふふふ、そうなんですのね。楽しくなりそうですわ。

おそらく最後になるであろうイベントの予感に、わたくしは年甲斐もなく期待に胸を躍らせるのでした。

約束の四時まで、あと一分。
わたしたちはまだ、「みんなの木」の下でだべっていた。

雲が出てきて日は陰っている。とはいえ、昼間ほどではないにしても、まだじわじわと汗がにじむくらいの暑さは残っていた。

他愛ないお喋りを続けているわたしたちの周りを、微かに生暖かい風が吹き抜けていった。

約束の時間にはなつたけど、誰も、それじゃあタイムカプセルを掘り起こそう、とは言い出さない。

まだ、みんな集まりきっていないからだ。

残るメンバーは、わたしの記憶が確かならば、男子三人。

その中には、さっきわたしが美子ちゃんにからかわれた海路くんも含まれている。

「ほんと、男子って時間にルーズだよね」

保黒さんが両手を腰に当て、ため息まじりにそう言った、そのとき。

「なにを言うか！ 時間ぴったりだったのに！ この腕時計は電波時計だから、完璧に合ってるはずだ！」

突然響いた反論の声に振り向くと、学ランを着た背の低い男子と、ブレザー姿の細身で長身の男子が立っていた。

来武士彰くわいぶしあきらくんと、土布先雄つちのふさきお志しくんだ。

わたしたちは「みんなの木」の片側に集まって喋っていたせいで、

木を挟んで反対側から近づいてきた彼らに、まったく気づかなかつたようだ。

男子としては少し高めなさっきの声は、来武士くんが発したものだ。

背は低いのに大きな声で、存在感を主張するような物言いの来武士くん。

それとは対照的に、落ち着いた雰囲気を漂わせて、口数の少ない土布先くん。

ふたりとも、一緒のクラスだった小学校のときから、まったく変わっていないかった。

「彰さんと雄志さんは、一緒の高校じゃないんですのね」

頼さんが、新たに加わった男子ふたりに話しかける。

彼女は男子と話するときでも、女子を相手にするときと同様、下の名前にさんづけで呼ぶ。これも、小学校の頃から変わっていないことだ。

男子を名前で呼ぶなんて……と思わなくもなかったけど、彼女の場合あまりにも自然なので、嫌味な雰囲気なんかは微塵も感じられなかった。

「ああ、そうだよ。おいらは南川工業で、雄志は村崎むらさき高校の美術科。お互い進みたい道に向かって頑張ってるんだ。ま、学校は違ってても、頻繁に連絡は取ってるんだけどな」

「うん。会うことも多いし」

「そうそう。住んでる場所もそんなに遠いわげじゃないし、この町と比べたら電車の本数も多いからな！」

「この町の雰囲気は好きだけどね」

頬さんに誇らしげな様子で答えを返す来武士くん、土布先くんが控えめな言葉を挟み、ふたりの掛け合いが始まる。

とっても仲がいいんだな〜ってというのが、すごくよく伝わってきた。

小学校のクラスでも、こんな感じだったな〜。懐かしい。

「しっかし、みんなも変わってないよな〜」

「そっちこそ！」

先に集まっていたわたしたちを見渡して発せられた来武士くんの言葉に、すかさずツッコミを入れたのはもちろん美子ちゃん。

「とくに、背の低さが……」

「な……なんだとお〜!？」

やっぱり、といった様子で、余計なひと言をぼそつと添える美子ちゃんに、来武士くんは怒鳴り声を上げて無駄な抵抗をしていた。

……なんて言ったら、わたしも怒られちゃうよね。わたしだって、背は低いんだし。

「ふふふ」

「あははは!」

そんなふうを考えていたら、すぐにふたりは笑い出した。

もともと冗談半分のお喋りなのは、来武士くんにだってわかっていただけからだ。

「……あれ？」

ふと来武士くんの視線が、控えめに立っていた蚕ちゃんの前で止

まる。

「え〜っと……」

どうやら他の人たちと同じように、すぐには彼女のことを思い出せないでいるようだ。

どれだけ存在感なかったのよ、蚕ちゃん。

「ほら、この容姿……」

美子ちゃんが助け舟を出す。それによって、

「ロリちゃん……」

「あゝ、そうか！ そうだったそうだった、ロリちゃんだ！ ごめんね、すぐ思い出せなくて！ 久しぶりっ！」

かるうじて思い出すことができたようで、土布先くんが控えめにあだ名をつぶやくと、来武士くんもようやく思い出し、蚕ちゃんに明るい声を向けていた。

「はみゅ〜ん、やっぱりそうなってしまっただけですね……」

そんな来武士くんの声にも、蚕ちゃんはやっぱりちょっと沈んだ表情を浮かべながらつぶやいていた。

「それにしても……海路はまだ来てないのか」

来武士くんが今度はまだこの場にいない海路くんに話の矛先を向ける。

ころころと話題が変わっていくのも、小学校の頃からまったく変

わっていないかった。

「だけど、なんとなく……ほんとになんとかなくだけど、声のトーンが少し変わったように感じたのは、わたしの気のせいだろうか……。」

「もう四時過ぎたっていうのにね」

「ちょっと怒りを含んだような口調で、保黒さんがそう言った。真面目な彼女は、時間を守らない人が嫌いなのかもかもしれない。」

「まあ、あいつも町を出ていった身だからな」

「少し海路くんを擁護するような言葉を添えた来武士くんからは、もうさっきのような声のトーンの違いは感じられなかった。」

「……うん、きっとわたしの気のせいだよ。」

「かなり、遠かったかも」

「そうだな。確か海路って、東京の高校に行っただはずだし」

「続けて放たれた来武士くんと土布先くんの会話で、わたしは初めて海路くんの近況を知った。」

「わたし自身は、中一のときに海路くんが転校して以来、一度も彼とは会っていないし連絡も取っていない。」

「というより、連絡先だって知らなかった。」

「海路くんのことは、そりゃあちょっと気になってはいたけど、すごく仲がよかったというわけでもないし。」

「それに中学生くらいだと、男女でいつも一緒にいたりしたら、面白がって冷やかされてしまうのが普通だった。」

「だから、海路くんと仲よくお喋りするなんて機会も、ほとんどなかったのだ。」

でも、男子たちは気楽に連絡を取ったりしていた、ということなのかな。
なんだか少し、いいな、なんて羨ましく思ってしまったわたくしがいた。

それにしても、東京かあ……。

この田舎町からだ、電車を乗り継いで新幹線にも乗って、また電車に乗り換えて、という感じになるから、相当時間がかかるはずだよ。

遠いんだなあ……。

そうすると、もしかしたら海路くんは来ないかもしれない……。

わたしは寂しい思いに囚われてしまっていた。

そんな表情を見て取ったのが、美子ちゃんがそつとわたしの肩を抱きしめてくれる。

わたしもそつと、彼女の肩に体を預けるように寄り添った。

ひゅ……。

風が涼しくなってきた。空はいつしか厚い雲に覆われ、辺りは急激に薄暗くなり始めている。

「ひと雨、来そうだな」

来武士くんが、なんだか妙に重苦しい声音で、そんなつぶやきを漏らしていた。

雨が降ってくると面倒そうだけど、とりあえず五時くらいまでは待とう、ということになった。

それはそうだよな。

もし今日をずっと楽しみにしていて、遠いから遅れてしまったけどようやく到着したというのに、もうみんなはタイムカプセルを掘り起こしたあとだった、なんてことになったら、海路くんだってやりきれない気持ちになるだろうし。

それにみんな、全員が集まるということを中心待ちにしていたのだから、ぎりぎりまで待つのは、当たり前の流れだったと言える。

だけど、空はだんだんと暗さを増し、わたしたちのお喋りの声までも雲ってしまったのか、話題も途切れがちになっていた。

このまま、海路くんは来ないのかもしれない。

そんな沈んだ思いが湧き上がり始めた、ちょうどそのとき。

四時半を回ったくらいだろうか、待望の彼は苦笑いを浮かべながら、わたしたちの目の前によくやくその姿を現した。

「海路くん!」

思わずわたしは、喜びの声を上げていた。

……自分でも驚いてしまうくらいの大声で。

わたしはちょっと恥ずかしくなってしまうけど、すぐに他のみんなも海路くん言葉をかけ始めた。

「遅いわよ、海路くん!」

「海路くん、久しぶり!」

「うふふ、みなさんお待ちかねでしたのよ、潮騒さん!」

みんなの心からの歓迎ムードに、海路くんは照れ笑いを浮かべながら応える。

七月も終わりの暑い気候の中でも、長袖のワイシャツに身を包む姿が、とても懐かしく瞳に映り込んだ。

海路くんは小学校の頃から、肌の露出を極端に嫌っているみたいで、いつも長袖長ズボンに身を包んでいた。色白の綺麗な肌だから、日焼けに弱かったのかもしれない。今でもそれは変わっていないんだ。

「やっぱりぼくが最後だよ。遅れてほんとゴメン！ それにしても、みんな変わらないね。懐かしいな」

並んで笑顔を向けていたわたしたちに視線を巡らせる海路くんは、ひととき小さな蚕ちゃんに目を向けると、一瞬動きが止まったように見えた。

あ……やっぱり海路くんもなのかな。と思ったのだけ。

「蚕ちゃんも、久しぶり」

「はい、お久しぶりです！」

迷うことなく、すぐに彼女の名前を呼んだ。

そういえば、小学生だった当時、海路くんはぼやーとした印象ながら、テストとかではいつもいい点数を取っていたんだっけ。

わたしみたいに記憶力貧困じゃないから、すぐに思い出せたのね。ロリちゃんってあだ名で呼んだりしないのは、海路くんが優しいから、相手が少しでも嫌がっていることはしないっていう気遣いがあるからなのだろう。

わたしも結構クラスメイトにからかわれる子だったけど、海路く

んはそんなとき、いつも控えめに言葉を挟んで、みんなの興味を違うほうに向かせて助けてくれた。

海路くん本人はべつに意識して助けてくれたわけではないのかも
しれないけど、当時のわたしとしては、いつも笑顔で守ってくれる
ナイト様といった印象だったのだ。

「中一で引越したから、四年ぶりくらいになるのかな？　ほんと、
変わってないね、海路くん」

みんなを代表して、というわけでもないだろうけど、笑い声と懐
かしさに包まれていた場をまとめるように、このメンバーが同じク
ラスだったときに学級委員だった保黒さんが落ち着いた声で海路く
んに話しかけた。

「……うん、そうだね。父さんの都合だから仕方ないけど、ぼくも
卒業までこの町にいたかったよ」

父親の転勤に合わせて引越した海路くん。

中学一年生の子供に、ひとりでこの町に残るなんて選択肢はなか
ったのだろう。保黒さんに答える海路くんは、少し寂しそうな表情
を浮かべていた。

「でもさ、確か海路くんの親戚って、当時この町の町長だっただろ
？　今もそうなのかな？」

「ええ、そうね。今も海路町長だわ」

横から加わった二之腕さんの質問の声に、すかさず美子ちゃんが
回答を返す。

「ふむ。だったら、親が引越したって、親戚の家にご厄介になる

つてこともできたんじゃないのか？ 町長の家って、結構でかかったと思うけど」

「あはは。確かにそうかもしれないけど、ぼくとしてもほら、父さん母さんと離れたくなかったっていうか、やっぱり子供だったから……」

海路くんは恥ずかしそうに頭を掻きながら、二之腕さんの問いかけにそう答えていた。

最後に遅れてきたからというのもあるだろうけど、海路くんはみんなから質問攻めに遭っている。

小学校の頃から、ちょっとぼんやりした雰囲気ながらも、いつも笑顔でほんわかした男の子だった。

だから当然のごとく、みんなから親しまれていたのだ。

「昔は背も低かったはずなのに、今は結構伸びましたのね。カッコいいですわ」

「あはは、ありがとう。でもまだ、平均にも届かないくらいなんだけどね」

うつとりしたような目で海路くんを見つめている頼さんに、彼はやっぱり照れ笑いを返していた。

わたしと同じクラスだった当時の海路くんは、背が低いのを気にしてる来武士くんと同じくらいの身長しかなかったはずだ。

その頃から考えたら随分伸びたと言えるだろう。平均にまでは届いていないとしても、細身だから、その分すらっとした印象を受ける。

頼さんが言うとおり、カッコいいのは確かだった。

と、わたしはふと気づく。なんだか来武士くんが、静かだということだ。

ちらりと来武士くんの様子を見てみると、彼はじつと、海路くんに視線を向けていた。

声をかけようとはしているのだけど、なぜか二の足を踏んでいるように感じられる。

「いったい、どうしたというのだろうか？」

そんなわたしの考えを察知したから、というわけではないのだから、来武士くんはようやく口を開いた。

「……海路、最近全然連絡くれないんだもんな。ケータイの電源も切ったままだろ？ 電話、つながらなかったぞ！ メールだって送ったのに届かなかったし。アドレス変えるなら、ちゃんと教えてくれよ！ お前は、ただでさえ遠いところに住んでるんだからさ〜！」

「あ……そつか。ごめんね。ケータイ壊れちゃって……。今は、持ってないんだよ」

「え？ マジ？ つーか、ケータイなしじゃ不便じゃないか？」

「うーん、でも、ないならそれで、べつに大丈夫なもんだよ」

「彰は、使いすぎだから」

「むっ、なんだよ雄志！ いいだろ、べつに！ メールとか電話とか、一番使ってるのはお前にだし！」

「……ちよっと、鬱陶しい」

「なっ！？ お前、ひどいぞ！ おいらとお前の友情を！」

「冗談だつて」

「あはは、相変わらず来武士と土布先は、仲いいね〜」

そのまま男子たちの会話へと移行していく。

さっきの来武士くんの様子が気にはなっただけど、こうして楽しく話しているのを見る限り、今はもう変わった様子は感じられない。

やっぱりわたしの気のせいだったのだろうか。そう結論づけておく。

楽しそうな男子同士の会話。

わたしを含めた女の子たちはみんな、男子三人の会話の邪魔はしないよう、口を挟まずに黙って見つめていた。

「ちょっと怪しいくらいですわよね〜」

あ、ちょっと訂正。

さすがお嬢様といったところか、場の空気を読まない頼さんだけは、なにも気にせず、男子たちの話に割って入っていた。

「……」らこら、頼さん、そういうのじゃないって！ おいらた

ちは、ほら、純粹に男の友情をだな！」

「慌てるのがなおさら怪しいですわ！」

「うん、怪しい」

「うおお！？ 雄志、お前まで！」

「あははは、懐かしいな〜、この感覚！ 戻ってきたんだなって実感するよー！」

空はさらに雲が厚くなっているのか、かなり暗くなってきたけど、わたしたちの周りだけは、懐かしくて温かな明るい空気につぼりと包まれているように感じられた。

そんな雰囲気呑み込まれ、わたしはぼーとした表情で、主に海路くんの笑顔を眺めていた。

「ふふふ、やっぱり愛しのキミは健在？」

ふと、隣にいた美子ちゃんがわたしの耳に唇を寄せて、そうささやいた。

「ちょ……ちょっと美子ちゃん、そんなんじゃないってば〜」

わたしは耳まで真っ赤になって、他の人にはなるべく聞こえないように気をつけながら、美子ちゃんに言葉を返す。

まったく美子ちゃんってば、いつもわたしをからかうんだもん。

ちよっと困っちゃおう。

でも、海路くんを見ていると、本当に懐かしい気持ちになっ
てくる。

あの頃は、いろいろと楽しかったな。

集まったみんなが一緒のクラスだった、小学校の当時。
ちようどタイムカプセルを埋めた四年生の頃だっただろうか。

「ねえねえ、笑歌！」

ニコニコと笑いながら美子ちゃんが話しかけてきた。

次は理科室での授業ということで、いつもの教室から休み時間に移動して、チャイムが鳴るのを待っているあいだのことだった。

「ふえ？ 美子ちゃん、なにになに？」

わたしが振り向くと、その目の前にはなんと、内臓を無残にぶちまけた男の人が……。

それは当然ながら、理科室にはつきものの、内臓が取り外したりできる人体模型だったのだけだ。

東山小学校の人体模型は、なんだかすっごくリアルな造形だった。内臓なんて、つやつやと光を反射していて、触るとぷにぷにと柔らかく、とつても気持ちいの悪いシロモノだ。

人体模型は普段、理科準備室に置いてあるはずだけど、このときはカギが開いたままだったのだろうか。

美子ちゃんは準備室の中に入って、こんな大きな人体模型をわざわざ担いで持ってきていたようだ。

「ぶぎや~~~~~!!」

思わず女の子らしからぬ叫び声を上げてしまったわたし。

でも、いきなり目の前にそんなのが立っていたら、それも仕方がないよね？

しかも、ご丁寧に赤い絵の具かなにかで、血のりまでつけられていたんだから。

「ほらほら笑歌、食べられちゃうよ〜？」

「ひゃう〜〜、やめて〜〜〜〜！、食べないでえ〜〜〜〜！」

どうでもいいけど、今考えたら美子ちゃんの脅かし方も間違っている気がする。

だいたい、人体模型で脅かすなんてからかい行為、美子ちゃんも随分と子供っぽいことをやってたんだな〜って、今さらながらに思うけど。

だけど当時のわたしは、本当に内臓を垂れ流す男の人が覆いかぶさってきていると思いついてしまっただけで、もうどうにもならないほどのパニック状態に陥っていた。

わたしが焦れば焦るほど、美子ちゃんは調子に乗って、からかい行為をエスカレートさせていく。

完全にわたしの上に人体模型を乗っけて、面白そうに笑い続けている美子ちゃんの声は耳に届いていたのだけど、そんなことにまで全然気が回らない。

椅子に座りながら体を丸め、わたしは顔を机にべったりくっつけて震えていた。

目をつぶり、恐怖が去ってくれるのをひたすら祈っていたものの、当然ながらそれで事態を回避できるわけじゃない。

悪ノリした美子ちゃんが人体模型の腕をわたしの肩口から前のほうにだらりと垂らすと、血濡れた腕が机にぶつかる。ごとりと音を

立てたその腕は、わたしのほつぺたをそつと撫でるように密着してきた。

その感触で思わず顔をわずかに上げ、そちらに目を向けてしまうと、視界に迫るのは血塗れた人体模型の腕……。

「ふぎゃうぎゃわう~~~~!!」

わけのわからない悲鳴を轟かせながら、わたしは半狂乱になって席を立ち上がり、無意識のうちにしがみついていた。

……心配してそばに来てくれたところだったのだから海路くんに、ぎゅ~~~~っつと、思いつきり。

「きゃわわわっ!?! あうあう~~~~!! ご……ごめんね、海路くん!」

人体模型のときよりもさらに慌てた声を上げるわたしに、しがみつかれている当の海路くんは微笑みを返してくれた。

「いや、べつにいいよ。でも……」

海路くんはそう言うと、真っ赤になって視線を逸らしてしまう。

そんな彼の顔は、わたしのすぐ目の前であって……。

焦っていたからだろう、わたしは海路くんにしがみついたままの状態で、彼に謝っていたのだ。

「はう、ごめんなさいっ!!」

慌てて離れるわたし。そんな様子を、美子ちゃんが心底面白そうな笑い顔で見つめていた。

「あらあら、あんたもやるわね~~~~!! 偶然を装って、そんなこと!」

「はっ！ ち……違っ……！ そんなんじゃないよ〜！」

慌てふためくわたしだったが、美子ちゃんはやっぱり楽しそう笑っているだけだった。

「いつもどおり、江窪さんと吹浦萩さんは仲がいいね〜。でも、さつきみたいなのは、ちょっとやりすぎだと思っよ」

海路くんはそう言うてくれた。わあ〜、わたしのことを心配してくれてるんだ。そう思ってとても嬉しい気持ちになった。

でも美子ちゃんは、

「あら、優しいのね、海路くん。でもほら、笑歌のリアクションって面白いから、ついついからかっちゃうのよね〜」

なんて答えていた。

はっ〜、美子ちゃんひどい……。

「あははは、それはわかるけどさ〜」

「はっっ、わかっちゃうんだ!？」

わたしは口を尖らせて、いじけた表情を見せる。

そんな様子を、美子ちゃんも海路くんも、優しい瞳で見つめてくれていた。

それから、こんなこともあった。

夕陽が差し込む放課後の音楽室で、わたしは鍵盤のカバーが閉まったままのピアノの椅子に座った。
その途端、突然ピアノの音が響いてきた。

「笑歌！ 七不思議のひとつ、勝手に鳴り出すピアノだよ！ あんた、呪われちゃうよ！」

美子ちゃんがそんなことを言う。

「うぎゃうわうあうぎゃう~~~~~!!」

怖くなって涙目で叫び声を上げるわたし。

面白そうに耳もとでささやき続ける美子ちゃんの声によって、こころでもわたしは半狂乱。

と、声もなく歩み寄ってきた海路くんがピアノの下に手を入れた。

「ほら、これ」

そう言って差し出された彼の手には、ピアノの音を響かせる携帯電話が握られていた。

どうやら美子ちゃんがわたしを怖がらせてからかうために、あらかじめアラームで音が鳴るようにセットして、ピアノの下にセロハンテープで貼りつけて仕込んでおいたようだ。

他には、こんなことも。

校舎の屋上には菜園があって、クラスのみんなで育てていたのだけど、その世話をしているときのこと。

「ほら笑歌。綺麗な花が咲いてるよ！ いい匂いだから、嗅いでくらん」

と美子ちゃんに言われたわたしは、素直にその綺麗な花に鼻を近づけ目をつぶる。

その途端、鼻先になにか触れる感触が。

目を開けると目の前には逆三角形の黄緑色の顔。二本のカマのような腕を持ったカマキリが、目の前いっぱいに広がり、首をかしげていた。

「きゃうわうわう〜!?!」

虫嫌いなわたしは当然のように飛び上がって、いつもどおりのなを言っているんだか聞き取れない叫び声を発する。

美子ちゃんがそこら辺にいたカマキリを花の中に入れておいたのだらう。

カマキリはわたしの鼻の上に乗っかってきていたみたいだった。もちろん怖くてたまらなかったわたしには、その状況もよくわかっていなかったのだけだ。

ただ、視界の中にぼやけた黄緑色が、いやおうなく映り込んでいた。

と。

すっ。目の前を遮断していたカマキリが、いきなり消えた。

「江窪さん、大丈夫？」

声の主は海路くん。彼がカマキリをわたしの鼻の上から取ってくれたのだ。

「まったく、吹浦萩さんはいつもいつも」

「ふふふ、だってさ、面白いじゃん！」

「それはわかるけどさ」

まだ涙が残ったままのわたしを差し置いて、ふたりは大笑い。

そんな感じで、わたしたちは楽しく騒がしく、小学校時代というかけがえのない時間を過ごしていた。

……どうでもいいけど、わたしっていつもいつも、美子ちゃんにからかわれていたような気がする。

もっとも、それは今でも大して変わってはいないのだけ。

「さて、それじゃ、掘り返すか！」

来武士くんが本題に入ろうと声を上げる。

そうだった、みんなが集まってそれだけで嬉しくなっていたけど、今日の一番の目的はタイムカプセルを掘り返すことだったんだ。

「……掘り返すって、手で？」

保黒さんの冷静なツツコミに、一同は辺りを見回す。

タイムカプセルを埋めてあるはずの、「みんなの木」の周囲の地面が踏み固められているのは、さっきも言ったとおり。

ただどわたしたちは、穴を掘るための道具なんて用意していなかった。

「はははは。なんというか、行き当たりばったりなおいらたちらしいな！」

なんておどけた声で笑う来武士くん。……いやいや、笑ってる場合じゃないでしょ。

「あそこ、体育倉庫」

土布先くんが校庭のほうを指差して控えめにつぶやいた。

「そっか、あそこになら、シャベルくらいありそうだよな」

「んじゃ、取りに行ってくるか。カギ、開いてるかな……」

男子三人はそう言うと、体育倉庫に向けて駆け出す。いくらシャベルを取りに行く程度とはいえ、力仕事は男子の役目と言わんばかりの自然な行動力に、ちよつと頼りがいを感じた。

「あたしたちは、ここで待ってるわね」

彼らの気遣いを素直に受け、任せることにしたのだろう、美子ちゃんも笑顔で送り出す。

わたしを含む他の女子たちも一緒に、男子たちの背中に向けて「行ってらっしゃい」と声をかけた。

わざわざ振り向いて笑顔で手を振り返してくれた海路くんを、わたしはその姿が体育倉庫の中に消えるまで、ずっと見つめ続けていた。

どうやらカギは開いていたみたいね。よかった。

「それにしても……。笑歌ってば、ずう~~~~と海路くんのほうばかり見てたわね」

男子たちが体育倉庫の中に入り、女子五人が残された状況になると、美子ちゃんがニヤニヤニヤと笑いながらそんなことを言い出した。

「ひゃう!? ベ……べつに、そんなこと……」

ないもん、と反論したいところではあったけど、自分で思い返してみても、ほとんどずっと海路くんのことを見ていたのは紛れもない事実。

わたしは嘘をつくのは極力避けるようにしている。どうせバレてしまうから。

というわけで、思わず口ごもってしまった。

「相変わらず江窪さんは、わかりやすいな〜」
「ほんとですわよね〜。当時から好きだったんでしょ〜?」

二之腕さんと頬さんまで一緒になって、いやらしい笑みを浮かべながらわたしを攻め立てる。

「あはっ、そうなんだ〜!」

蚕ちゃんもわたしを囁し立てる側に回っていた。

そんな中、ただひとり保黒さんだけは笑顔を浮かべてはいなかったのだけど、それでもわたしのほうにじっと目を向けているようだった。

「笑歌は、わかりやすすぎだからね〜。そんなだからわたしも、ついついからかつちゃうのよね〜!」

バシバシバシ。

「な……なんで、はたくの〜?」

美子ちゃんは笑顔を浮かべながら、いつものようにわたしの頭をはたき始める。

彼女がそうやって頭をはたくのは、わたしのことを親友だと思っ
て好いてくれているからだってわかってはいるけど。

でも、ちよっと強く叩きすぎ……。

「今日は笑歌のために、頑張っちゃおうかな〜」

ニヤニヤニヤ。いたずらを思いついたときの顔をしながら、美子

ちゃんは楽しそうにはしゃいだ声を上げる。

「なによ、それ〜？ なにを頑張るっていうの〜？ だいたい、美子ちゃんの場合、変なことしそうで怖い〜」

「ふっふっふ、よくわかってるじゃないの」

バシバシバシ。

「はうあう〜。美子ちゃん、意地悪だよ〜」

美子ちゃんはやっぱり、わたしの頭をはたき続けていた。

「う〜ん、江窪さんと吹浦萩さんは、相変わらずだな〜。今でも頭をはたいてるんだ」

「継続は力なりと申しますものね、よいことですわ〜」

二之腕さんと頼さんも、そう言って納得している様子。

「こ……こんなこと、継続されても困るよ〜。それに、全然よいことじゃない〜。……痛たたた……」

抗議の声を上げるも、バシバシとわたしの頭をはたき続ける美子ちゃんの手は止まらない。

そんな様子をじっと黙って眺め続けていた保黒さんも、やっと笑顔になっていた。

「ただどなんとなく、微妙に愁いを帯びているように感じたのは、わたしの気のせいだろうか？」

「お待たせ〜！ ……ん？ お前ら、どうかしたのか？」

すぐに、シャベルやスコップを抱えて、パタパタと駆け足で男子たちが戻ってきた。

「ん、来武士くんはカッコいいな〜って、話してたのよ!」

真っ先に質問を投げかけてきた来武士くんに、すかさず真っ赤な嘘を返す美子ちゃん。

「ほうほう、そうか〜! お前ら、素直だな〜! そうかそうか、おいらってそんなに、カッコいいか〜、参ったな〜!」

来武士くんは美子ちゃんの言葉に、嬉しそうに照れ笑いを浮かべていた。

「いやいや、冗談よ?」

「ガーン!」

上げておいて思いつきり突き落とす美子ちゃんの言葉に、ショックを受けたことを大げさな動作で示して応える来武士くん。

……今どきなかなか、こんな驚き方しないよね。

だけど、そんなやり取りで、場の雰囲気はさっきまでにも増して明るくなっていた。

なんだか美子ちゃんと来武士くんって、すごくいいコンビなのかも。

さっきの美子ちゃんじゃないけど、ふたりの仲を取り持つために今日はわたし、頑張っちゃおうかな。なんて気になってしまっ。

もちろん、いたずらっぽい意味を込めて。

ふっふっふ、日頃の恨みを思う存分返させてもらっわよ、美子ちゃん!

わたしの頭の中は、そんな意地悪な考えで満たされていたりしたのだけど、美子ちゃんにいたずらなんてした日には、十倍以上になって返ってくるというのを、このときのわたしはすっかり失念していた。

もつともそれ以前に、浅はかなわたしなんかのいたずらに、美子ちゃんが引つかかるはずもないのだけど。

戻ってきた男子三人は、それぞれ一本ずつのシャベルを持っていた。

それ以外に、スコップをいくつか、バケツの中に入れて持ってきたようだ。

「シャベルは三本しかなかったから、穴掘りはぼくたちに任せてくれていいよ」

「待っててもいいけど、手伝うつもりがあるなら、スコップでそこから辺を少しでも掘ってくれ」

海路くんの優しい言葉に、来武士くんがささず指示を加える。

こんな言い方をされたら、手伝わないというのもちよつと気が引ける。

わたしたちはスコップを手にとると、みんなの木の周りを掘り始めた。

なぜ闇雲に掘り返しているのかといえは、この木の近くだということ以外、正確な場所を誰も覚えていなかったからだ。

うーん、さすが行き当たりばったり集団。シャベルのことといい、計画性が皆無だ。

ああ、懐かしい。これでこそ、わたしたちって感じ。

……ちよつと情けなくもあるけど。

学級委員だった保黒さんくらいは、しっかりしてくれていてもよさそうなものなのに、彼女も彼女で、結構抜けているところがあるみたいだった。

わたしなんか抜けているなんて言ったら、さすがに怒られちゃ

うかもしれないけど。

ともかく、わたしたちはお喋りを続けながら、周囲の地面をひたすら掘り返した。

掘り起こす前に誰かに見つけられて開けられたりしないよう、結構深い穴を掘って埋めたような記憶はある。

それはみんなも覚えているのだろう。すぐには見つからないかもしれないな、という雰囲気はあった。

それでも、目印であるみんなの木は今もこうしてここに立っている。

この周辺なのは間違いないのだから、見つからないなんてことはないはずだ。

当時、海路くんが用意してくれたブリキ缶は、ちよつと大きめだったし、すぐ見つかるに違いない。

七年前にみんなの思い出を詰め込んで埋められたタイムカプセル。それをこうして今、わたしたちは掘り返している。

あと数分くらいか、どんなに遅くても一時間もかからないうちに、懐かしいブリキ缶がわたしたちの目の前に姿を現すだろう。

ちよつと、もったいないな。

そんな気持ちだが、わたしの心には湧き起こっていた。

タイムカプセルを見つけ、それを開けてしまえば、そこで夢の時間が終わってしまう。

実際にはそれですべてが終わってしまうわけでもないだろうし、そのあとみんなで、町に一軒だけあるファミリーレストランにでも行って、お喋りに花を咲かせたりするのだろうけど。

それでも、少しでも長いあいだ、こうやってタイムカプセルを掘

り起こすというわくわくした時間を味わっていたかった。

きつとみんなも、同じような思いでいっぱいだったのだろう。たびたび土を掘る手を止めて、今の楽しい時間を噛みしめているようだった。

空はどんどんと暗くなる。時間的にもそろそろ暗くなってくる頃ではあったけど、それ以上に、分厚いどんよりとした雲が一面を覆い尽くしていた。

なんとなく、風が嫌な湿気を運んでくるように感じてしまう。どれくらいの間、わたしたちは土を掘っていただろうか。

「うーん、ないな……」

疲れた息を吐きながら、来武士くんがつぶやいた。

「そつだね」

普段から落ち着いている土布先くんでさえも、荒い息をしながら汗をだらだらと流している。

夕方から夜に変わるくらいの時間とはいえ、昼間の日差しで暖められた地面からは、まだまだ熱気が放出されていた。

それにしても、ほんとに、いったいどこに埋まっているのだろう。わたしは周りを見渡してみる。

かなりの広範囲を掘り返しているのは、一目瞭然だった。

主にシャベルを使っている男子三人の掘った穴がそこかしこに開き、わたしたち女子がスコップで掘った穴もかなりの数になっている。

深さ的にもタイムカプセルを埋めるのに適した程度までしか掘ら

ず、なさそうだったら別の場所を、という感じでなるべく広い範囲で穴を掘ってきた。

もう、みんなの木から半径三メートルくらいの範囲は、掘り残しもないはずだ。

今は掘り返す範囲を広げて、さらに搜索の手を伸ばしている。

でも、わたしの曖昧な記憶じゃ頼りないとは思っけど、みんなの木からそんなに離れた位置にタイムカプセルを埋めたような覚えはなかった。

やっぱりこれは、なにかがおかしい。

わたしだけではなく、みんな、そう思い始めていた。

「この木のそばじゃ、ないんだっけ？」

来武士くんが、そんなことを言い始める。

「ん〜、でも、ここだったはずだよな？ みんなでここに集まろうって約束したのも、埋めた場所だったからだと思っし……」

保黒さんも、少し自信なさそうにつぶやきを漏らす。最後のほうは、消えかけるように勢いがなくなっていたけど。

これだけ長い時間をかけて掘ったせいで、さすがの彼女も、自分の記憶力に自信が持てなくなっていたのだろう。

と、そのとき。

空が、光った。

「きゃっっー！」

そして二秒ほどの間を置いて地面を揺るがすほどの轟音が響き渡る。

「雷だ！」

来武士くんが叫んだ途端、大粒の雨が容赦なく、わたしたちを頭上から叩きつけるかのような勢いで降り注ぎ始めた。

「冷たいですわ！」

「つていつか、痛いよ！」

みんな、持っていたシャベルやスコップを放り出すと、頭を両手で抱えて立ちすくむ。

「とりあえず、どこかで雨宿りを……。あ、さっきの体育倉庫は？」
「いや、あそこはダメだと思う。ボロいから雨が吹き込むよ、きつと。さっき見たとき、天井に穴も開いてたし」

素早く思考を巡らせて提案した美子ちゃんの言葉に、海路くんがすかさず反論の声を返した。

こういうとき、トロくてぼーっとしたわたしは、まったく役に立たない。

もつとしっかりしないと、とは思うものの、ここは美子ちゃんたちの判断に任せるべきだろう。

そう考えて、わたしは彼女たちの会話に口を挟まず、結論が出るのをただ黙って待つ。

「それじゃあ、校舎は？」

「昇降口のカギが開いてるかどうかだけど……。迷っててもしょうがないよな。行ってみよう！」

来武士くんが口にするやいなや、間髪入れずに駆け出す。強烈な雨によって、すでに溜まり始めていた足もとの泥が跳ね上がるけど、そんなことに構っていられる余裕はなかった。

わたしたちは昇降口へと向かって一目散に無我夢中で走る。

すぐに目に飛び込んできた昇降口のドアは、ガラス張りではあるけど、ところどころひび割れ、かなり薄汚れていた。

やっぱり廃校となった学校だけのことはある。

ともかく、いち早く昇降口にたどり着いた来武士くんが引っ張ると、抵抗なくドアは開いた。

「よし、開いてる！ みんな、急いで中へ！」

「うん！」

こうして、稲光と雷鳴を背に受けながら、わたしたちは全員、廃校となった小学校の校舎内へと駆け込んでいった。

「はみゅ〜ん、びしょびしょです〜」

蚕ちゃんが大きなりボンで留めたセミロングの髪をバサバサと振り乱してしぶきを飛ばす。

「きゃっ、ロリちゃん、冷たいよ！」

「はみゅ、ごめんなさい〜」

二之腕さんの抗議に、素直に頭を下げる蚕ちゃん。

でも、そんな抗議をする二之腕さんだって、雨に濡れた制服をバサバサと振ってしぶきを飛ばしていたのだけだ。

だいたい男子もいる前で、そんなにスカートをたくし上げたりブラウスをはだけたりして、水を払おうとするなんて。

恥ずかしくないのだろうか。

雨に濡れたせいでブラが透けて見えてしまうのが恥ずかしくて、両手をクロスさせて胸の前を隠しているままのわたしには、二之腕さんの行動が信じられなかった。

男子三人も気づいているのだろうか、じろじろ見ないように気遣ってくれてはいるものの、たまにちらちらと視線を向けているような気がする。

男の子って、そういうものなのかな……。

わたしはふと、海路くんに目を向けてしまった。

ちょうどそのタイミングで、海路くんも、ちらりとわたしのほうを見た。

突然お互いの目が合って驚いたからというのもあってか、時間が止まったかのように、わたしと海路くんは数瞬のあいだ見つめ合う。

「おっ、なにやらしい雰囲気？」

目ざとくわたしたちの様子に気づいた美子ちゃんが、いやらしいニヤニヤ笑いを浮かべながら冷やかしの声を向けてきた。

「はっ、べつにそんなんじゃない……」

思わず赤くなるわたしに、

「あっ、そうだ。タオル、持ってきてたんだ。江窪さん、これ使ってよ」

海路くんは腰につけたポシェットからタオルを取り出すと、それをわたしに手渡してくれた。

「だけど、ポシェットって……」。

「なんだか海路くんには妙に似合っているのだけど、あまり男の子っぽくないような……」。

「って、タオルを渡してもらって、そんなこと考えるのも悪いよね」。

「ありがとう、海路くん」

わたしは素直にお礼を言って、海路くんからタオルを受け取った。

前髪から垂れてくる雨の雫がさっきから少し気になっていたわたしは、まず顔から拭き始める。

ほのかに、いい香りがした。

タオル、花柄だし……。

……もしかして海路くんってやっぱり、そういう趣味とか、あったりするのかな……。

わたしは、海路くんのちょっとした秘密を知ることができたような気がして、なんとなく楽しい気持ちになっていた。

「それにしても、どうしてタイムカプセル、なかったんだらう？」

ハンカチで軽く髪を拭きながら、来武士くんがぼやく。

「もしかしたら、誰かが先に掘り出して、隠してしまったのかも……？」

続けて蚕ちゃんが控えめな口調で、そんなことを言い出した。

「ええっ？ でも、誰が、なんのために？」

わたしは思わず、蚕ちゃんを責めるような口調で問い詰めてしまっていた。

「はみゅくん、ごめんなさい、わからないです」

涙目になって謝る蚕ちゃんを見て、わたしは罪悪感でいっぱいになる。

「わ……わたしこそ、ごめんね……」

「あっ、そうだ！」

謝り返すわたしの声を遮るかのように大声を上げたのは、最初に疑問の言葉をぼやいた来武士くんだった。

彼はどうやらなにかを思い出したらしく、海路くんのほうを向いて質問をぶつける。

「海路、確かお前、タイムカプセルを埋めたすぐあとにさ、みんなを驚かせるために別の場所に隠し直しておこうかな、なんて言ってたよな？　もしかして、本当に隠したりしたのか？」

来武士くんの声に、みんなの視線は一斉に海路くんへと集まった。

「あはは、やっと、思い出したんだね」

海路くんは、爽やかだけどちょっといたずらっぽい笑顔になって、白状した。

「実はぼくがタイムカプセルを隠したんだ。少しでも長く、みんなとの懐かしい時間を楽しみたいと思ってね。タイムカプセルはどこにあるのか……。ぼくからの、宝探しゲームだよ！」

一瞬の沈黙のあと、真っ先に口を開いたのは美子ちゃんだった。

「へえ〜……。なかなかシャレたことするのね。ちょっと驚いたわ。そして、見直した！」

そう言いながら、彼女も海路くんと同じように、笑顔に変わっていった。

「よし、それじゃあみんな、海路くんからの宝探し、受けて立ってやるっじゃないの！」

「うっ……うん！」

「おっけ〜！　楽しませてもらうっ！」

みんなノリノリで、海路くんからの挑戦に立ち向かうことになった。

「頑張つて探してね。この校舎の、どこかにあるからさ！」

こうして、激しく続く雨と雷の音が響き渡る中、廃校となった小学校の校舎での宝探しゲームは始まりを告げたのだった。

あらあら、始まってしまいましたわね。

楽しくて温かくて、でも、ちょっぴり心苦しい宝探しゲームが。

そうですね。

せっかくですからわたくしも、楽しませていただきますわ。

ふふふ、あの子たちは、いったいどんな素敵なお顔をを見せてくれるのかしら。

それを考えただけで、わたくしの心は、もう長いあいだ味わっていなかったウキウキした気分ではいっぱいになるのです。

「しっかし、すごい雨だな」

昇降口のドアに降り注ぐ雨を眺めながら来武士くんがつぶやく。

「今日は暑かったからね。夕立なんてどうせすぐに止むんだから、夏の風物詩と思って通り過ぎるのを待つしかないでしょ」

美子ちゃんは、わたしと同じ年だとは思えないくらいに落ち着いている。それは常日頃から思っていることだった。

……まあ、わたしが特別子供っぽい、というのもあるかもしれないけど。

実際今のわたしは、雷が鳴っているというだけで、怖くて震えが止まらない状態だし。

「ところで、どうやって探す？」

保黒さんが話を本題の方向へと促す。こういうところは、さすが元学級委員というべきだろうか。

「うーん、そうだなあ。校舎内のどこかにあるとはいえ、結構広いし電気もなくて暗いから、探すのも時間かかりそうだなね。やっぱり手分けするのが、効率いいんじゃない？」

二之腕さんの提案に、わたしは猛反発する。

「だ……だめだよ！ みんな一緒に回ろう！ ほら、暗いと危ないじゃない？ みんな一緒のほうが、なにかあったときに安全だよ！」

必死に訴えかけるわたしを、みんな少し驚いたような目を向けていた。

どちらかといえば、おとなしい印象のあるわたし。あまり大声を上げて主張したことなんてなかったから、珍しいものを見たといった感じなのだろう。

でも、今のわたしにとっては死活問題なのだ。ここは断固主張させてもらわなきゃ。

そんな様子を、美子ちゃんと海路くんは、優しい微笑を浮かべながら見つめていた。

わたしが怖がっているということは、このふたりには完全にお見通しのようだ。

と、その刹那。

ジャジャジャジャーン！

突然、激しい音が鳴り響いた。

「きゃあっ！？」

わたしは思わず飛び上がってしまう。

「あっ、ごめん。電話」

土布先くんがいつもの落ち着き払った声で携帯電話を取り出しながらそう言つと、通話を始めた。

今の音は、ケータイの着信音だったようだ。

今日泊めてもらうことになっている親戚からの電話だったらしい。到着が遅いから心配したのだろう。

それにしても、ベートーベンの「運命」……。流行の歌とかを着信音にしないあたりは、土布先くんらしいと言えなくもないけど。

「あはは、相変わらず、江窪さんは怖がりだね〜」

ガタガタと震えていたわたしを見て、海路くんは面白そうに笑っていた。

「うっ、海路くんは相変わらず、意地悪だよ〜」

思わず口を尖らせて文句を返す。

同じクラスだった頃、海路くんはだいたいいつも優しく接してくれたけど、たまに意地悪なことも言われていた。

だから、相変わらず、なんて言い方になったのだ。

とはいえ、それほどひどいことを言ってくるわけじゃなかったから、当ても嫌ではなかったし、今では懐かしくてほのかに温かい気持ちすら溢れているのだけ。

「でも、笑歌じゃなくなったって、怖いと思うのも仕方がないわよね、この雰囲気」

あまり怖いと想像しているような口ぶりではなかったけど、美子ちゃんも校舎の奥のほうに視線を向けながら言う。

まだ真っ暗というほどでもないけど、夕立もひどくなり、かなり暗くなっていた上に、時間的にももう夕方から夜へと変わりゆく頃合いだった。

暗さに目が慣れてきているからか、ぼんやりと廊下の様子はどうか見えるものの、はっきりとは見えなくなっているところも、必要以

上に怖さを増す効果を演出している。

ただでさえ、夜の学校なんて怖いもの。

しかもここは、三年も前に廃校となっている学校なのだ。

もともと年季の入った木造校舎で、ずっと建て替えようという話
はあったのだけど、結局は建て替えられることもなく廃校となつて
しまった東山小学校。

わたしたちが通っていた当時でも、そこかはこの床板や階段が腐
り始め、走ると衝撃で崩れてしまうのではないかと噂されていた。

生徒もいなくなつて三年も経つと、床や窓はホコリにまみれ、壁
は塗装もはがれ蜘蛛の巣が張り、床板に至つては一部抜け落ちてい
るのが見て取れる。

考えれば考えるほど、怖いという思いが膨れ上がってしまう結果
となつた。

だから、

ピカッ！

突然の稲光、そして、

バリバリバリドローン！

間を置かずには轟いた衝撃音で、

「きゃあっ！」

と、わたしが大きな叫び声を上げてしまったのも、仕方がないと
思ってもらえるだろう。

ただ、無意識だったとはいえ、わたしは叫び声を上げてしまつた
だけではなかつたよう。

頭を下げて固く目をつぶり、怖さから逃避していたわたしの耳に、

「ひゅーひゅー」

という来武士くんの声が届いてきたのは、それからわずか一瞬だけあとのことだった。

「さすが、怖がり笑歌ね」

美子ちゃんもからかいの声を向けてくる中、わたしは微かに顔を上げて目を開けた。

ニコッ。

目の前には、海路くんの優しい顔が、超至近距離に……。

「江窪さん、大丈夫？」

心配の言葉をかけてくれる彼の唇が動くたび、その吐息が感じられる、そんな距離。

わたしは怖さで震え上がり、思わずすぐそばに立っていた海路くんに、ぎゅーっと強くしがみついてしまっていたのだ。

「はづつ、ぐぐぐぐぐごめんなさいっ！」

焦りまくりながら顔をそむけるわたし。

と、視線を逸らした先には、黙ってこちらをじっと見つめながら、保黒さんがたたずんでいた。

「あの……保黒さん、どうしたの？」

わたしの問いかけに、微かに目線をずらす彼女。

「いえ、なんでもないけど。……ただ、いつまでくっついてるのかな？って」

「はっ！」

保黒さんの言葉に、慌てて海路くんから身を離す。

「ごめんなさいと海路くんに謝りながらも、わたしは彼にしがみついたままだったのだ。」

「まったく、笑歌ってば、おとなしい顔して結構やるわね」

「や、ちょ、美子ちゃん、違っ、そんなんじゃないってばあゝ！」

顔から火が出そうなほど真っ赤になったわたしは、両方の手のひらをぶんぶんと振るいながら、どもった慌て声を必死で響かせる。

なんとなく、ほのぼのとした雰囲気にも包まれた。

慌てているわたしを、美子ちゃんもしがみつかれていた海路くんも含めて、みんな温かな笑顔で見つめてくれたのだけだ。

今は微かに笑顔を浮かべているものの、さっきの保黒さんの視線がわたしを睨んでいるように思えたことだけが、ちょっとだけ心に引っかかっていた。

小学生だった当時、普段から優しく声をかけてくれていた海路くんではあつたけど、ときどきわたしに意地悪な言葉を投げかけてくることがあつた。

でもそれは、意地悪、というのとはちょっと違っていたのかもしれない。

「あつ、海路くん、リボンが曲がってるよ？」

小学校の頃のわたしは、あまり男子も女子も気にせず接していた。

今でもそれほど変わってないけどね、と美子ちゃんには言われるのだけだ。

とはいえ、まったく男子のことを意識していないというわけでもなかった。

だからこそ、なぜか少し女の子っぽい服を着てくることが多かった海路くんには、男子だというのをほとんど意識せず、気楽に話しかけることができたのだろう。

それにしても海路くん、可愛らしいリボンのついた、薄いピンク色のブラウスを着ていたなんて。

今になってよくよく考えてみると、男のくせに気持ち悪いとか思われて、距離を置かれてしまうような男子だったのかもしれない。

でも、当時のわたしは、全然そんなふうには思わなかった。

今日の海路くんはワイシャツ姿で、さすがに女の子みたいな格好はしていないものの、なんとなく仕草が男っぽくない気はする。

もちろん、全然嫌じゃないし、むしろ、ちょっと美形で可愛い系

なので、思わず目を惹かれるほどなのだけど。

それはともかく、その小学生当時、夏休み直前くらいだったはずなのに、海路くんはいつもどおり長袖の女の子っぽい服を着ていた。襟もとに添えつけられたリボンが斜めになっているのを発見して、わたしは直してあげようと手を伸ばした。

少し屈んで彼の胸の辺りにあるリボンを両手で軽くつかみ、左右のバランスを整え始める。

そんなわたしの髪の毛が、海路くんのすぐ目の前で揺れる。

美子ちゃんいわく「思わずはたきたくなるような頭」のわたしだから、少し敏感になっていたのかもしれない。

はたかれちゃうかも、そう思ったのか、ぱつと後ずさりして身を離してしまった。

もちろん、海路くんは美子ちゃんみたいに、わたしの頭をはいたりなんてしなかったけど。

心なしか頬を赤く染めた海路くんは、妙に色っぽく思えた。

ぱーっと彼の顔を見つめていたわたしに、

「これくらい、自分で直せるから。……だいたいそんなに、べたべたくっついてこないでよっ、暑いんだから！」

海路くんは真っ赤な顔のまま、そんな言葉を返してきた。

暑いなら長袖なんて着てこなきゃいいのに。

なんて意地悪な反論を、今なら思い浮かべたりもしてしまうのだけど。

このときのわたしは、せっかくリボンを直してたのに、どうしてそんな言い方をするの？ と沈んだ気持ちになってしまった。

だから、

「でも……」

「でもじゃなくて！」

言葉を挟む隙もないほど、わたしを拒絶するような声を向けてくる海路くんに対して、

「海路くんの意地悪……」

と、うめき声をしぼり出すことしかできなかった。

今となればそれは、海路くんだって男の子だから、女の子がべたべたくっついてきた恥ずかしさの裏返しで、つつい強く言っただけ。まっただけなのだということもわかるのだけ。

それにしても、海路くんはどうしていつも、あんな女の子みたいな服を着ていたのだろうか？

色白で肌が焼けるのを気にしているようだったというのも、女の子っぽい感覚と言えるかもしれないし。

無神経なわたしは、当時直接海路くんに訊いてみたこともあったのだけど、曖昧な答えしか返ってこなかった。

美子ちゃんに意見を訊いてみても、うくん、どうしてかしらね？ と、いつものいたずらっぽい笑みを浮かべるだけだった。

べつに病弱で肌が弱いつてわけじゃないみたいだったけど、どうしてもその理由にまではたどり着けなかった。

「ご両親が可愛いもの好きとかで、海路くんは男子だとわかっていても、可愛い服を着せたくなくなってしまふとか。そんな感じなのかな」と勝手に考えていたのだけ。

海路くんには、ふたつ上のお姉さんがいるということを知った。

両親が可愛い服を着せたいだけなら、海路くんじゃなくて、お姉さんのほうに着せるのが自然だよ。

そう考えると、全然わからなくなってくる。

だけどそんなふうに、ちょっとした謎を持っていたことも、海路くんが気になった理由のひとつだったのかもしれない。

このとき以外にも、無神経にべたべたくっついていたりすると、そのたびに当時の海路くんはわたしを軽く突き飛ばしたりして恥ずかしくなっていた。

そんな彼の行動を受けた鈍感なわたしは、嫌われちゃったのかな、なんて思って悲しい気分になった。

嫌われていると思ったら自ら離れていくのが普通感覚なのかもしれないけど、わたしの思考回路的には、嫌われたくないからもっとお喋りしよう、という考えに向かっていくようです。

それはほとんど無意識の行動ではあったんだけど、海路くんに対して、わたしはよりいっそう積極的に話しかけるようになっていった。

無意識的にはあったけど、わたしはべたべたくっついてしまったりもして、また海路くんから拒絶の言葉を受けて……。

メビウスの輪のように、ちょっとねじれた感じの、エンドレスな世界が続いていくことになった。

そんなわたしと海路くんの様子を、美子ちゃんはいつも黙って眺めているだけだったのだけ。

あからさまに抗議の声を向けてくる人もいた。

「まったく、あなたたちはいつも……。教室内でべたべたしないよね」

それは、学級委員の保黒さんだった。

抗議の声とはいっても、それほど刺々しい言い方をされるわけもなかったし、わたしもそう言われたら素直に従っていた。

でも保黒さんの発言は、少し真面目すぎるようにも思う。

そりゃあ教室内で男子にべったりくっついていたわたしが全面的に悪かったのは確かなのだけど。

たまにわたしは、思わず不満顔を浮かべてしまうこともあったよ
うだ。

「ほらほら、笑歌。もう休み時間終わるわよ。席に着きましょう。

保黒さんも、海路くんも、ね」

そんなときはいつも、微妙な空気が流れ始めているのを感じ取ってくれたのか、美子ちゃんが場をなだめて事なきを得ていた。

やっぱり美子ちゃんは、頼りになるし美人だし、女性として見習いたい存在だわ。

そういえば小学校の当時から、ちょっと大人びた雰囲気だった美子ちゃんは、男子になかなかモテていた。

何度かラブレターをもらっていたようにも思う。

だけど、おつき合いを始めた、という話を聞いたことはなかった。

もしそんなことがあったら、いくら鈍感ではあっても、毎日のように一緒にいる親友のわたしが、気づかないはずがない。

だからきつと、全部断っていたのだろう。

そう考えてみて、なんとなくホッとしているわたしがいたりもし

て。

どうしてそんなふうに思ったのか、それはよくわからないけど、
ともかく美子ちゃんとはずっと親友でいたいと、今でもわたしは思
っている。

バシバシバシ！

わたしは突然頭に襲いかかってきた痛みに、いやおうなく現実へ
と引き戻された。

「懐かしい校舎だけど、これだけ薄暗いと別物みたいに思えるわよ
ね」

そうつぶやきながら、美子ちゃんは意味もなくわたしの頭をはた
き続ける。

もちろんはたいしている理由は、なんとなくか、目の前にあんな
の頭があつたからとかなのだろう。

こんな不条理な子が親友で、わたしは本当にいいのだろうか？

自然と疑問が浮かんでくるものの、浮かんだ途端に美子ちゃんの
平手打ちを頭に受け、そんな疑問はどこか空の彼方へと飛ばされて
しまうのだった。

雨は激しさを増し、窓ガラスを容赦なく叩きつけている。たまに響く雷鳴をBGMに、わたしたちは口数も少なくなつて、慎重に歩みを進めていた。

そんな中、わたしはふと気づく。ザーザーという雨音に紛れて、なにやら不規則なノイズのような音が混じって聞こえてくることに。怖さを振り払って、わたしは沈黙を破る。

「みんな……。なんか、変な音が聞こえない？」

わたしの声に、全員が耳を澄ませる。足音までも止まったことで、雨音がより大きく響く。その中に溶け込むように、はっきりと別の音が、誰の耳にも確認できたようだ。

思わず息を呑む。

誰もいるはずのない、廃校となつた小学校の校舎。どうしてその校舎の奥から、不規則だけど継続的な音が流れてくるのか。

答えは、誰にも出すことはできなかつた。

沈黙がわたしたちの心に恐怖の念を湧き起こらせる。だけどその沈黙は、来武士くんによってすぐに破られた。

「……行ってみよう……」

力強い口調でそう言うと、来武士くんは率先して音のしているほうに向かって歩き出した。

わたしたちも、それに続いてそれぞれの足を繰り出し始める。

といつても、音の発生源は今まで歩いてきた廊下をまっすぐ行っただ先。

みんなが一旦止めていた足を、再び動かし始めただけのことなのだ。

でも、これから行く先に、なにかある。その恐怖心を持って進む歩みは、自然と重い足取りとなっていた。

それまで以上の慎重さで、一步、また一步と、音のほうへと近づいていくわたしたち。

謎の音は、どうやら職員室の中からこぼれ出してきたようだ。

もしかしたら、この学校にいた先生や生徒たちの誰かが懐かしんで入り込んでいるだけなのかも。

そんな思いも浮かんだけど、それならば電気くらいは点けるだろう。

……いや、電気はもう通っていないか。

とはいえ、それでも懐中電灯を使うとか、いろいろと明かりを得る手段はあるはずだ。

ごくり。誰かがツバを飲み込む。

そんな微かな音すら聞こえるほど、わたしたちの神経は、謎の音のほうに向けて研ぎ澄まされていた。

もちろん雨音は響いていたはずだけど、そんな雑音なんてまったく耳に入っていない状態だったのだ。

冷や汗が背筋を伝う感触までもが、はっきりと感じられた。

やがて、職員室のドアの前までたどり着く。中からは確かに、なにかノイズのような音が響いてきていた。

「……開けるよ」

ドアに手をかけながらわたしたちのほうに顔を向け、来武士くんは確認の声をささやく。

一同は息を殺し、黙って頷きを返す。

ガラッ！

大きな音を立てて、職員室のスライド式のドアが開け放たれた。

おそろおそろの中へと入っていくも、先生方の机が整然と並んでいくだけだった。

机の上には、基本的になにもない。

ところどころ、持ち帰るのを忘れたのかそれともいらぬから残していったのか、わら半紙の束などが置きっぱなしになっている机も見受けられたものの、それ以外にはなにも見当たらなかった。

電気のスイッチのほうへと歩いていった美子ちゃんが、パチパチとスイッチを操作してはいたけど、明かりは点かなかった。やっぱり、電気はすでに止められていたのだ。

廊下でも聞こえていた謎の音は、職員室の中で反響するように、より鮮明になって響き続けていた。

みんな黙ったまま、それぞれ職員室の中へと散らばっていく。

「あ……これだ」

土布先くんが、いつもと変わらない様子の落ち着いた声を上げる。彼のもとへ集まってみると、職員室の片隅に置かれたなにかから、

その音は響いてきていた。
そして、それは。

「ラジカセ、だね」

保黒さんがつぶやく。

見れば誰もがすぐにわかるとおり、それはホコリにまみれた一台のラジカセだった。

どうやら電源が入ったままになっていて、ラジオの音が流れていただけのようだ。

ただ、チューニングダイヤルの周波数が少しずれていて、ちゃんと受信できていない状態だった。ノイズ混じりの音が聞こえていたのは、そのためだ。

「で……でも、電気、来てないはずだよね!？」

わたしはそのことに思い至り、怯えた声を発する。

屈んでラジカセを調べ始める土布先くん。

真っ先に確認したコンセントの先は、どこにもつながっていないかった。

それを見たわたしは、よりいっそう恐怖心を高めていたのだけど、土布先くんはすぐにラジカセの裏側を確認する。

カチャリとプラスチックの部品を取り外すと、彼は納得したように頷いていた。

「電池が、入ったままだ」

その声に、わたしはほっと胸を撫で下ろした。

「……だけど、それならとくに電池、切れちゃってるんじゃない？」

美子ちゃんが冷静に反論する。

「うーん……。リモコンで操作できるラジカセみたいだから、ずっとついてたわけじゃなくて、雷で勝手に電源が入ってしまったとか」

そう分析する土布先くんだったが、答えを返しながらも、ちょっと納得のいつていないような表情を浮かべていた。

「ああ、なるほどね」

反論の言葉を発した当の本人である美子ちゃんは、彼の説明に、すっかり納得していたようだったけど。

もともと美子ちゃんは、機械オンチというほどではないものの、そんなに詳しいわけではない。

わたしもそうではあるのだけど、うちの場合、お父さんが電力会社に勤めているという環境にあった。

うる覚えではあったけど、小さい頃からお父さんにいろいろと聞かされていたことを思い出しつつ考えてみると、なんとなくさっきの土布先くんの説明では納得できない気がしていた。

電化製品の電源が勝手に入るのって、トラックとかの違法な無線のせいだとか、そういうのがよく言われている。

もちろん雷が原因で、というのもないわけじゃないとは思っけど、それにしただってその場合、もともと待機状態だったということになるはず。

ずっと入れっぱなしの電池で動作しているという状態のラジカセ。待機電力だけとはいえ、廃校となってから三年近く経ったはずの今

まで電池が残っているものだろうか。

謎は残るものの、わたし自身も大した知識があるわけじゃない。実際に今こうして目の前でラジカセは動いているのだから、そういうことだってあるのだろう。

「ま、音の正体がわかってよかったな！」

来武士くんが明るい声を響かせ、パチリとラジカセの電源を切った。

彼はあまり深く考えていないようだ。

うん、でも、それでいいんだと思う。

それより今は、タイムカプセルを探すゲームに専念しよう。

せっかく海路くんが用意してくれた、楽しいイベントなんだから。

わたしたちは安堵の息をついて、職員室をあとにした。

職員室から出たわたしたちの目の前の窓には、相変わらず雨粒がぱらぱらとぶつかっていた。

とはいえ、雨足はさっきまでと比べるとかなり弱まっている。ときどき、稲光と雷鳴が、時間を置いて確認できるくらいだ。

光ってから音が響くまでの時間も長くなっているみたいだから、もう夕立のピークは過ぎたということだろう。

窓から見える外の景色は、すっかり真っ暗になっていた。

夕立の厚い雲が覆っているからだけではなく、すでに夜と呼んでいい時間帯となっているに違いない。

わたしは腕時計もしていないし、今どき珍しくケータイも持っていない身なので、正確な時間まではわからないけど。

おそらく、七時は越えているんじゃないかな。

「みんな、大丈夫なの？」

頭の中では考えがつかっていたものの、わたしの質問は他のみんなにとっては唐突で、一瞬、なにが？ といった雰囲気の流れた。

「まったく、この思考ワープ天然娘は……。ちゃんと筋道を立てて喋りなさいな」

はう。美子ちゃんに怒られた。

うう、でも、思考ワープ天然娘なんて、ちょっとひどい言われような気がする。

そこまでひどく、どこか彼方に飛んだような質問というわけでもなかったと思うのだけど。

「ただ、わざわざ反論するのもおかしいだろうし、わたしはちょっとしどろもどろになりながらも、なんとか考えを伝えようと言葉を加える。」

「いや、あのね、こんな時間だけど、みんな、大丈夫なのかなってわたしと美子ちゃん以外は、わざわざ遠いところから来てるんだし……」

質問の補足を終わると、笑顔を浮かべながら、

「はい、よくできました」

と言って、美子ちゃんがわたしの頭をバシバシバシ！と、はたいた。

「あうっ！　せめてはたかないで撫でてよ！　っていうか美子ちゃん、わたしをからかったのね？」

頭を両手で庇いながら抗議の声を上げるわたしに、美子ちゃんは涼しい顔で言い返してくる。

「もちろん。最初の言葉で笑歌がなにを訊きたいのか、みんなわかってたはずよ。ね？」

美子ちゃん言葉に、みんな黙って頷く。そんなみんなの表情は、誰ひとりとして曇ることのない温かな笑顔だった。

「はうっ。それなのに、わたしに説明させるなんて、美子ちゃんの意地悪」

「いつもどおりってだけでしょ。あんたはわたしのおもちやなんだからさ。今回もばっちり、楽しませてもらったわっ！」
「あう~~~~！」

そんなわたしたちのやり取りを、みんな笑顔のまま見つめていた。でも、わたし自身も、わかっている。

べつに美子ちゃんが意地悪なだけでやっているわけじゃなくて、場の雰囲気や和ませるためにやっているんだってことが。

「あはははは、やっぱり笑歌いじりは最高ね！ 楽しいったらないわ！」

……え〜っと、ほんとにそうなのかな？ なんか自信なくなってきた。

「ま、それはともかく、ちゃんと質問に答えるかな。おいらと雄志は大丈夫だよ。雄志の親戚の家に、一緒に泊めてもらうことになってるんだ」

「うん。さつき電話で、もうちょっと時間かかるけど、心配いらないって言うておいた」

来武士さんと土布先くんが、話の流れを変えて、わたしの質問に答えてくれる。

ふたりとも、感謝です。
意外と来武士くんって、そういうところはしっかりしてるんだよね。

明るいのはいいとしても、いつもはちょっと軽めで無計画なところがあるというのに。

「わたくしも大丈夫ですわ。旅館を手配してありますので。親戚が

経営しておりますのよ」

「それで、その旅館にあたいと夕菜も一緒に泊めてもらうんだ」

「宿泊費もお友達だからいらなんて言ってくれて、とっても助かったわ。ちよつと悪い気はしてるんだけど」

「あら、全然構わないんですよ。わたくしとしても、ひとりでは寂しいと思っておりますし、ありがたいくらいでしたわ！」

頼さん、二之腕さん、保黒さんの三人も、まったく心配はいらないそうだ。

「……海路くんは？」

残るメンバーはふたり。

自分から話してくれなかったため、わたしはまず、海路くんに問いかけた。すると、

「ん？ ああ、ぼくも大丈夫。えーっと、ほら、親戚……町長さんのところに泊めてもらうから。それにもともと宝探しゲームを計画してたからね、帰りは夜になるって伝えてあるんだ」

そう答えを返してくれた。

「とすると、あとは、ロリちゃんだけね」

美子ちゃんの声に、みんなが蚕ちゃんのほうへと視線を向ける。

「あはっ、覚えてないんですか？ わらちはずっと、地元に残ってますから、全然問題なっしんぐですよ！」

全員に見つめられたからか少々照れ笑いを浮かべながら、彼女は

明るくそう言った。

そっか。蚕ちゃんはずっと近くなんだったわね。

……あれ？ そういえば、彼女の家ってどの辺だったっけ？

とっさに思い出せず、わたしはちよつと困惑する。

うーん、でもわたしの記憶なんて、もともとあてにならないほどぼやけているわけだから、思い出せなくても不思議じゃないか。

さすがに小学校から友達なのに、家はどこだっけ？ なんて改めて訊くのも失礼な気がするし、あとで美子ちゃんにでも教えてもらおう。

きつと、あなたはまたそんな大ボケを……。まったく、鳥頭なんだから。とかなんとか言われて、頭をバシバシとはたかれちゃうんだろっけど。

それはともかく、みんな、時間は大丈夫のようだ。

もともと、タイムカプセルをすぐに掘り返したとしても、そのあとすぐに解散ってことはないと言っていた、というのもあるだろう。せつかく数年ぶりに何人もの友達に再会するのだから、懐かしい時間を少しでも長く楽しみたいと思うのは普通のことだよ。

そういった意味では、海路くんの仕掛けた宝探しゲームは、とってもナイスなアイデアだったと言えるのかもしれない。

「とにかくさ、タイムカプセルを見つけるまで、帰れるわけないじゃないー！」

拳を握りしめて力説する来武士くんは、他のみんなも同意の言葉を重ねていた。

わたしとしても同じ思いだ。

かといって、海路くんに答えを教えてもらって見つける、というのでは味気ない。

どうしても見つからなかったら仕方がないけど、それまではみんな協力して宝探しを楽しむ。

それが今、わたしたちに課せられた使命なのだ。

……ちょっと仰々しいかもしれないけど、それくらいの勢いだっ
た。

みんな、陰ることなく素直な心からの笑顔を浮かべていた。

そう、このときまでは。

東山小学校の校舎は、教室棟、第一特別棟、第二特別棟が平行して並び、その中央を垂直に貫くような配置の廊下でつながっていた。真ん中にある第一特別棟は、職員室や保健室といった一部の特別教室があるだけなので、建物も少し短めだった。

そのため、上空から見ると、漢字の「王」のような形になっている。

校舎は基本的に木造二階建てになっていて、教室棟には、一階に一年から三年の三クラス、二階に四年から六年の三クラスがあった。第二特別棟だけは、教室に必要な広さと数の関係上、三階建てになっていたのだけど。

「ふえっ!?!」

ふと微妙に変な声を発してしまったわたし。みんなの視線が降り注ぐ。

「あ……あれ、なんだろう?」

自分の発した声がちよつと恥ずかしかったものの、わたしは気を取り直して右手を上げると、指を伸ばす。

わたしが指差す先には、第二特別棟へと続く廊下が続いていた。その突き当たりは上り階段になっていて、左右に廊下が続いているのだけど、そこを右に曲がったほうに、なにやらぼんやりとした明かりのようなものが見えていたのだ。

「……明かり、だよな」

「そつみたいですね」

つぶやいた保黒さんに頼さんが肯定の言葉を添える。

でも、明かりだろうということとはわかってても、なんの明かりなのかまでは、誰にも判断がつかない。

だいたい電気が来ていないことは、さっきの職員室の件でよくわかっていた。

それなのに、いったいなにが光を発しているというのだろうか。

その明かりはなんとなく、強くなったり弱くなったりしているようにも見える。

「……行ってみよう」

素早く決断して歩き出したのは、さっきと同じように来武士くんだった。

わたしたちも黙って彼のあとに続く。

第二特別棟にたどり着き、明かりの方向を見てみると、どうやらその明かりは家庭科室から漏れてきているようだった。

周りが暗いから余計に明るく感じるけど、それほどはつきりとした光ではない。

ただ、さっきまでと比べると格段に明るくなったようにも思える。黙って頷き合つと、わたしたちは静かに家庭科室へと向かった。

ぼわっ。

家庭科室に入ると、火が、燃えていた。

「……………!?!?」

突然目に飛び込んできた光景に言葉を失うわたしたち。

「な……！？ 火事だっ！」

「わかってるよ！ でも、どうして！？」

「ガスだって、来てないはずだよね！？」

まだ燃え始めたばかりのようで、コンロのある調理台のひとつの上で、メラメラとくすぶっている程度といった状態ではあった。

だけど、明らかに火事になりかけている現状に、わたしたちはパニックに陥る。

「もう、落ち着いて！ 早く、消火器よ！」

美子ちゃんが叱咤の声を飛ばす。とはいえ、美子ちゃん自身も軽くパニックになっているのが、その声の震えからよくわかった。

だいたい、近くに消火器なんてなかったのだ。

消火器が置かれているのは、非常ベルのある場所だけど、それはこの家庭科室の目の前にもあった。

でも、火を見てすぐに行動に移していた土布先くんが、そこに目的の物がないのをすでに確認していた。

もちろん、非常ベルが鳴るはずもないし、鳴ったところで消防署に連絡が行くわけでもないだろう。

そこで、わたしは気づく。

……そうだ、消防署！

「土布先くん、ケータイ持ってたよね！？ 119番に電話を！」

「あっ、そうか！」

そんなことにも気づかなかったなんて、冷静に行動しているように見えて、やっぱり土布先くんもパニック状態だったのだろう。それを言ったら、美子ちゃんや他のみんなだってケータイくらい持っていそうなものだけど、どうやら誰も気づかなかったみたいだ。焦りは判断力を鈍らせるということなのかな。だけど、とりあえずこれで安心できる、そう思ったのも束の間。

「あれ？ ダメだ。圏外になってる」

「ええ？ さつき、電話できてたじゃない！」

思わずそんな文句の言葉が飛び出してしまふ。そんなことを言われても、土布先くんだって困るだけだというのに。

土布先くんは、廊下に出たりもしてみていたけど、結局、電波を受信できる場所は見つけられなかったようだ。

田舎だからなのか、電波の入りが悪いことが多いって、以前に美子ちゃんも愚痴っていたことがあったっけ。

調理台の上でくすぶっていた炎は、わたしたちが戸惑っているあいだにもどんどんその勢力を広げると、天井まで届きそうなほどの火柱へと成長してしまっていた。

「いったい、どうすればいいの〜!？」

「どうにも、ならないかも。逃げるしか……」

焦りまくるわたしの声に、海路くんがそう答えた、そのとき。

「……待ってください。わ……わらちに、お任せです!」

微かに震える声ではあったけど、はつきりそう言つと、蚕ちゃん

はスタツとわたしたちの目の前に飛び出す。

舞い上がる火柱に悠然と立ち向かう小さな女の子。

いや、もちろんクラスメイトだったのだから、同い年の女の子と
いうことになるのだけど。

でも彼女の容姿からは、どうしても幼い印象しか受けなかった。

そんな蚕ちゃんが、わたしたちの目の前でバツと両手をめいっば
い広げ、

そして、

踊り出した。

「ほへ？」

思わず変な声を漏らしてしまったのも、当然の反応だね？

実際、他のみんなも啞然とした表情で、踊り続けている蚕ちゃん
の姿をただただ見つめていた。

なんか、幼稚園児が一生懸命お遊戯しているような、そんなハラ
ハラした感覚さえ湧き起こってくる。

と、次の瞬間、

火柱の放つ光が反射しているのか、きらきらと輝く白い糸のよう
なものが蚕ちゃんの体から放射状に飛び出し、家庭科室全体に広が
っていく光景が目映った。

「わっ！？ あれは、なに？」

わたしの声は、炎の燃え盛る音と、そして水の音によってかき消
される。

そう、水の音。

いつしか家庭科室の天井辺りからだろうか、大量の水が噴出し始めていた。

最初こそ、余計に勢いが増してしまったように思えたものの、徐々に火柱はその力を弱め、明らかにどんどん小さくなっていく。そして、蚕ちゃんの踊りがよりいっそう激しくなったと思ったそのときには、ついさっきまで燃え盛っていたはずの炎は完全に消えていた。

踊り疲れたのか、その場に膝をついてしまった蚕ちゃんに、わたしたちは駆け寄った。

「ロリちゃん、大丈夫？」

美子ちゃんの呼びかけに、笑顔を返す彼女。

「今のは、いったいなに？」

保黒さんは間髪を入れず質問を浴びせる。

蚕ちゃんが踊り出し、それによって水が降り注いだ。わたしたちには、そんなふうに見えていたのだから、疑問を口にするのも当然だろう。

だけど、蚕ちゃんの答えは、

「ん〜と、スプリングラーの機能が、ちゃんと残っていたみたいですね」

というものだった。

「でも、電気も来てないのに、なんで動いたの？」

「確かスプリングクラーとかって、非常電源が用意されてるとかじゃなかったっけ？ よくは知らないけど……」

わたしの疑問には、土布先くんが控えめに意見を添えてくれた。
……そっか、そういうものなのかな？

ただそれ以外にもまだ、わたしたちにとっては不可解なことがあった。

「それじゃあ、ロリちゃんは、どうして踊ってたの？」

「え〜っと……。いや、その……、火を見ると興奮して……」

美子ちゃんが怪訝な顔をして問いかけたけど、蚕ちゃんは視線を逸らしながらそう返すだけ。

さすがに納得はいかなかったけど、涙目になり始めている蚕ちゃんを見てみると、なんとなくそれ以上問い詰めるのは悪いような気になってしまう。

それは実際に詰問していた美子ちゃんも同じだったようで、

「ファイアーロリちゃんってことね！ 見世物にしたら面白いかも！ リンボーダンスでもやってみる？」

と、いつもの彼女のノリになって、蚕ちゃんをからかうような言葉に向けていた。

「はみゅ〜ん、美子さん、ひどいです〜」

口を尖らせている蚕ちゃんは、やっぱり幼い印象で可愛かった。確かに美子ちゃんが言うように、見世物にしたら面白いかも。

「それに、パニックに陥ってた笑歌も、踊ってるみたいだったわよね！」

「ほへっ?」

突然美子ちゃんが話の矛先を向けてきたので、わたしは目を丸くしてしまう。

「背も小さめで合ってるし、ロリちゃんとコンビで見世物になってもらうのが最高ね!」

「は……はっ! そんなの、やだよ!」

わたしの不満の声は、水浸しになった真っ暗な家庭科室に、空しくこだまするだけだった。

水浸しの家庭科室の中で軽くタイムカプセルを探したあと、わたしたちは廊下へと出た。

海路くんの様子を見れば、ここにはないだろうなどと、だいたい予測はできたのだけど、念のため探してみたのだ。

案の定、なかったわけだけど。

でも、なんとなくタイムカプセルがどこにあるのか、みんな、予想できていたのかもしれない。

わたしでさえ、きつとあそこにあるだろうと、あたりはつけていたくらいだから。

ただ、少しでも長く宝探しを楽しみたい。

そう考えて、後回しにしているふしがあるのだろう。

だけど、ちょっとだけその思いも揺らいできていた。

さっきの家庭科室での一件は、明らかにおかしい。

ガスが通っていないはずの家庭科室で、どうして火がついたのか。それが不思議で、なんだか怖くなっていたのだ。

いや、もちろん蚕ちゃんが一番おかしかったわけだけど、どういうわけかこのときのわたしたちは、そのことについてまったく触れようとしなかった。

思えばその前の職員室のことだって少し不可解だったし、ちょっと怖いかも……。

ここは夜の廃校なんだということを、いやが上にも意識してしま

う。

とはいえ、さっきも話していたとおり、みんなタイムカプセルを

見つけるまで、帰る気なんて毛頭なかった。

そんな覚悟を持って歩き始めたわたしたちは、夜の廃校というものを甘く見すぎていたのかもしれない。

とりあえず、今いる第二特別棟の上の階に行こうかという話になり、階段の手前 職員室のある第一特別棟とつながる廊下の突き当たりまで戻ってきていた。

第二特別棟の階段は、この位置にしかない。
階段前の廊下でみんな一旦足を止め、暗い階段を見上げる。

完全に夜となってしまうた今、階段を上った先の踊り場部分でさえ、真つ暗闇でなにも見えはしない。

しかも古ぼけた木の階段となっているため、ちゃんと上っていきるのがすら不安になってくるほどだ。

その不安を消し去るかのように、ごくりとツバを飲み込む。

「それじゃあ、行くか」

意を決して足を踏み出す来武士くんに、わたしたちも黙って続いて歩き出した。

ちようどそのときだった。

すさまじい轟音が響き渡ったのは。

木がものすごい勢いで裂けるような破砕音。
天井からなにかが大量に落ちてきたのだ！

それは、ホコリにまみれた床板や梁などだったのだろう。
もちろん真つ暗な中だから、このときのわたしたちには、なにがなんだか、まったくわからなかったのだけだ。

「危ない！」

不意に、海路くんの声が聞こえた。

そう思った刹那、わたしの体は階段のほうへと突き飛ばされていた。

飛ばされた勢いで階段の手すりの部分に思いっきりおなかの辺りをぶつけ、むせ返るわたし。

周囲には轟音とともに、ホコリが激しくもうもくと舞い上がっているようだった。

ホコリも吸い込み、そこかしこで、みんなの咳き込む声が響き渡っている。

すぐに、激しく響いていた音は鳴りを潜めた。

やがてホコリも静まると、わたしはどうにか身を起さず。

そして、周りを見渡して状況を確認してみた。

わたしは今、階段のすぐ手前にいる。

階段に背を向けて立ち上がったわたしの目の前は、完全に瓦礫の山と化していた。

実際には木造校舎なのだから、瓦礫というのは正しい表現ではないのかもしれないけど。

ともかく、大変な状況だというのはすぐにわかった。

天井を見上げてみると、そのすべてが崩れ落ちたわけではないようだった。

でも、瓦礫は文字どおり山となり、行く手を遮るには十分な壁となつてわたしたちの目の前に立ちはだかっていた。

……はっ！ みんなは？

わたしは不安になって声を上げる。

「みんな、大丈夫!？」

「……ええ、大丈夫よ」

すぐ後ろから、美子ちゃんの声が聞こえた。

「わらちも大丈夫です」

「おいらも、どうやら大丈夫みたいだ」

蚕ちゃんと来武士くんからの返事も、すぐ横から聞こえてきた。
三人は立ち上がり、わたしのそばへと身を寄せてくる。

「他のみんなは……!？」

わたしは焦りを乗り越えて、泣き出しそうな勢いで辺りを見回しながら叫んでいた。

「わたくしも、大丈夫ですわ」

「オレも、大丈夫」

「あたいも大丈夫だぜ」

「ウチもね。ちょっとホコリで目が痛いけど」

「……ぼくも、もちろん平気だよ」

頼さん、土布先くん、二之腕さん、保黒さん、そして海路くんも、
どうやら平気だったようで、わたしの呼びかけに声を返してくれた。

ただ、彼らの声は、今日の前に立ちはだかる瓦礫の向こう側から
聞こえてきた。

ということは、わたしたちは今、二手に分断されてしまっている

ということになる。

階段側のわたしたち四人と、瓦礫の向こうにいる残りのメンバーだ。

「どつやら、分断されてしまったみたいだな」

わたしの思いを代弁してくれるかのように、来武士くんが瓦礫の向こう側のメンバーに言葉を放つ。

「うん、そうだね。でも、仕方がないでしょ。ウチらのほうは、別の道を探してみるよ」

来武士くんの言葉に、保黒さんが状況を分析して、決断の声を返してきた。

瓦礫の山を切り崩して合流するなんてことは、どう考えても不可能そうだったのだから、考えられる手段はそれしかないだろう。

「わかったわ。……しばらくお別れってことになるけど、気をつけてね」

「ええ、そちらも。ご武運をお祈りいたします」

美子ちゃんと頼さんが言葉を交わすと、向こうの部隊は瓦礫から遠ざかっていった。

こうしてわたしたちは、二手に分かれた。

わたしたちは天井や足もとが崩れる危険性を実感しながらも、どいうわけか、タイムカプセル探しを止めようとは微塵も思わなかった。

大勢で行動していたと思ったら、分断されてしまいましたね。うふふ、期待どおりの展開と言えるでしょうか。

一気に人数が半分減ったそれぞれのグループ、どちらを眺めているのが面白いかしら。

……そうね、あの子がいるこちらのグループのほうが、楽しみがある構成と言えそうですね。

決めました。こちらについていくことにしましょう。どうやら、みなさんもお待ちかねのようですし。

わたくしははやる気持ちを抑え、静かに彼女たちのあとを追いかけるのでした。

わたし、美子ちゃん、来武士くん、蚕ちゃんの四人は、一步一步慎重に階段を上っていた。

老朽化した校舎だから崩れてしまう可能性がある、というのももちろんあった。

でも、明かりのない校舎内、暗闇に目が慣れてきているとはいえ、足もとさえはつきりとは見えない状況なのだから、慎重にならざるを得なかったのだ。

わたしたちは危険から身を守るべく、そして暗闇の中に身を置く心細さを紛らわすべく、お互いに手をつないでいた。

わたしの右に美子ちゃん、さらにその右に来武士くん、わたしの左側に蚕ちゃんが並び、ほぼ一列になって、身を寄せ合うようにながら階段を踏みしめていく。

それにしても、今わたしの右には美子ちゃん、左には蚕ちゃんがぴつたりと寄り添っている。

左右から感じられる温もりと、ほのかな甘い香りを、わたしは一身に受けていた。

と考えると、右側に寄り添っている美子ちゃんにとっては、左側にわたしが、そして右側に来武士くんが身を寄せていることになる。

危険があるかもしれないし、手をつないで行きましょう。そう提案したのは、美子ちゃんだった。

しっかりとっていて、背もすらりと高め、長い黒髪をゆったりと揺らす美人タイプの彼女。

ずっと親友として一緒にいるからよくわかるのだけど、美子ちゃんは男子に結構人気がある。

ただ、あまり近寄らせない雰囲気があるのか、色恋沙汰の話はまったく聞いたことがなかった。

美子ちゃんの靴箱にラブレターが入っていたのを見たことはある。だけど彼女は、直接見たわけではないけど、おそらく丁重にお断りしていたはずだ。

だからわたしは、美子ちゃんって男の人に興味がないのだと、ずっと思っていた。

毛嫌いしているというわけではないだろうけど、それでもあまり自分から男子に近寄ったりすることはなかった。

それなのに、状況が状況だからか、さっき手をつなぐ提案をした美子ちゃんは、少し恥ずかしがっている様子だった。来武士くんの手を自ら進んで握っていた。

もちろん言葉どおりの意味、危険だからまとまって歩こう、転んだりしたら大変だから手をつないでおこう、ということだとは思っただけ。

それでもなんとなく、ほんとになんとかなくだけど、どういうわけかちよつとそこに、わたしはなんだか引っかかるような気持ちを感じていた。

うーん……。

もしかしてわたし、美子ちゃんを取られちゃうんじゃないか、なんて、来武士くんに対して嫉妬してたりするってこと？

冗談で美子ちゃんが言っていたみたいに、わたしって本当に、そっちの趣味とか、あつたりするってことなのかな？

自分の心のことなのに、他人事のようにそんな疑問を浮かべてみるものの、それもやっぱり違うように思えた。

なんて言っていないかわからない、言葉として表現できないような、もやもやしてはつきりもしない感覚。

すぐ目の前も見えない濃霧の中を歩いているようだった。

……実際のわたしは、すぐ目の前も見えない暗闇の中を歩いているのだけだ。

バシバシバシ！

「はっつ！？」

突然の衝撃に、わたしは現実に引き戻される。

美子ちゃんが握っていたわたしの手を離し、いつものように頭をはたいたのだ。

「こんなときに、ぼーっとしないで。なにかあったら、さすがに守りきれないわ」

そう言つと、すぐにまたわたしの手をぎゅっと握り直してくれる。いきなり頭を叩くのはちよつとどうかと思うけど、美子ちゃんの優しさがしつかりと感じられた。

ぼんやりしたわたしを支えてくれるのは、いつでも美子ちゃんだった。

バシバシと頭をはたいたりしつつも、彼女はいつもわたしを心配してくれているんだ。

そんな温かな気持ちに包まれていると、

「まったく、お子様のおもりは大変だわ」

なんて言われてしまった。

とはいえ、真っ暗だから彼女の顔色までは見えないけど、きつとさっきの思わず出てしまった言葉に美子ちゃん自身が恥ずかしくなつて、真っ赤になつてゐるに違いない。

つけ加えた言葉は照れ隠しだと、わたしにはわかつた。

「お前らつて、やつぱり仲いいよな」

「ほんとですね。ちょっと怪しいくらいです……」

来武士くと蚕ちゃん言葉に、わたしまで照れてしまつた。

「……………つて、怪しいつてなによ……!?!」

相変わらず、ちょっと反応の鈍いわたしだつた。

階段のちょうど一階と二階の真ん中、そこには踊り場と呼ばれる場所がある。そして階段はそこから百八十度方向を変え、さらに上へと続いていくことになる。

身を寄せ合つたわたしたちは今、その踊り場まで到達して、ゆっくりと体の向きを変えたところだつた。

階段や踊り場に窓はない。

踊り場の天井には蛍光灯が取りつけられていたと思うけど、電気が通つていない今ではその役目を果たすことはなかつた。

暗がりに慣れた目にぼんやりと映る階段や壁の輪郭だけを頼りに、わたしたちは慎重に足を動かす。

右端に並んでいる来武士くんを支点とするように、弧を描いて方向転換し終えた、そのとき。

ふと上のほうから、ガサリという物音が聞こえてきた。

「え？ なに？」

思わず声が漏れてしまう。

もちろんわたしが声を出すまでもなく、みんな気づいていた。

階段を黙って見上げると、その先は真っ暗だった。

ただ、階段を上りきった辺りに、微かな人影のようなものが確かに見えたのだ。

そしてその影は、左右と前に続いている廊下のうちの、左側へ曲がると、すーっと滑るように移動していった。

わたしたちは慎重に、その人影らしきものを追った。

階段を上りきると、廊下の窓から薄く明かりが差し込んでいたものの、やはり周囲は暗くてよく見えない。

やけに静かだった。

すでに雨は止んでいるようだ。

さつき下の階で天井が落っこちてきたわけだから、この二階の階段前、廊下とつながっている部分は、見るも無残な状態になっているはず。

そう思っていたのだけど、意外と床はしっかり残っているように見えた。

とはいえ、いつ崩れるかわかったものじゃない。

わたしたちは、一步一步、床の存在を確かめるように踏みしめながら、影を追う。

まるでわたしたちをいざなうかのように、こちらの歩みに合わせて移動するその影は、少しずつ廊下の先へと進んでいった。

やがて。

影はわたしたち四人の視線をその身に受けながら、

すー……っと、

消えた。

いや、そこはちょうど、理科室のドアの前だった。

ということは、理科室に入ったということだろう。

でも。

わたしたちは思わず、足を止めていた。

「い……今、ドアをすり抜けたよね……？」

暗くはつきりと確認できたわけではないけど、わたしにはそう見えたのだ。

声を落としてつぶやくわたしに、誰も同意の言葉を添えてはくれなかった。

「……行きましようです」

蚕ちゃんが、小さいながらも力強い声音で促す。

わたしたちはただ黙って頷き合つと、再びゆっくりと歩き出した。

なるべく音を立てないようにドアを開け、わたしたちは理科室の中へと身を滑り込ませる。

理科室の中は、ひっそりと静まり返っていた。

窓からの薄明かりで、ぼんやりとはあるけど、室内の様子は確認できた。

わたしたちより先に入ってきたはずの人影らしきものは、どこにも見当たらない。

ただ、理科室には準備室が併設されていた。

そっちのほうに身を潜ませているという可能性はある。

と、足を踏み出せずにためらっていたわたしたちを先導するかのように、蚕ちゃんが一步一步、その準備室のほうへと歩みを進めていった。

慌ててわたしたちも彼女に続く。

ひととき小さな蚕ちゃんの後ろに、まるで身を隠すように一列に並んで続いていくわたしたちの姿は、はたから見たらとても情けない様子だったに違いない。

もちろん誰も見ている人なんていないはずだ。

だけど、なぜだか視線のようなものを感じるように思えた。

その感覚は、正しかった。

正確に言えば、視線と呼んでいいものか、判断に困る部分ではあるのだけど。

ガチャリ。

忍ぶ気なんて微塵も感じられないほど、しっかりと大きな音を立てて、理科準備室のドアが開いた。

ドアからぬらりと出てきた姿を見たわたしは、言葉を失った。

そして次の瞬間、

「ふぎちゃ~~~~~!!」

まるで小学生だった当時にタイムスリップしたかのような叫び声が、口をついて飛び出していた。

当時のわたしはいつもいつも、主に美子ちゃんのいたずらによって、そんな叫び声を上げていたのだ。

懐かしい。

などと悠長に過去を偲しのんでいるような余裕なんて、もちろんあるはずがなかった。

ドアから出てきたそれは、内臓をぶちまけた男の人……のように見える。

つまりそれは、人体模型。

リアル志向で作られたその人体模型が歩くたびに、中の内臓が揺れている。今にもこぼれ落ちてしまいそうだ。

そう、その人体模型はしっかりと自分の足を動かし、わたしたちのほうへと歩いて迫ってきていたのだ！

人体模型の後ろからは、もうひとり、というかもう一体というか……。

ガイコツ……すなわち人体の骨格標本までもが、こちらもカチャカチャと音を立てながら、自らの足で歩いてくるではないか！

カタカタカタ。

鳴り響く軽めの音は、彼（？）の笑い声なのだろうか？

わたしは半狂乱になりながら人体模型から目を逸らし、美子ちゃんにすがりついて震える。

そんなわたしを、そっと抱きとめてくれる美子ちゃんではあったけど。

わたしが今一番望んでいる、落ち着かせてくれるような言葉は、かけられることがなかった。

しがみついているわたしは感じていた。わたしと同じように、美子ちゃんの体も小刻みに震えていることを。

そうすると、これは小学校のときのように美子ちゃんがわたしを

怖がらせるために仕組んだはずら、というわけではないのだ。

「お……落ち着けよ、お前ら！ こ……こんなの、ありえるわけないじゃないかよ！」

叫ぶように言う来武士くん自身が、一番落ち着いていないように思えた。

どうすればいいのかわからず呆然と立ち尽くすわたしたち。逃げるという選択肢すら、頭に浮かんでくることはなかった。ただただ立ち尽くすのみ。

人体模型と骨格標本は、そんなわたしたちのすぐ目の前で、止まった。

と。

彼ら(?)は、踊り出した。

なんとなく楽しそうな、そんな雰囲気です。

さらに奇妙なことが、わたしたちの周り三百六十度、全方向を包囲するかのようになり始めた。

彼らの踊りに合わせて、戸棚の中や机の上に置かれていたフラスコやらビーカーやら試験管やら天秤やら分銅やら顕微鏡やらプレパラートやらエタノールランプやら……理科室に存在しているあらゆるものが、その身を揺らしたり飛び上がったたり各々が軽くぶつかり合ったりしながら、様々な音を奏で始めたのだ！

「な……なんだこりゃ!？」

困惑しきつたような来武士くんの声が響く。

来武士くんじゃなかったとしても、声を出すことができたなら、誰でも同じような言葉を発しただろう。

言葉にできる精神力を持っている分だけ、来武士くんはまだ強かったと言えるのかもしれない。

わたしは声も出せずに、ただ震えるだけの小鳥でしかなかったのだから。

「どうすればいいのかしら……」

美子ちゃんですら、判断できずにいるようだ。

こんな状況だというのに落ち着いた声色を保っているのは、さすがだと思っただけ。

そのとき、突然、力強い声が響く。

「踊りましょう!」

声の主は、蚕ちゃんだった。

でも、なぜ踊るの!？

疑問が浮かんだけど、どういっわけか口に出せない。

「わたぬきくんと白田さんも一緒に!」

蚕ちゃんは続けてそう言った。

っていつか、わたぬきくんと白田さんって、誰〜!?

心の中で叫ぶわたしではあったけど、意思に反して場の流れに従う。

わたしたちは手をつなぎ、輪になって踊り始めた。

わたしの右手は美子ちゃんの左手を握っているけど。

左手のほうは、その……、人体模型の右手を、握っていた。

そう、輪の中には、人体模型と骨格標本も混じっていたのだ。

……ということは、わたぬきくんと白田さんって、このふたり!?

そういえば小学校のとき、七不思議とかの怪談が流行っていたけど、そんな話の中に、人体模型のわたぬきくんと骨格標本の白田さん、というのもあったっけ。

……それにしても、どうしてわたぬきくん? どうして白田さん?

人体模型の中に詰め込まれている内臓、つまりハラワタが取り外しも可能だから、ワタ抜きくん?

骨格標本は、そのままって感じもするけど、骨で白いから白田さん? さんづけってことは、女性なのだろうか……?

それはともかく、ほのかに汗ばんでいるようにも感じられる、リアルな人体模型の右手を、わたしは今ぎゅっと握っているわけで。

うきや~~~~、気持ち悪い~~~~!

それが、率直な感想だった。

でも、どういうわけか。

みんなと輪になって踊っていると、とっても楽しい気分になってくる。

相変わらず周りではフラスコなどが音を鳴らしてリズムを刻んでいた。

そのリズムに合わせて、暗い理科室の中で楽しく踊り跳ねるわたしたち四人と、人体模型と、骨格標本……。

はたから見たら、ものすごい絵面な気がする。

だけど、一種のトランス状態になっていたのか、わたしたちは一心不乱に踊り続けた。

どれくらいの間、踊り続けていたのだろう。

疲れなんてまったく感じなかったけど、途中からすでに記憶が途切れてしまったような、そんな感覚。

ふと気づいたときには、辺りは静寂に包まれていた。

フラスコとかピーカーとかも、もとあった位置にただ置かれているだけ。あれだけ激しく音を立てて動いていた痕跡なんて、まるで見当たらない。

人体模型と骨格標本も、わたしと手をつないだりなんてこともなく、ただわたしたちの目の前に二体並んでたたずむのみだった。

「な……なんだったの……？」

「さあ……？ 踊ってた、ような記憶があるけど……。わたぬきくと白田さんも一緒に……」

わたしの声を受けて、美子ちゃんも言葉を漏らす。

さすがの彼女も、状況を理解できていないようだった。

「夢……ってわけでもないよな？ みんな揃って同じ夢を見たなん

て、ありえないだろうし……」

来武士くんも、そうつぶやいている。

どうやらみんな、同じように踊っていた記憶はあるようだ。

とはいえ、わたしたちにはそれ以上どんな答えも導き出すことはできなかった。

「あ……あれ！」

不意に蚕ちゃんがドアのほうを指差す。

そこには、さつき階段で見た、人影のようなものが立っていた。

影はさつきと同様、すぐにすーっと滑るよう移動し始め、ドアをすり抜けていった。

今度は完全にすり抜けていくのを目撃したわけだけど。

それ以上に不可思議なことを経験した直後だったからなのか、わたしたちはまったく気にも留めなかった。

「追いかけましょうです！」

さっきの踊りのことに関して釈然としない気持ちは残っていたけど、呆然としたままここにいたってどうにもならない。

蚕ちゃんの声に頷くと、わたしたちは影を追いかけて歩き出した。

窓から薄明かりが差し込んできているとはいえ、足もとも覚束ないのは今も変わらない。

わたしたち四人は手をつなぎ直し、身を寄せ合いながら理科室をあとにした。

影はまたしてもわたしたちをいざなうように階段へと向かい、そ

して三階へと上りきったところでさらに曲がる。

わたしたちが追いかけていくと、それに合わせて一定の距離を保ちながら逃げていく影。

そして廊下を少し進んでいった先にあるドアの前で止まる。

そこは、音楽室だった。

すると案の定、今度は音楽室のドアをすり抜け、影は中へと入っていった。

音楽室の中も、やっぱり薄暗かった。

そしてその薄暗い音楽室の隅には、大きなピアノが置かれていた。廃校となっているためかなり薄汚れてはいるものの、それは立派なグランドピアノだった。

壁を厚くして防音効果を持たせているみたいだったけど、床は校舎内の他の場所と変わらないと思われる。

年季の入った木造校舎のこの学校。床が抜けてしまわないか心配なところだ。

「やっぱり、さっきの人影、見当たらないわね」

美子ちゃんが落ち着いた声を響かせる。

なんとなくエコーがかかったように聞こえるのは、ここが音楽室だからだろうか。

実際、音が反響するような構造になっているということなのかな。田舎町の小さな小学校で、しかも木造だというのに、なかなかこだわりを持った設計だったと言えるのかもしれない。

それはともかく、美子ちゃんの言葉を受けて、わたしは人影が見当たらないという現状に目を向けてみた。

「ここも確か、準備室があったよね？ そっちに隠れたんじゃない？」

「いや、確かに隣が準備室だけど、入り口のドアは廊下側についてたはずだよ。防音設備とかの関係なのかな」

わたしの問いに、来武士くんが答えてくれた。

そういえば、微かにそんな記憶がある。もう小学校を卒業して五年目になるから、あまりよく覚えてはいなかったけど。

だけど、音楽室といえば鮮明に覚えていることもある。

美子ちゃんが仕込んだケータイから流れた音楽によって、わたしはピアノがひとりでに鳴っていると勘違いし、怖い思いをしたことだ。

あのときは、海路くんがすぐに美子ちゃんのケータイを見つけて、いたずらだというのを見破ってくれたんだっけ。

そんなことを考えて、わたしはふと懐かしさに浸っていた。

今ここに海路くんはいない。

でも、天井の崩落で無事だった海路くんは、瓦礫の向こう側にいた他のメンバー　保黒さんたちと一緒に行動しているはずだ。

別の道を探して合流しようとしているはずだけど、一向に合流できていないことに、ほのかな不安を覚える。

海路くんたち、大丈夫かな……。

そう心配する気持ちが湧き上がってきた、ちょうどそのとき。

ポロン、ポロン……。

「ひっ!？」

わたしは思わず息を呑む。

他の三人も驚きで身をすくませ、その音の発生源をじっと見つめていた。

音の発生源、それは、ピアノだった。

とはいえ、そのピアノの鍵盤部分のフタは、閉じられたままだ。もちろんピアノの前の椅子には、誰も座ってなどいない。

仮に座っていたとしても、鍵盤が閉じられたままピアノを弾くなんてことが、できるはずもないのだけだ。

音は、最初は途切れ途切れに一音ずつ鳴らされていたのだけど、その間隔はすぐに短くなり、一瞬の間を置いたかと思うと、滑らかな旋律を奏で始めた。

おそらく、クラシックのなにかの曲。

知識のないわたしには、曲名までは全然わからない。

ただ、聞き覚えのある曲ではあった。

それはあるとき、小学生だった頃に美子ちゃんがいたずらでケータイから鳴らした曲と、同じだったのだ。

「美子ちゃん、もしかしてまた、ピアノの下に……」

小学校の頃のいたずらでは、美子ちゃんがピアノの下にケータイをセロハンテープで貼りつけて、アラームの機能を使って音楽を流した。

だから、もしかしたら今回もそういういたずらなのではないか。そう考えたのだ。

だけど、わたしがそのことについて言及し終える前に、美子ちゃんがかぶりを振る。

その彼女の手には、いつも使っているケータイが握られていた。

ピアノの旋律は、どんどんと音量を上げているようにも感じられた。

その音は、脳に直接響いてきているかのような、奇妙な感覚を受ける。

やがてそれに、別の音加わる。

合唱。

歌声が、響き始めた。

それは、わたしでも美子ちゃんでも蚕ちゃんでも来武士くんでもない声だった。

まだ合流していないグループ、保黒さん、二之腕さん、頬さん、土布先くん、海路くんの声でもない。

低めの男性の声が多いように感じられる合唱。

その声は、音楽室の壁一面に飾られた、バツハやらハイドンやらモーツアルトやらベートーベンやらシューベルトやらブラームスやらビゼーやらチャイコフスキーやらドボルザークやら滝廉太郎やらといった、音楽家たちの肖像画から聞こえていたのだ！

歌声に合わせるかのように、肖像画も揺れる。

それに伴い、ガサガサと、歌声以外の音も響いていた。肖像画と壁がこすれ合う音なのだろう。

薄汚れた肖像画や壁からは、揺れによってホコリが舞い落ちる。それがあたかも雪が降りしきるような雰囲気をかもし出していた。

「……わらちたちも、一緒に歌いましょうです！」

蚕ちゃんが言う。

「そうね。もっちゃんやベンちゃん、れんちゃんたちと一緒に歌える機会なんて、そうそうないでしょうしね」

美子ちゃんが同意の声を添える。

有名な音楽家たちを「ちゃん」「づけで呼ぶなんて、さすがは美子ちゃんと言えるのかもしれない。

それにしても、こんな状況でも冷静にそう言っただけのける彼女は、やっぱりすごいわ。

さっきの理科室でのことで、すでに慣れてきているのかもしれない。

わたしなんて、怖くて泣き叫ぶ寸前だったというのに。

ともかくわたしたちは、蚕ちゃんに促されるまま、歌い始めた。

歌詞のないクラシック音楽だから、「ラララ」でメロディーに合わせて声を乗せるだけではあったけど。

声が重なり、反響し、絡み合い、綺麗なハーモニーを奏でる。

荘厳な曲調のクラシックの旋律に、わたしの目には自然と涙が溢れ出していた。

ふと見れば、美子ちゃんも蚕ちゃんも、男子である来武士くんまでもが、瞳を潤ませながら歌っている。

そんなわたしたちの様子を、肖像画の音楽家たちは、満足そうな笑顔を浮かべながら見つめてくれているように思えた。

ガタン！

不意に物音が響く。

はっと我に返って見渡すと、そこは真っ暗で静寂に包まれた音楽室だった。

ピアノの音も、鳴っていない。

もちろん肖像画だって動いたり、ましてや歌ったりなんてせず、整然と壁に並んでいた。

動いた形跡すらも見当たらない。

これは……さっきの科学室での出来事と同じだ。

いったい、どうなっているというのだろうか？

と、不意に蚕ちゃんがドアのほうを指差して声を上げる。

「あ……あれ！」

彼女が指差す先には、やっぱり科学室のときと同様、人影のようなものが立っていた。

影はすーっと滑るよう移動を開始すると、ドアをすり抜けて出ていった。

「追いかけてみましょう！」

さっきとまったく同じ言葉を繰り返す蚕ちゃんの声に耳にした途端、不思議と湧き起こっていた疑問は鳴りを潜めてしまう。

わたしたちは彼女の言葉に従って、やはりさっきと同様、手をうなぎ身を寄せ合いながら、薄暗い廊下へと出るのだった。

人影のようなものは、やはりまた階段のほうへと向かう。それを慎重に追っていくわたしたち。

廊下を進み、階段のそばで一旦止まった影は、進行方向を九十度曲げると、そのまま階段を上っていった。

今わたしたちのいる場所は、第二特別棟の三階。

三階建てなのだから、その上に階はない。つまり、階段の先は屋上ということになる。

慎重に階段を上って踊り場で体を反転させると、わたしたちより先に移動していった人影らしきものが、すーっと屋上へと出るドアをすり抜けていくのが見えた。

わたしたちは黙って頷き合つと、微かにペースを速めて残り半階分の階段を上り、ドアの前で足を止めた。

「……完全に、すり抜けてたよね……」

「ええ。さっきまでと同じね。でも、ここまで来て、引き下がるわけにはいかないわ」

わたしのおどおどした声に、引き返そうよ、という含みを感じたのだろう。美子ちゃんが言葉で退路を塞ぐ。

「カギ、かかってないかな？」

来武士くんがそう言いながら、ドアノブに手を伸ばす。

それを見たわたしは、開かないでと、思わず祈っていた。

カチヤ。

軽い音を立て、ドアノブは回る。回ったということは、イコール、カギがかかっていないということ。

このドアの先は、屋上だ。

ドアには曇りガラスがはめ込まれていて、そこから薄明かりが漏れている。

廊下の窓からも薄明かりは漏れていたけど、それよりも明るくなっているように感じる。

雨は上がったようだし、晴れ間も出ているのかもしれない。

星明りや月明かりが照らすくらいのも明るさはあるそうだった。

そして、おそらく、ここが……。

わたしはずっと考えていた。

海路くんが用意した宝探しゲームの終着点は、ここ、すなわち屋上なのではないか、ということ。

その考えが正しいのであれば、わたしたちが見た人影のようなもの、あれは海路くんだというのが、一番納得できる解答だ。

ただし、理由だけを考えるのなら、ということになるけど。

実際には、薄暗がりではっきりと目にしたわけではないものの、何度もドアをすり抜けているのだから、あれが海路くんというのも無理があるだろう。

とはいえ、考えていたって仕方がない。

ここは行動あるのみだ。

その意思を後押しするかのよう、蚕ちゃんが号令のように声を発する。

「行きましようです！」

彼女の声に力強く頷くと、来武士くんは一気にドアを押し開けた。

屋上に出たわたしたちを出迎えてくれたもの、それは一面に広がる菜園や花壇の跡だった。

小学校の頃、みんなで植物や作物を育てていた。

この学校の方針で、すべてのクラスに屋上の区画を割り当て、そこに菜園や花壇を作ることになっていたからだ。

持ち回りで植物の世話をした、懐かしいこの場所。

今では朽ち果て、枯れた植物が横たわるのみだった。

「懐かしいね」

わたしはそうつぶやく。でも、誰からも返事はない。

それを疑問に思ったわたしは、ふと違和感を覚え、辺りを見渡した。

朽ちた菜園や花壇。その光景が広がるだけの屋上。だけど、なにかがおかしい。

と、わたしはようやく気づいた。

その上空に、おかしいと感じた原因があったのだ。

屋上からは、普通なら学校の周りの景色を一望できるはずだ。

でも、いくら宵闇に包まれているとはいえ、今この屋上からは、周りの景色がまったく見えなかった。

屋上のへりから見える景色は、一面の暗黒世界。

黒い中にも、なにやらうごめいているように感じるのは、暗さからくる恐怖感による錯覚なのだろうか。

屋上の様子が見えるというのも、月明かりや星明かりがあるからではなかった。

ただただ、見えるのだ。

明かりによって照らし出されるといっても、この屋上そのものが微かな光を放っているかのよう。

漆黒の闇の中でありながら、屋上の風景はしっかりと目に映り込む。

不思議な感覚に包まれたわたしたちは、呆然と立ち尽くしていた。ドアをすり抜けて屋上に出たはずの人影も、どこにも見当たらない。

そのとき。

呆然としているわたしたちに向かって、空気を切り裂くかのように、目にも留まらぬスピードで迫りくる物体があった。

それも、無数に。

わたしたちは、身構える間すら与えられず、突如として現れた脅威にさらされることとなった。

「きゃあっ!?!」

悲鳴を上げるわたし。

目の前には、細長いなにかが迫る。

それは、わたしたちの行く手を遮るかのように伸び、幾重にも広がっていく。

「どうやらこれは、植物のツルみたいね」

冷静な声を上げながらも、わたしとつないだままになっていた美子ちゃんの手は、汗でじつとりと濡れていた。

「ロリちゃん!?!」

困惑を浮かべて名前を呼ぶ来武士くんの声が響く。
わたしたちの目の前には、力強く一步前に踏み出す蚕ちゃんの姿があった。

「……わらちに、任せてくださいです!」

言うが早いか、彼女は両手をすつと振り上げると……。
やっぱりというか、予想どおりというか。

家庭科室や科学室のときと同じように、滑らかな動作で踊り出した!

「ほら、笑歌! あんたも一緒に踊らなきゃ! コンビでしょ!?!」

美子ちゃんが叫ぶ。

「はう、違つて〜!」

わたしは戸惑ったまま反論を返す。

でも、わたしでどうにかできるのなら、するべきなのかもしれない。

そんな思いも浮かぶ。

とはいえ、こんな状況で一緒に踊るなんて、できるはずもなかった。

植物のツルは、わたしたちの周りを取り囲み、その包囲網を徐々に狭め、目と鼻の先にまで迫っていたのだから。

蚕ちゃんだけならともかく、わたしまで一緒に踊るスペースなんてなかったのだ。

美子ちゃんとしても、本気で言ったわけではないのだろう。

わたしが怯えてガタガタ震えているのを握った手のひらから感じ、元気づけるために、そんなからかいの言葉を向けた。

それによって、怯えの念は一瞬で消え、わたしの思考は別の方向へと変わった。

さすが美子ちゃんだ。わたしの扱い方を、よく熟知している。

ともかくここは、蚕ちゃんに任せよう。

そう思った矢先のことだった。

ドタン!

ど派手な音を立てて滑って転んだ蚕ちゃんは、お尻を強打していた。

「痛たたたた……。はみゆくん……。ドジっちゃったですく……」

雨で床がぬかるんでいたからだろうか、それとも踊るにはスペースが狭すぎたからだろうか、ツルリと足を滑らせてしまったようだ。そんな状況を察知して、迫りくる植物たちが動きを止める、なんてことがあるはずもない。

ツルは互いに絡み合い、さながら壁のようにわたしたちの周り三百六十度すべてを囲う。

不意にその壁から、数本のツルが触手のように伸びてきた。

「きゃっ！」

「危ない！」

まっすぐ美子ちゃんに向かっていた一本のツル。

とっさのことで身動きの取れなかった彼女の前に自らの身を投じて庇ったのは、ヒーローのように素早く飛び出した来武士くんだった。

彼はツルに打ちつけられた衝撃のせいなのか、美子ちゃんの前で片膝をついていた。

「だ……。大丈夫、か……？」

「来武士くん……。ありがとう……。でも、そっちこそ、……。大丈夫？」

苦しそうな表情を浮かべながらも、美子ちゃんを気遣う来武士くん。

美子ちゃんは困惑していたけど、来武士くんに心配の声をかけていた。

「……おいらは、大丈夫……、痛っ！」

強がるうとしたのだろう来武士くんは、痛みで顔を歪め、うめき声をこぼす。

美子ちゃんがすぐに屈んで来武士くんの肩に手をかけた。

「ほら、無理しないで。本当に大丈夫？ 肩、貸そうか？」

「大丈夫だよ……」

いつもわたしに向けられている美子ちゃんの優しさ。それが違う人に向けられているからか、なんとなく、ふたりの雰囲気嫉妬のような感情が浮かんでしまう。

と、そんなことを考えてぼーっとしてしまったからなのだろう。

わたしはさらに別の方向から迫っていた植物のツルにまったく気づかなかった。

次の瞬間には、わたしの体は何本かのツルによって、がっしりと絡め取られてしまっていた。

わたしは必死に身をよじる。

だけど、どんなに力を込めて抜け出そうとしても、身動きが取れなかった。

このまま、潰されてしまうのかな？

この期に及んで、他人事のようなボケた感想を抱いていたわたし。美子ちゃんは来武士くんにつき添っているし、蚕ちゃんは転んで倒れたまま。

わたしはもう、ダメかも。

そう思った、その瞬間。

助けは天からやってきた。

正確には、上から、だけど。

三百六十度、周りを覆っていた植物の壁。そう、それはまさしく壁だった。

つまり、上空には植物の壁（というか天井）はなかったのだ。

見上げる余裕があったならば、真っ暗な空が目映っていただろう。

その壁の上の空間から、それらは身を伸ばし、植物の壁の内側に絡みつく。

それはさながら、迫りくる壁を押さえつける腕のように、植物の動きを封じた。

「これって……」

わたしは驚きの声を上げる。

わたしたちを守るように飛び込んできたそれらは

ヒマワリだった！

しかも、わたしはなんとなく感じていた。

このヒマワリは、わたしたちが小学生だった当時、花壇で育てていたあのヒマワリたちなのではないかということ。

「江窪さん！」

不意にすぐ目の前で声が響く。

「海路くん！」

彼は、いつの間にかわたしのそばにいた。植物のツルで形成された壁の内側にいて、数本のツルに巻きつかれてしまっているわたしのそばに。

どうやって、ここに？

そんな疑問を浮かべるよりも早く、海路くんは、ツルに巻きつかれて身動きのできないわたしに優しい声を向ける。

周囲は目を疑うような、そして信じられないような、不可思議で緊迫した状況だ。

そんな中に身を置きながらも、頬を撫でて吹き過ぎる初夏のそよ風のように温かい響きを持った彼の声を、わたしは夢見心地になりながら聞いていた。

「大丈夫だよ。ほら、怖くなんかない」

ツルのあいだから出ていたわたしの手を握ると、幼な子を諭すような瞳を向ける海路くん。

「嬉しくってちょっとやりすぎたけど、みんな、歓迎してるだけなんだ」

海路くんの声に、はっと目を覚ましたような感じになる。

わたしに絡みつく植物のツル。それは、優しくわたしを抱きしめているような、もしくは子犬がじゃれつくような、そんな温かさで溢れていた。

「ぼくの言つとおりでしょ？ だから、怖がらないで、笑って。ね？」

優しい笑顔を向ける海路くんの言葉に促されるように、わたしも自然と微笑んでいた。

もう植物のツルは、わたしたちに敵意をむき出しているなんて、微塵も感じられなくなっていた。

最初から、危険なんてなかったってこと？

それは心に思い浮かべただけだったけど、海路くんは黙って頷きを返してくれた。

でも、少し疑問が浮かんで、わたしは思わず口にしていた。

「さっき来武士くんは、ツルに攻撃されてたよね？ わたしには来武士くんがツルに打ちつけられて、それで倒れ込んだように見えただけど……」

その問いに答えたのは、当の本人である来武士くんだった。

「あっ、おいらはとっさに飛び出したから、足がつつただけだよ」

目の前に屈み込んで心配していた美子ちゃんが一瞬驚きと怒りが入り混じったような表情になっていたけど、すぐにそれは深いため息へと変わっていった。

と、突然。

和やかな雰囲気にも包まれつつあったわたしたちに、様々な色の光と激しい轟音が矢継ぎ早に襲いかかってきた。

わたしたちはその音と光の発生源へと、一斉に視線を向ける。
そこに繰り広げられていた光景、それは。

うふふ、わたくしからのささやかなサプライズは、楽しんでいただけみたいですね。

……あら、このあとはまた、別のサプライズが待っているんですね。

あの子、最初からこのタイミングに合わせて、ここまで誘導していたということかしら。

さすがですね。純粋な想いの成せる業、ってわけですね。

ふふ、せっかくだから、最後まで見届けることにいたしましょうか。

わたくしにとっても、最後の夏となるのですから。

ドーン！ ドーン！

わたしたちに襲いかかってきた光と音。

それは、花火だった。

綺麗なたくさん色彩が夜空を染め、それに合わせて、遙か彼方まで響き渡るような爆裂音が、心をも揺らす重低音を奏でる。

見渡す限り闇の空間が広がっていたはずの空は、一片の雲もない星空へと変貌を遂げていた。

そのこぼれ落ちんばかりの星屑たちを従えるかのように、丸く弾ける花火の色彩が、次から次へと押し寄せて花開く。

そつだ。

今夜は近所の河原で花火大会が行われる日だったのだ。

八月半ばにある町を挙げての大花火大会と比べると規模が小さいため、ついつい忘れてしまいがちだけど、毎年七月の終わりにもこうして花火大会が開かれていた。

商店街の主催で宣伝もそれほど多くないせいか、毎年、花火の音が鳴っているのを聞いて初めて気づくという感じなのだけだ。

小学校の頃にも、こうして屋上で見たことがあった。

「みんな、大丈夫！？ すごい音がしたけど、爆発かなにか！？」

突然、保黒さんが血相を変えてドアから屋上へと飛び出してきた。

その背後には、二之腕さん、頼さん、土布先くんの三人の姿もある。

保黒さんたちは、屋上を見渡して驚きの表情を浮かべていた。

それはそうだろう。

なにやら植物が壁のように絡み合い、ヒマワリがぐにゃぐにゃと不規則な軌跡を描きながらわたしたちを取り巻いているのだから。

とはいえ、すでにわたしはツルから解放されているし、取り囲んでいた植物の壁もその包囲網を緩めている。

保黒さんたちが出てきたドアや菜園、花壇なども、わたしたちの目から確認できるようになっていた。

そしてわたしたちには、笑顔すら浮かんでいる。

だから今この場に出てきたばかりの保黒さんたちにも、わたしたちが無事だということだけは理解できたのだろう。

まだ困惑気味ではあったものの、安堵の表情へと変わっていく彼女たち。

「海路くんも、無事だったんだね。よかった……」

保黒さんは、そうつぶやいた。

え？ 海路くんは、保黒さんたちと一緒にだったんじゃないの？

階段の手前で瓦礫の崩落によってふた手に分断されたわたしたち。

そのとき、わたしと同じ側にいたのは、美子ちゃん、蚕ちゃん、来武士くんの三人だけだった。

声をかけ合い、みんな無事かどうかの確認したはず。

だから、残りのメンバー、すなわち、保黒さん、二之腕さん、頼さん、土布先くん、そして海路くんは、瓦礫の山の向こう側に、一緒にいるものだと思います。

だけど、違っていたというのだろうか？

あのとき、瓦礫が落ちたてきのは、第二特別棟の階段前にある天井だった。

そして、わたしたち四人は、階段側にいた。

階段の前の空間は、階段側も含めれば十字路ということになる。とすると、最大四ヶ所に分断される可能性はある。

でも、分断されたときに聞こえた声は、全員同じほうから向けられたように感じた。

だからこそわたしは、残りのメンバーがみんな一緒だと思ったのだ。

それなのに、実際には海路くんだけ、別の場所にいたというのだろうか？

ただ、海路くんは保黒さんたちと一緒に行動していたけど、途中でひとり、はぐれてしまったということも考えられるかもしれない。

歩み寄ってくる保黒さんたちの様子を見守りながら、わたしはそんなふうな考えを巡らせていた。

ドーン！ ドーン！

新たな客人を祝福するかのようになり、光と音のコラボレーションが再び夜空を彩り始める。

この七月の花火大会では、人手が少ないといった理由からなのか、それとも単純に花火の玉の数の問題なのか、数発打ち上げられると若干の間を置いてから次が打ち上げられるようになっていた。

派手さもない、少々地味めな花火大会ではあるものの、その独特

の間が、涼しい夜風と相まって余計に鬱陶気を盛り上げる。
そんなところも、小規模ながら、中止されることなく長年続けられて
いる理由のひとつなのかもしれない。

花火を見上げ、保黒さんたちが感嘆の吐息を漏らす。

「そういえば、今日は花火大会の日でしたね。……懐かしいですわ」

類さんは両手を胸の前で組み合わせながら、上空で繰り広げられる
光と音のハーモニーに酔いしれていた。

あとから屋上に出てきたメンバーだけでなく、あらかじめ屋上に
いた美子ちゃんたちも、同じように花火を見上げて物思いにふけっ
ている。

疑問はいくつも浮かんだ。

だけど、どうせ質問しても花火の音でかき消されてしまうだろう
し、それよりも今はこの光と音の芸術とも呼べる幻想的な時間を大
切にしたい。

そう思ったわたしは、保黒さんたちに質問攻めを開始したりなん
ていう無粋なことはせず、ただただ夜空を眺めていた。

わたしのすぐ横には海路くんが寄り添うかのようにたたずみ、穏
やかな表情で一緒に花火を見上げている。

こうしてわたしたちは、夏の風物詩である一大イベントを心ゆく
まで堪能し、その光景を思い出のページとして刻みつけるのだっ
た。

商店会主催の花火大会は、毎年七月の最終土曜日に開かれる。

七年前の今日、タイムカプセルを埋めた小学校四年生だったわたしたち。だけど、その日は土曜日ではなかった。

それよりも数日前、土曜日の夜にわたしたちはこの屋上へ来ていた。

夏休み中、みんなが集まって花火を見よう。

クラスでそう提案して、見晴らしのいいこの屋上の使用許可を得た。

わたしや美子ちゃんたちだけでなく、同じクラスのみんなが、この屋上で空を見上げていた。

小学生だけで夜の学校に集まるなんて、許されるわけもない。当然ながら、担任の先生も一緒だった。

屋上には、クラスごとに与えられた区画があり、そこには菜園や花壇などがあった。

わたしたちのクラスの区画は、さらに四つに区切られ、それぞれの世話を担当する班が決まっていた。

ひとつの班は七〜八人で、いわゆる「好きな者同士」で分かれた。そしてわたしの加わっていた班のメンバーが、今回のタイムカプセル掘りで集まった面々なのだ。

七年前の花火のときには、それぞれの班ごとにまとまり、自分たちの担当区画の前に集まって、星空を彩る光と音のイルミネーションを楽しんでいた。

そのときも、今と同じように、わたしの隣には海路くんが寄り添

うように並んで立っていた。

普段、真夏でも長袖の服しか着ない海路くんは、その日もやっぱり長袖だった。

でも、夜になっても生暖かい空気が辺りを包んでいたからだろうか、彼は珍しく袖まくりをしていた。

夜だから、日に焼ける心配はない。そういう心理からだったのかもしれない。

花火の光に照らされ、海路くんの右手首に可愛らしい花柄のリストバンドが巻かれていることに、わたしは気づいた。

「あつ、それ、可愛いね」

他の人の邪魔にならないよう、海路くんの耳もとに口を寄せる感じで、わたしはささやいた。

それ、というのがリストバンドのことを指していると、わたしの視線からすぐにわかったのだろう。

「これ？ あはは、ありがとう。といっても、お姉ちゃんからもらったお古なんだけどね。……そうだ、もしよかったら、これ、あげるよ」

海路くんはそう言いながらリストバンドを外し、わたしが遠慮の声を上げようとする間もなく腕をそっと取ると、わたしの手首にそのリストバンドを通してくれた。

微かに残る海路くんの温もりを感じて、心の中も温かくなったよ
うな、そんな気がした。

「あ……ありがとう……。でも、ほんとにいいの？」

いとおしそうにリストバンドを撫でながら、わたしはお礼の言葉を返す。

「うん。気に入ってくれたみたいだし、もらってくれたら嬉しいな」

花火のように明るい笑顔を咲かせる海路くんからそう言われたら、遠慮してやっぱりもらえないよと返してしまう、なんてことができるはずもなかった。

こうしてわたしは素直に、海路くんからの初めてのプレゼントをもらったのだ。

そんなことがありつつ、花火の音に祝福されたわたしたち仲よしグループは、七年前もこの屋上に並んで花火大会の終わる時間まで、夜空を見上げ続けた。

わたし、海路くん、美子ちゃん、来武士くん、土布先くん、保黒さん、二之腕さん、頬さん……。

あれ？

誰か、足りないような……？

わたしはふと、まだ少し雨にぬかるんだままの屋上の床に、スカートが汚れるのも気にせずべったりと体育座りしながら、花火を眺めている蚕ちゃんに目を向けた。

そうだ……蚕ちゃんはそのとき、いなかった……。

あのときは、クラス全員で集まったはずだ。

もちろん夏休み中だから、用事のある人は来ていなかったかもし

れないけど、だけどなんとなく、そうではないと確信できた。
そうだ、蚕ちゃんは、いなかつた。

そう思い至ったわたしの耳に、来武士くんの声が響いてきた。

「あ……あれ、もしかして、タイムカプセルじゃないか？」

彼が指差す先、わたしたちが世話をしていた花壇のヒマワリたちの根もと。

その周辺の土が少し盛り上がり、くすんだ鈍い色を放つブリキ缶の一部が顔を出していた。

みんな、そこへ駆け寄り、屈み込む。

そして土を優しく払い、ブリキ缶を掘り起こした。

「やっぱり、タイムカプセルだ！」

来武士くんの声に、全員が頷く。

ブリキ缶のフタには、油性ペンで書いたと思われる、「たいむかぶせる」という下手くそな文字がはつきりと見て取れたからだ。

……どうして、ひらがなで書いたんだか。それにすごく下手くそだし。

さすがに口には出さなかったけど、そんな失礼な思いが浮かんできた。

と、気にせずに失礼な考えを口にした人がいた。

それはもちろん、美子ちゃんだ。

「やっぱり汚い字だわ。笑歌に書かせたのは間違いだったかもね」

……あうあう、この字を書いたの、わたしだったのかつ！

そんなわたしたちを見渡しながら、海路くんはこう宣言する。

「おめでとう、みんな。宝探しゲーム、見事クリアだね！」

月明かりに照らし出された彼の頬は、なぜかほんのり赤く染まっ
ているように見えた。

「あつ、それ、ウチのぬいぐるみ」

頑丈に密封してあったブリキ缶のフタを開け、中に入れられた各自の宝物との、七年ぶりの顔合わせが始まっていた。

タイムカプセルを埋めた七年前、「みんなの木」の根もとで、わたしたちはブリキ缶を用意してくれた海路くんに宝物を手渡し、中に入れてもらった。

だからなのか、取り出し役も、海路くんが買って出た。

その彼の手のよって最初に取り出されたクマのぬいぐるみは、保黒さんの宝物だったようだ。

「クマのアイゼンハウワー伯爵だよ」

……なぜにアイゼンハウワー、なぜに伯爵。クマなのに。

と思わなくもなかったけど、確か当時ちょっとだけ流行った、そういう名前の商品だったことを、わたしは微かに覚えていた。

でも、流行りものに飛びついていたら、真面目な学級委員といえども、普通の女の子だったんだわ。

いとおしそくにクマのぬいぐるみを抱きしめながら、保黒さんは温かな笑顔を浮かべていた。

「おつ。あたいのも出てきたな」

次に出てきたのは、どうやら二之腕さんの宝物のようだ。

スポーツ万能で、男らしい彼女。

こんなこと口に出して言ったら、笑いながらみぞおちを殴ってく

るかもしれないけど。

ともかくそんな彼女が、どんな宝物を埋めていたのかというところ……。

「『お花畑探偵団』『夢と海の吐息』『ガラスのりんご飴』……つて、マンガ？」

「うむ。あたいが好きだった少女マンガたちだ。懐かしいなあ」

取り出されたそれらのマンガ本は、何度も繰り返し読んでいたのだろう、カバーの端がところどころ破れ、ボロボロの様相を呈していた。

「ゆらりってば、小さい頃から少女マンガが大好きな夢見る女の子だったもんね」

うつとりとした懐古の熱い視線を少女マンガの数々へと向けている二之腕さんに、保黒さんはちょっと呆れも含みつつも優しげな表情で言葉をかける。

「……その夢見る少女が、今はどうしてこうなってしまったんだか」
そして、ぼそつとつぶやく来武士くん。

「なんか言った？」

「い……いや、なにも……！」

二之腕さんに鋭い眼光で睨み返され、慌ててごまかしていた。

「ともかく、次だ次！」

「はいはい。え〜っつと……」

来武士くんに急かされて、海路くんが次に取り出だしたるは……、
ダ……、
ダイヤの指輪！？

「あつ、それはわたくしのですわ」

微笑みを送りつつ、来武士くんの手から指輪を受け取ったのは、
頼さんだった。

「小学校の入学祝いに、おじい様から頂いた指輪です。四年生にな
ったときに新しい指輪を頂いておりましたので、前の指輪は思い出
としてタイムカプセルに仕舞わせてもらったのですわ」

……はあ、そうですか……。
そんな感想しか浮かんでこない。
くそ、いいな。お金持ちって。

次に出てきたのは、プラモデル。来武士くんの宝物だった。

「ちゃんと塗装までしたんだぜ、これ！」

嬉々とした表情でここは苦労したんだ、とか、いろいろと語って
いた。

続いては、土布先くんの宝物。小さなキャンバスに描かれた、リ
ンゴとバナナの油絵だった。

「これ、初めて描いた油絵」

土布先くんはその油絵を受け取ると、懐かしそうに頬を緩めながら眺めていた。

「次は、あたしのね」

そう言っただけの写真を受け取ったのは、美子ちゃんだった。

そこには、肩を抱き合っただけで笑っているわたしと美子ちゃんの姿が映っていた。

「あたしにとつての宝物は、笑歌だから」

「美子ちゃん……」

「一番好きで肌身離さず持っていたこの写真を、タイムカプセルに入れたんだっただわ」

美子ちゃんの言葉に、ちょっと恥ずかしくてむずがゆいような、温かな気持ちに包まれる。

「他にもたくさん笑歌の写真を持ってるわよ。イライラしたときにぬいぐるみに顔写真を貼って頭をバシバシはたくと、結構落ち着くよね。とっても役に立つわ」

……余計なことをつけ加えて、わたしの温かな気持ちをぶち壊してくれちゃったけども。

そのあとに取り出されたのは。

「あ……わたしの」

それは、可愛い花柄リストバンドだった。

ついさっき、花火を眺めていて思い出した、わたしがタイムカプ

セルに入れた宝物。

宝物をタイムカプセルに入れて埋めよう。

そう言われたわたしは、バカ正直に、生まれて初めて男の子からもらった大切なプレゼントを、タイムカプセルに入れたのだ。

もちろん、海路くんの了承は得た。

「このリストバンド、タイムカプセルに入れても、いい？」

と彼に訊くと、笑顔で頷いてくれた。

今だったら、とても大切なプレゼントなんだから、埋めたりなんかせずにと手もとに置いておきたいと思うだろうけど、当時のわたしって（自分で言うのも恥ずかしいけど）純粹だったから。

そんな大切なものをタイムカプセルに入れていたというのに、どうしてわたしはついさっきまで忘れてしまっていたのだろう。

「……懐かしい」

わたしは受け取ったそれを、ぎゅっと握りしめた。

手のひらに広がる七年ぶりの温もりは、わたしの心を小学校四年生の当時に戻してくれるかのように思えた。

「で、これがぼくの宝物」

海路くんが手にしているのは、一通の封筒だった。

彼は封筒を開け、中から便箋を取り出す。

海路くんは、タイムカプセルに手紙を入れておいたのだ。

七年後の自分へ、とかいう内容なのかな？

なんて思っていたのだけど。

すつと、その手紙が差し出された。
わたしの目の前に。

「え？」

困惑しながらも、それを受け取ると、手紙に書かれた文章を、わたしは目で追って読んでみる。

……………。

ぼっ！

思わず一瞬にして真っ赤になったわたしに、周りで見えていたみんなが、どうしたの？ と声をかけてくる。だけど今のわたしには、そんな声もほとんど耳に届かなかった。だって、その手紙には、こう書かれてあったのだから。

『江窪笑歌さん、好きだよ。海路潮騒』

ぼーっと呆けていたわたし。

手紙をのぞき込まれて、他のみんなにもその内容を見られてしまった。

ひゅーひゅーと冷やかす声がこだまする。

そんな中、海路くんは微かに頬を染めながら、いつもの笑顔を絶やさずに語り始めた。

「手紙を見られちゃうのは恥ずかしいから、これを埋めるとき自分で缶を持ってきて、中に入れる役目を買って出たんだ。そして今日、こうして取り出す役目もね」

海路くんは、小学校四年生の当時、わたしに恋心を抱いてくれていたらしい。

頻繁に声をかけたり、ちょっかいを出したり。子供っぽいけど、少しでも自分の存在を認識してほしかったのだという。

そばにいないときでも、ずっと視線を向けていた。だから、美子ちゃんがわたしをからかったりすると、海路くんがいつも慰めてくれたんだ。

でも、直接言う勇氣までは出せなかった海路くんは、美子ちゃんに相談したことがあったそうだ。

そのときの美子ちゃんの答えは、「笑歌は女の子が好きだから、ダメなんじゃない？」というものだった。

……って、美子ちゃんってば、いったいなにを言ってるのよ!？
思わずその当時の彼女にツッコミを入れたくなるけど。

美子ちゃんとしては、冗談のつもりだったのだろう。

だけど、海路くんは真に受けた。それで、可愛い服とか小物とかを身に着けるようになったのだという。

お姉さんに相談したら、とても楽しそうにメイクアップしてくれたのだとか。

どうやら海路くんは、お姉さんにもおもちやにされていたようだ。

「あたしの言葉で海路くんがそういう格好をしてるってことには、もちろん気づいてたわよ。でもま、面白いから放っておいたの」

美子ちゃんは平然とそう言ったのけた。……悪魔だ、この子。でも、美子ちゃんらしいや。

それにしても。

海路くんは、こうして今、わたしにその手紙を渡してくれた。ということは、もしかしてもしかしたら、今でも、その……そう、なの？

湯気が立ち昇らんばかりといった勢いの真っ赤な顔で、わたしは海路くんを見つめる。

彼は、笑顔を返してくれた。

ということは、やっぱり、そういうこと……なんだよね？

わたしは、恥ずかしさと嬉しさと困惑とが入り混じってパニックになりながらも、しっかりと結論づける。

じゃ……じゃあ、ちゃんと、お返事しなきゃ、ダメだよね……？
今ならはつきりと、わたしは自分の気持ちを理解できている。
わたしは、海路くんのが、好き。

ごくりとツバを飲み込み、わたしは返事という言葉を伝えようと、口を開く。

と、

キッ！

突然真顔に戻った海路くんは、睨まれたようにも思える視線を向けられてしまった。

思わずわたしは口をつぐんでしまう。

「これで、全部だよ」

海路くんはブリキ缶のフタを閉めながら、わたしの言葉を遮るかのように、そう告げた。

「……あれ？　ロリちゃんのは？」

保黒さんが怪訝そうな声を上げる。

「あれ？　みんなと一緒に集まって埋めたはずだよな？　今日集まったのは、そのときのメンバーのはずだし」

来武士くんも疑問を口にする。

わたしはまだ海路くんに言葉を止められたことに困惑しながらも、そんなみんなを見渡していた。

蚕ちゃんが数歩前に出て、こちらを振り返る。

そして、深々と頭を下げた。

「みなさん。騙っていて、ごめんなさいです」

蚕ちゃんが、ちょっとおかしいというか、なにか変だということ、わたしは感じていた。

でも実際には、その予想を遥かに越えていたようだ。

「わらちは、魔法使いなんです」

えーっと……。

ツッコミを入れるべきなのかな？　と思わなくもなかったけど、と、りあえずここは黙って話を聞いておくことにする。

「わらちは、昔を懐かしむ懐古の強い念に引き寄せられて、その人

のもとを訪れます。昔を懐かしむ心って、誰でも持っているものだと思います。今回は、潮騒くんの懐古の念によって、この場に紛れ込ませていただきました」

彼女は海路くんとあらかじめ会い、今日のことを聞いて、この学校に来た。

魔法の力を使い、タイムカプセルと一緒に埋めたメンバーのひとりだったと思わせて、紛れ込んでいたのだという。

「ただちよつと魔力が弱いところがあつて、思いどおりにいかなかった部分も……。ロリちゃんって呼ばれてたなんてこと、わらちは望んでなかったです……」

蚕ちゃんは少しいじけたような表情で、そう愚痴をこぼす。

確か最初にロリちゃんって呼んだのは……美子ちゃんだ。

考えてみたら、小学生同士が呼び合うあだ名なんだから、そんなあだ名をつけられているわけないよね。

「ふふ、あたしってどうも、靈感みたいなのがあるみたいなのよね。だから、ロリちゃんがかおかしいつていうのは、初めから感じていたわ。でも面白そうだったから、なにも言わずにいたのよ」

彼女はやっぱり平然とした顔でそう言い放った。

そういえば美子ちゃんは、そのあと他のみんなが来るたびに、蚕ちゃんの容姿に注目させて、ロリちゃんと呼ばれていたという方向に流れを操作していたようにも思える。

海路くんだけはロリちゃんって呼ばなかったけど、それはあらかじめ会っていたからってことか。

「だいたいわらはは、十五歳なんです。美子さんたちより年下なん

ですから、少し幼く見えるのは当然なんです」

反論する蚕ちゃん。でも、

「あら、十五歳にだって見えないじゃない。せいぜい十歳くらい？
ほら、やつぱりロリちゃんがピッタリだわ！」

「はみゆくん、美子さんは意地悪です」……」

案の定、美子ちゃんの反撃を食らっていた。

だけど……。

どうも腑に落ちない。

蚕ちゃんは海路くんの懐古の念に引き寄せられてこの学校に来た
と言った。

でもそれだけなら、べつに蚕ちゃんがわたしたちの中に紛れ込む
必要もないと思う。

わたしたちは今日、この屋上に至るまで、いろいろと不可思議な
状況に陥っていた。家庭科室の火事とか、動く人体模型とか、勝手に
鳴り出すピアノとか、歌う音楽家の肖像画とか、屋上の植物とか
……。

蚕ちゃんが来てくれたのは、そういった事態からわたしたちの身
を守るため、ということだったのだろうか？

とすると、蚕ちゃんのあの踊りは、そのための魔法だったという
ことになる。

……どうして踊りなのかは、よくわからないけど。

とはいえ、仮にそう考えたとしても、不可解なことはまだたくさん
ありそうなのがする。

わたしが頭を悩ませている、そんな中。

海路くんがするりと前に歩み出て、蚕ちゃんの横に並んだ。そして、それを見た蚕ちゃんは、こんな言葉を続けた。

「潮騒くんは、一年前に交通事故で亡くなりました。ここにいる彼は、いわゆる幽霊なんです」

……え？

わたしは耳を疑った。

だけど、そう言われれば海路くん本人にも、不可解な点はたくさんあった。

その最たるものが、天井が崩れてきたときのことだ。

わたしは海路くんに突き飛ばされる形で助かったけど、そのあと、声はしたけど姿は見えていない。

分断された保黒さんたちのほうにも、いなかったのだろう。

幽霊だから、瓦礫に潰されても問題なかった。瓦礫の中に隠れていた、ということなのだ。

そのあと人影が見えたとき、それを追うように促したのは蚕ちゃんだった。

ドアをすり抜けてわたしたちを導いた、あの人影。

その人影は幽霊の海路くんで、蚕ちゃんはそれを知っていたのだ。

海路くんは幽霊。

そう考えれば、最初に遅れて来たのも頷ける。

集合時間の四時ではまだ明るかったから暗くなるのを待っていた。そして夕立の雲のおかげで日没を待たずに暗くなったため、その夕

イミングでわたしたちの前に現れたということなのだろう。

実際に言葉にしてみると、海路くんはいつもの笑顔のまま、小さく頷き返してくれた。

「やっぱり、そうだったのね」

衝撃の事実には、納得しているような声を上げたのは、わたしすぐ横に立っていた美子ちゃんだった。

「……………やっぱり……………？ 美子ちゃん、知ってたの？」

「知ってたというわけでもないけど、そういう話を、前もって聞いていたのよ。……………来武士くんからね」

え……………？

質問に答えてくれた美子ちゃんという言葉聞いて、わたしは余計に疑問符を浮かべる。

どうして、来武士くんから？

そんなわたしの視線を感じたからだろう、美子ちゃんはさらに説明を加えてくれた。

美子ちゃんは昔、来武士くんからラブレターをもらい、告白されたことがあったのだという。

結局つき合ったりはしなかったものの、たまに連絡を取ってはいたらしい。

今では、ケータイの番号も交換していた。

今回集まるということ、美子ちゃんは数日前にも連絡を取っていた。

そこで来武士くんから聞いていたのだ。

海路くんが、事故で亡くなったという噂を小耳に挟んだ、と。

来武士くんは、海路くんとケータイの番号とメールのアドレスは交換していたけど、引越した家の場所や電話番号までは知らなかったらしい。

海路くんが最初に姿を見せたときに言っていたように、ケータイもメールもつながらない状況で、確認しようにもできなかったのだろう。来武士くんとしても、確実な情報として知っていたわけではなかったのだ。

来武士は、「もしそうなら、みんなに連絡したほうがいいのかね？」と美子ちゃんに相談した。

それに対する美子ちゃんの答えは、否、だった。

来武士くんと仲のいい土布先くんも含め、誰にも話しちゃダメだと、美子ちゃんは念を押した。

事実かどうかもわからないのなら、せつかくの気分には水を差すこともない、そう言っただけ。

そっか……。美子ちゃんと来武士くんは、知ってたんだ。

だから最初に海路くんを見たとき、来武士くんの反応がちょっとおかしかったのね。

「ただ、なにかおかしいという感じは、ずっとしていたの。それは来武士くんも同じだったみたいね。ちらちらとあたしに視線を向けてきていたし」

「やっぱりちょっと、怖いなって思いもあってさ……」

ばつが悪そうにぼやく来武士くん。

あっ、そっか。だから美子ちゃんは自ら来武士くんの手を握ったりしてたんだ。なんだかんだ言っても、優しくて面倒見がいいんだ

よね、美子ちゃんって。

でも……。

わたしはじつと海路くんを見つめる。

海路くんも、微かな笑みを浮かべながら、わたしを見つめ返してくれた。

否定の言葉はない。

やっぱり、海路くんは幽霊なんだ。

そんなわたしの考えを読んだかのように、美子ちゃんが口を開いた。

「そうすると笑歌は、雷怖い〜とか言いながら、幽霊に抱きついてたってわけね」

「は……はう〜」

美子ちゃんは、いたずらっぽい笑みを浮かべながら、そんなからかいの声をかけてきた。

わたしには、はう〜とうなることしかできなかった。

だけど、そんな言葉を聞いた海路くんは、笑顔から寂しそうな表情に切り替えて、わたしに控えめな視線を向けていた。

「……そうだよね、幽霊だもん。……ぼくのこと、やっぱり怖いって思うよね……」

泣きそうな声を漏らす海路くんに、わたしは、

「そ……そんなことない！ 海路くんなら、幽霊だって怖くないよ」

素直な叫び声を上げていた。

わたしたちは、和やかな雰囲気にも包まれた。

美子ちゃんの言葉が引き金となって、場が和むというのは、よくあることだった。

美子ちゃんつてたまに、ちょっとひどい言葉を放ったり、ちょっとひどい行動を始めたたり、といったことがあるけど、それはやっぱり、周りを和ませるためなんだ。

わたしの頭をはたくのだって、きっとそうということなんだ。……たぶん。

みんなと同じように、わたしも穏やかな気持ちになっていた。

ただ、ここまで聞いてもまだ、納得できない部分があった。

海路くんがどうしてこの屋上にタイムカプセルを埋め直したのかということだ。

前にも考えたとおり、少しでも長く懐かしい仲間との時間を楽しみたい、という理由は確かにあったのだろう。でも、それだけではないような気がする。

わたしは、そう考えていた。

そのことを口にしようとするとわたしだったけど、それよりも早く、蚕ちゃんが疑問の声をこぼした。

「でも、なにかおかしかったんですよね」

蚕ちゃんの疑問の声によって、和やかな雰囲気は崩された。

「わらちの魔法と、潮騒くんの想い。それ以外に、別の思念が入り混じっていたような気がしますです」

口を閉じて注目するわたしたちの前で、蚕ちゃんはそう言葉を続ける。

誰も答えを見つけれない。

沈黙の時間が訪れた。

「……それは、ウチだよ」

その沈黙を破ったのは、保黒さんだった。

「ウチは……海路くんのが好きだったの」

小学校四年生の当時、いや、今でもその想いは続いているのだろう、海路くんのが好きだったという彼女。

引っ越してしまい、会えなくなっただけはいたものの、みんなで約束した今日、来てくれるだろうということはわかっていた。

だからあらかじめ学校に入り、いろいろと仕込んでいたのだという。

保黒さんは数日前からこの町に戻ってきていた。

そして仲のいい二之腕さんと、たまたま連絡の取れていた頼さんと三人で、ここ、東山小学校に入った。

「あたいは、夕菜の想いを知ってたからね。喜んで協力したんだ」

二之腕さんは、穏やかな表情で言葉を添えた。頼さんも、黙って頷いていた。

保黒さんは最初に、タイムカプセルをどこかに移動させようと考えた。

でも、埋めたはずの「みんなの木」の根もには、タイムカプセルがなかった。

掘り起こした跡が微かにあり、あまり時間が経ってなさそうだったことから、今日来る予定の誰かが移動させたのだろうと予想はついた。

少しでも長く懐かしい友人たちと一緒にいたいという気持ちは、やっぱりみんなも同じなのだ。

ともかく、タイムカプセルがないとなれば、みんなはそれを探さずだ。

勉強をともにした小学校に集まるのだから、隠すとしたらおそらくは校舎のどこか。

それも容易に想像できた。

だから、職員室にラジカセを持ち込んでおいたり、家庭科室にもタイムマーで着火する装置をセットしておいたり、仕掛けを施していった。

「家庭科室の火は、思ったより強くなりすぎてしまったけど。ロリちゃんが魔法で水をまいてくれなかったら、大変なことになってたよね」

第二特別棟の一階で天井が崩れてきたのも、彼女が仕込んでいた仕掛けだった。

もともと老朽化がひどく、崩れかけていた部分を発見した彼女は、二之腕さんと頼さんにも協力してもらい、リモコンで激しく振動する機械を設置しておいたようだ。

少し振動を加えれば、天井の一部が崩れて落ちてくるだろう。

さりげなく海路くんの近くに寄っておき、その下を通過中に天井を崩せば、彼はきっと助けてくれるに違いない。

そんなシチュエーションを考えていたらしい。

「こつちの仕掛けも、老朽化がひどすぎたからか、思った以上に崩れてしまったんだけどね」

ダメだね、計算ミスばかり。

保黒さんは自嘲気味につぶやいていた。

「天井が崩れて、瓦礫で分断されてしまったとき、ウチは焦ったよ。だって、海路くんと分かれてしまったんだから。もう一方には江窪さんがいたから、ふたりを一緒にしてしまったと思ったの」

わたしに視線を向けながら、保黒さんはそう言った。

小学校の頃、海路くんがわたしに想いを寄せていることには気づいていたのだという。

今でもそうなのかはわからないけど、失敗した。そう思い、急いで合流しようとした。

第一特別棟へ向けて廊下を進んだ保黒さんたち。

ふたつの特別棟を結ぶ廊下部分は二階建てだったから、一旦第一特別棟まで戻り、階段を上って第二特別棟を目指した。

ちょうどわたしたちが理科室から出て、階段を上り音楽室へと向かう辺りで、わたしたちを視界に捉えられる距離にまでは来ていた

らしい。

ただ、どうも海路くんがいないようだということに気づいた。しかもわたしたちが入っていった音楽室からは、なにやら音楽が流れてくる。

保黒さんたちは、ドアの窓から中をうかがっていたそうだ。もちろん二之腕さん、頼さん、土布先くんも一緒に。

「天井が崩れて分断されたあと、話を聞いていた。だからオレも、保黒さんに協力した」

土布先くんは、いつもどおりの静かな口調でそう言った。音楽室の様子をうかがっているとき、二之腕さんが不注意で物音を立ててしまったらしい。そういえば廊下側からなにか音が聞こえたような記憶もある。

やがてわたしたちが音楽室から出たときには、彼女たちは音楽準備室に隠れていた。

隠れる必要なんてなかったけど、どうしても海路くんがいないのが気になったという。

準備室のドアから外の気配をうかがっていると、最初にひとり通り過ぎ、あとから四人通っていったように思えた。

すぐに追いかけ始めると、うつすらと見える後ろ姿は、海路くん以外の四人。

とすると、最初のひとは海路くんだったということになる。

全員いるのならば安心した保黒さん。

みんなが階段を上り、屋上へ向かっていることに気づく。

きつとタイムカプセルはそこにあるに違いない。この頃には、そ

う予想できていた。

だったら気づかれないようにこっそり背後から近づいてびっくりさせる、といういたずら作戦を決行しよう。

保黒さんは二之腕さんたちに、そう提案した。

タイムカプセルを見つけるという一大イベントなのだから、少しでも印象に残る演出を追加したいと思ったわけだ。

でも、背後から驚かすなんて地味な演出よりも、何倍も土派手な演出が、屋上では繰り広げられることになったのだけだ。

さすがに異常を察した彼女たちは、屋上に飛び出してきた。そこからは、わたしたちも見ていたとおりだ。

「ともかくウチは、罪を償わないと……」

彼女は神妙な面持ちで、震える声をしぼり出した。

そっか……。

確かにタイムカプセルを掘り返すイベントだったとしても、火事を起こしかけたり、天井を崩したり、少々規模が大きくなりすぎた。器物損壊、ということになるのだろうか。

それを言ったらわたしたち全員が、不法侵入、ということになると思うのだけど……。

今にも涙をこぼしそうな保黒さんの表情に、なんとなくいたたまれない気持ちになっていたわたし。

だけどわたしには、彼女になにも声をかけてあげられなかった。

「べつに、なにも償うことなんてないでしょ。誰もケガをしたりしてないんだし」

わたしとは違ってしっかり者の美子ちゃんは、迷うことなく意見を述べた。

さすが美子ちゃんだわ。わたしも、そう言っただけでよかったんだ。

「でも、校舎を崩したりもしたし、消し止めたけど火事を起こしてしまった。器物損壊の罪は免れないでしょ？」

それでも保黒さんは、自分の罪が裁かれることを覚悟しているかのように、美子ちゃんに言い返していた。

みんな、口ごもってしまふ。

ただひとりを除いて。

「そんなことないよ」

優しい声で保黒さんを包み込んだのは、いつもどおりの微笑みをたたえた海路くんだった。

「この校舎は、もうすぐ取り壊されることになってるんだ」

海路くんはゆっくりと、ただどはつきりとした声で、そう続けた。

「取り壊すときは爆破して解体することになってるから、爆薬が設置してあつたんだよ」

……え？ そうなの？

でも、そうだったらわたしたち、勝手に入ってきちゃったけど、すごく危険だったんじゃない……。

わたしはそう思ったのだけ。

海路くんの顔が、不意にいたずらっぽい笑みに変わる。

「ま、そういうことにしておこう」

そう言つと、ウィンクをした。

「大丈夫。ぼくの親戚は町長なんだから、ちょちょいっと操作すれば、あつという間だよ」

「うわ、海路くんって、そういうことをしちゃうような人だったんだ！」

意外に思ったわたしは、つい正直に思ったことを言葉に出してしまつた。

さすがに悪かったかなと、すぐに口を押さえはした。もちろん手遅れなのだけ。

だけど海路くんはそれを聞いても動じた様子はなかった。

「大切な人たちのためならね」

ニコツと笑う海路くん。

今度はさつきと違って、とても優しい微笑みだった。

はうつ、海路くん、カッコいい……。

思わずそんな想いが湧き上がってくる。

そんなふうになんかわたくしが考えているなんて、気づきもしないのだから、海路くんはさらに話を続けていた。

「ぼくは一年前に死んだあと、今住んでいる家の辺りを漂っていたんだ。でも、タイムカプセルを掘り返す約束を覚えていたから、数日くらい前だったかな、この町に戻ってきたんだよ」

幽霊となった彼は、生前に関わりの深かった場所では存在できないらしい。

この町で昔住んでいた家は借家だったから、今は別の人が住んでいる。そのため、そこにはいられなかった。

学校でみんなを待つということも考えたけど、久しぶりに学校に来たんだという感慨をみんなと分かち合いたいと思い、それはやめておいた。

だから海路くんは、親戚である町長の家に身を置いた。

もちろん姿を消していたから、親戚の人は誰も気づくはずがない。そこでひっそりと時間が経つのを待っているあいだに、廃校になったあと、そのまま放置されていた東山小学校の取り壊し計画のことを耳にした。

どうやら若者たちが夜な夜な侵入し、溜まり場になっていて、近所の住民から不満の声が上がっていたらしい。

夜中でも大声で話したり、花火やら爆竹やらを持ち込んだり、そういうことがあったそうだ。

それで、どうにか資金の目処も立ったことから、今になってようやく取り壊し計画が進み始めた。

まだ正式に発表されてはいなかったけど、秋頃から本格的に重機が入り、取り壊し作業が開始される場所だったのだという。

「だからこそ、みんなの心にこの学校での思い出をより深く刻み込んでもらいたくて、タイムカプセルを屋上に隠すことにしたんだ」

海路くんは淡々と語る。

取り壊しのことを聞いて、いても立ってもいられなくなった彼は、この学校へと足を運んだ。正確には、すーっと飛んできたと言うのが正しいのかもしれないけど。

ともかく、廃校となって久しい小学校に入ると、幽霊となっていた彼は、自分と同じような存在がたくさん漂っていることに気づく。学校には怪談がつきものだけど、それはある意味、当然のことらしい。

多感な時期のたくさんの生徒が集まるのだ。そんな生徒たちの様々な思いが、学校には残る。

海路くんみたいに死んでしまった生徒の幽霊もいれば、付喪神と
いうのだろうか？ 生徒たちの思いが物に宿ったような霊もいる。

そういった霊たちは、自分たちの存在に気づいてほしいのだと、海路くんは優しく語った。

人体模型や骨格標本も、ピアノや音楽家の肖像画も、屋上の植物たちも、必死にアピールしていたんだ、と。

そんな幽霊たちの存在に気づいてほしくて、みんなを理科室や音楽室へと導いていった。

そして最後に、タイムカプセルを埋め直しておいた、この屋上へとたどり着く。

ここで見た花火が、海路くんにも強く心に残っていたから。今日がちょうどその花火大会の日だったから。

だから、最終地点としてここを選んだ。そういうことだったのだ。

「この学校での思い出と、ぼくがみんなと一緒にいたんだというこ
とを、忘れないでほしい」

「うん……」

ちよつと悲しさをも含んだような海路くんの声に、みんな、肯定
の意思を返していた。

「そして、もうひとつ……」

すつと体の向きを変え、わたしを正面に見据える海路くん。

「江窪さんに、想いを伝えたかった。だから、その手紙を渡したん
だ。でも……」

でも……？

どうしてそこで、そんな接続の言葉を用いるのか、わたしには理
解できなかった。

困惑した表情のわたしに、海路くんはさらに言葉を続ける。

「でも、余計なことだったのかもしれないね。渡さずに、捨ててしま
えばよかったのかもしれない。だってぼくは、もう死んでるんだ

から……」

寂しそうな、苦しそうな、そんな顔で微かに声を震わせながら言う海路くんに、わたしははつきりと言い返した。

「余計なことじゃないよ！ えみか、嬉しいよ！ほんとに、ありがとう。えみかも、海路くんのことが……好きだよ！」

それを聞いて さっきは海路くん自身の睨みつけるような視線によって言うのを止められたその言葉を聞いて、彼はいつもの見慣れた笑顔を、いや、今まで見たこともないほどに明るい笑顔を、わたしに向けてくれた。

「江窪さん、ありがとう。だけど、ぼくのことを忘れてほしくはないけど、もし他にいい人が現れたら、気にしないで幸せになってね。江窪さんの幸せが、ぼくの望みなんだから」

「あう……でも……」

わたしは意を決して、生まれて初めての告白に対して、生まれて初めてのイエスの言葉を返したのだ。

相手はもうこの世にいない存在だとわかってはいるけど、わたしの想いに嘘はない。

だから、一生このまま彼だけを想って生きていこう。そう覚悟を決めていたというのに。

そんなわたしに、

「幸せになってくれなかったら、呪っちゃうからね！ ぼくは幽霊なんだから！」

海路くんは、そう言って微笑みかけた。

「はう。……う……うん、わかった……」

世界でただひとり、わたしだけに向けられた、最高の笑顔によって飾られたそんな言葉を聞かされたら、否と答えることなんてできるはずもなかった。

海路くんは満足そうに微笑むと、すーっとその姿を薄れさせながら、吸い込まれそうなほどの星空へと昇っていく。

やっぱり、本当に幽霊だったんだ。

そして今、成仏っていうのかな？ 彼はようやく、天に召されようとしているのだ。

それを感じて、温かな雫が瞳を伝って流れ落ちていくのを、わたしは止めることができなかった。

「みなさんで潮騒くんの想いを 彼の最後の姿を、笑顔で見送ってあげてくださいです」

蚕ちゃんが言葉を添える。

自分の役目はこれで終わりだと、締めくくるかのように。

「わかったわ。でもロリちゃん、あなたも最後の仕事をするのよ。海路くんを見送るために、踊りなさい！」

湿っぽくなっていた中に、美子ちゃんの凜とした声が響く。

「ほえ？ どうしてですか？ わらちが踊るのは魔法を使うためで

……」

「踊れ！」

「はひっ……」

焦りながら反論を返していた蚕ちゃんだったが、美子ちゃんの一喝によって、言われたとおり踊り始めた。

あははっ！ 楽しく送り出してあげようってことね。さすが美子ちゃんだわ！

と、仕方なく踊り始めていた蚕ちゃんを、みんなと一緒に笑顔で見つめていたのだけど。

美子ちゃんはそんなわたしに向けて、こんなことを言い放った。

「なにやってんの、笑歌。あんたも踊るのよ！」

「えええ！？ ど……どうして〜？」

「あんたが一番、海路くんに想いを返してあげなきゃいけないでしょうが！」

そう言われたら、わたしとしても拒否できるはずがない。

わたしも蚕ちゃんと合わせるようにして、海路くんが昇っていく満天の星空へと向けて、踊り始めるのだった。

それを見た美子ちゃんの言葉。

「ふふふ、本当に踊ったわ、この子！ 笑歌をからかうのって、やっぱり楽しいわね！」

はう、美子ちゃんひどい……。

だけどそれも、彼女なりの優しさなのだ。

それがわかつているわたしは、蚕ちゃんとともに踊り続けた。

夜空へと昇っていく海路くんも、そんなわたしたちの様子を見て、笑顔をこぼしているように思えた。

その微笑みに溶け込んでいくかのように、やがて彼の姿は光のベ

ールに包まれ、そして、完全に消え去った。

残されたわたしたちの心には、かけがえのない夏の日の思い出が、この先もずっと消えることのない青春の証として刻み込まれていた。

ふふふ、幽霊のあの子、ちゃんと想いを伝えられたんですね、よかったですわ。

わたくしも、ちょっとだけ頑張ってみた甲斐があったというものです。

最後の夏の、いい思い出になりました。

もうこれで思い残すこともありませんわ。

あとはみなさんと一緒に、もうひとりのあの子に最後のお礼を伝えて、すべて終わりに致しましょう。

気分が晴れやかだからなのでしょうか、降り注ぐような一面の星空が、今まで長年見てきた中で一番輝いているように思えました。

「お世話になったね〜」

「なったのね〜」

「はみゆ〜ん、お達者で〜なのです〜」

わらちは天に昇っていくわたぬきくと白田さんに精いっぱい手を振っていました。

彼らに合わせて、もっちゃんやベンちゃん、れんちゃんたちも一緒に空へと昇っていきました。

笑歌ちゃんたちが帰ったあと、わらちは学校に漂っていた幽霊たちに挨拶回りをしましたです。

廃校となったこの東山小学校は、もうすぐ取り壊されてしまいます。でも、それを目前にして、みんなは笑歌ちゃんたちグループにその存在を示すことができました。

同じく幽霊だった海路くんを除けば、全部で七人だけとはいえ、彼女たちの心の中に残ることができたのです。

それだけで満足だったと思いますです。

校舎が取り壊されてしまったらどっちにしろ、ここに残るわけにはいかないのですから、素直に成仏することに決めたのは、正しい判断だと言えるはずですよ。

「つぶつぶ、ほんとにありがとうございました」

ふわ。

長い黒髪を揺らしながら、ひとりの女性がわらちに向けて澄んだ

綺麗な声を紡いでくれました。

女性といつても、性別なんてないはずですけど。

だって彼女は、この東山小学校、そのものなのですから。

「正確には、この学校に憑いた付喪神、ですわ」

ニコツ。穏やかな笑みをこぼす彼女は、わらちの心の中を読んだみたいでした。

彼女、なんて呼ぶのも悪いでしょうか。

学校ですから、学子がくこさんと呼ぶことにしましょう。

「きゃ〜〜、そんな呼び方、嫌ですわ〜！ せめてマナビーヤとお呼びください〜！」

……いや、あの、そっちのほう恥ずかしくはないですか……？

「いいんです！」

わらちはとりあえず、曖昧に愛想笑いを浮かべるのです。

と、そんなことよりも、ひとつだけ訊いておきたかったことが残っていました。

「どうでもいいですけど、え〜っと、マ……マナビーヤさん、あなた、今回のことにいろいろ手を出して楽しんでましたですね？」

ちょっと名前を呼ぶのが恥ずかしかったんですけど、質問を投げかけました。

わらちは気づいていたのです。

今回の件 家庭科室の火事だったり、廊下の天井が崩れたこと

だったり、理科室と音楽室での幽霊たちだったり、屋上での数々の不思議な現象だったり。

保黒さんの仕掛けも中にはありましたが、それらのうちの多くは、それぞれの場所に残された幽霊たちが存在を知ってほしくて起こした現象でした。

だけど、それぞれの幽霊たちだけの力じゃ、あそこまで大きなことはできません。

だから、わらちはあるひとつの可能性を考えていました。

一連のことを引き起こしていた一番の立役者、それはこの場所で最も大きな力を持つ存在、

そう、この学校そのものである、マ……マナビーヤさんだったのだと。

「ええ、そうですね」

否定する気なんてさらさらない、といった様子で、彼女はあっさりとわらちの言葉を認めました。

「でも、どうしてそんなことをしたんです？」

「うふふ、だってわたくしは、小学校に憑いた付喪神なんですから、いたずら好きなのは当たり前でしょう？」

続けざまの質問にも、彼女は事もなげにそう答えを返してきました。

はみゅ〜ん、やっぱり幽霊とか物の怪の類って、精神構造が違うみたいですよ。

「物の怪ではないですよ、付喪神です。神ですよ、神。うふふ」

満面の笑顔を浮かべながら、彼女の姿が光に包まれていきます。彼女もまた、他の幽霊たちと同じように、取り壊される前に成仏するつもりなのです。

「……お疲れ様です、マナビーヤさん」

「ええ。あなたはまだ、これからも大変そうですけれど。頑張ってくださいね」

ニコツ。

温かな笑顔を残して、彼女は音もなく、空の彼方へと昇っていきましました。

「成仏していったね」

「そうですね」

長いあいだこの小学校を見続けてきたマナビーヤさんが離れていくのを見送って、わらちは少し、ジーンと胸が熱くなっていました。

……って、あれ？

「やあ、どうも」

「はみゅくん、どうしてここにいるんですか!？」

なにやらいきなりわらちの隣に現れていたのは、もう成仏したはずの海路潮騒くんでした。

「ん？ だってさ、ほら、ぼくにはやることが残ってたから。おじさん……町長さんの夢枕に立って、爆破の件とか、いろいろと働いてもらわないといけないでしょ？」

「あゝ、確かにそんなことを言っていましたね」

だけど、本当にそこまで町長さんの思考を操作できる霊力を、海路くんは持っているのでしょうか。

「ま、頑張っただうにかするよ」

わらちの考えていることがわかったのか、平然とそう言っただけの海路くんでした。

彼はさらに言葉を続けます。

「それに、蚕ちゃんにもちゃんとお礼を言っていなかったからね。ほんとに、ありがとう」

「いえいえ。いいんです。それがわたちの役目ですから」

わたちの答えに、海路くんはいつもの優しい笑顔を送ってくれました。

「それにしても、ほんとによかったんですか？ 笑歌ちゃんが海路くんのことを忘れて、他の人と幸せになっても」

最後にひとつだけ、と思っただけ、彼に質問をぶつけてみました。

「もちろん、嫌だよ。そんな相手ができたら、呪っちゃうかもね」

にっこりと笑顔のままの海路くんからは、そんな答えが返ってきてしまいました。

……う、うわ、この人、悪霊になるタイプの人ですか！？
なんて焦っているわたちを見て、

「あはははは！」

と大声で笑い始めました。

「大丈夫。ぼくは町長さんのほうの用事が済んだら、今度こそ成仏するつもりだから。そのあとはただ、空から静かに江窪さんのことを見守ることにするよ」

「そう、ですか。安心しましたです！」

「……まあ、恨みの念とかは、飛ばしちゃうかもしれないけどね」
にっこり。

笑顔の裏に隠れた鬼が、ちょっとだけ見えたような気がしました。
笑歌ちゃんも、なんだか大変そうです。

でも、

なるようにしかならない。

そんなもんです、世の中は。

「あはは、まだ小さいのに、年寄りじみてるね、蚕ちゃんは。さすが、『懐古ちゃん』っていうだけはあるね」

海路くんはそう言い残すと、すーっと姿を消していきました。

「ふう、やっと終わったです」

家に着いたわらはちは、ようやく安堵の息をつきました。

そして今回の役目に就いてからずっと思っていた言葉を吐き出します。

「はみゆくん、幽霊のお相手なんて、もう嫌です」！

そう、わらはちはずっと怖かったのです。

そりゃあ、海路くんはちよつとぼーっとしているけど爽やか系だし、学校に憑いていた他の霊たちも、話してみれば普通に意思の疎通ができていたし、怖い感じの幽霊じゃなかったのは確かですけど。だいたいもともと怖がりなわらが、こんな役目に就かなくちゃいけないなんて。

それもこれも、全部お姉ちゃんが悪いんです。

「誰が悪いですって」？

「はみゆくん!？」

いきなり背後からねつとりとした言葉を浴びせかけられたわらはちは、思わず震え上がってしまいました。

慌てて振り返ったわらちの目の前に立っていたのは、三歳上のお姉ちゃんでした。

「お姉ちゃん、わらち、ちゃんと役目を終わらせたです」!

「はいはい、ご苦労様。でも、なんか不満たらたらって感じのオーラを放ってたような気がしたけど」？

わらちの報告に、お姉ちゃんはニヤニヤ笑いを浮かべながら訊き返してきます。

なにもかもお見通しって様子でした。

それならばと、わらちは思っていることをすべて吐き出してぶつけてみることにしました。

「うゝ、だって、お姉ちゃんがいきなり引退するから、わらちが受け継がなきゃいけないかったんじゃないですか〜！」

うちの家系は代々、この役目を受け継ぎます。

なぜか女性しか産まれない、うちの家系。

ついこのあいだまでは、今日の前にいるお姉ちゃんの役目だったのです。

それなのに……。

「だってさゝ、あたしは彼氏とラブラブしたかったんだもん　仕方ないじゃないっ！」

「そんな理由で、代々受け継ぐ役目を放棄するなですゝゝゝ！」

「放棄じゃないってば。引退よ、引退！　ま、でもあんたは未っ子だから、しばらく引退できないでしょうけどね！　一番上のお姉ちゃんの子供が大きくなるまでは、我慢しなさい！」

「はみゆゝん、ひどいですゝ。なんだか納得がいかないですゝ」

「気にしなさんな。それに、あんたはこの役目に一番向いてるわ。なんたつて、あたしたちお姉ちゃんの愛情を一身に受けて育ててきたんだから」

「はみゆゝん……」

「懐かしの魔法『なつまほ』を受け継いだんだから、しっかりと役目を果たしなさい。あんたを必要としている人が、まだまだたくさん待ってるはずよ」

「お姉ちゃん……」

「……あつ、彼からメールだ。んじゃ、あたしは行くね！ 蚕！
ばいび〜！」

「はみゆ〜ん、やっぱりひどいです〜、納得がいきません〜！」

わらちの苦悩は、これからも続きそうです。

「あつ、そうそう、蚕。世の中にある怖いものって、幽霊だけじゃなくて、まだまだたくさんあるんだからね。きつとこれからも、たくさん怖い目に遭うことになるわよ！ いっひっひ、ま、せいぜい頑張りな〜！」

「はみゆ〜ん、お姉ちゃんが追い討ちをかけます〜！ というか、早く彼氏のところでもどこでも、行ってしまえです〜！」

わらちは思いました。

世の中で一番怖いのはお姉ちゃんに間違いないと。

ゴッソ〜！

……殴られました。

「あたしはあなたの心を読めるっつての、忘れるな〜！」

「はみゆ〜ん、納得がいきません〜……」

どなたか、わらちがお姉ちゃんたちに優しくされていた昔に戻れるような、そんな『なつまほ』を使ってはもらえませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5203y/>

なつまほ

2011年11月16日02時54分発行